

ジュリアン・リー——元アメリカ大統領との対話

政界引退後： その遺産

AFTER POWER: THE LEGACY

元大統領の、型破りで率直な言葉

政界引退後：その遺産

(AFTER POWER: THE LEGACY)

元大統領の、型破りで率直な言葉

著者：ジュリアン・リー (Julian Lee)、元合衆国大統領
との対談を記録

Copyright © 2025 THE LIVES MEDIA。すべての権利を
保有します。無断複製を禁じます。

編集部より

本書は実在の物語、出来事、背景に基づいていますが、プライバシーの尊重と特定の個人への影響を避けるため、登場人物の氏名および一部の個人を特定しうる詳細は変更、簡略化、あるいは文学的な形式で再構成されています。

本書の一部は、関係者の個人的な視点から語られており、その時点での彼ら自身の体験と認識を反映しています。これらの見解は、必ずしも THE LIVES MEDIA の立場と一致するものではありません。

文章表現に関しては、編集部が必要な修正を加えましたが、登場人物の個性を尊重し、物語の精神と活気を保つため、登場人物本来の素朴な質感と語り口を最大限に維持するよう努めました。

編集部



はじめに

(あの運命的な出会いから約一ヶ月が経った今、私はここに座っている。記憶は昨日のことのよう、今も鮮明だ。)

世界は彼を、金融市場を揺るがした政策決定を通じて知っている。地政学的な地図を塗り替えた交渉を通じて。そして、何百万人もの前での演説を通じて。

彼は元大統領である。かつて世界の権力の中枢に立った人物。

しかし、この四日間の対話は、彼の政治的遺産を振り返ることを目的としたものではなく、最終的には、未来への遺産を築き上げることになった。それは、一見単純に見える一つの問いから始まった。私が長年準備してきた問いだったが、それが全く異なる扉を開くことになることは、思いもよらなかった。

「権力の座を離れて、閣下は何をご覧になりましたか」

（その問いの後の沈黙の瞬間、彼の遠い眼差しを、今も覚えている。まるで私ではなく、時間の壁の向こう側を見つめているかのようにだった。）

彼の答えは、認識の旅、思考の川を開き、私の当初の予想をはるかに超えて私を遠くへと運び去り、そして閣下が私に託してくださった、一つの哲学的遺言をもって締めくくられた。

私たちは、民主主義制度の脆弱さから話を始めた。大国間の静かなる対立へ。そして、UFO から、彼がかつて垣間見た「影の評議会」の存在に至るまで、科学ではまだ説明できない現象についての暴露へ。

（私はそれらが、ばらばらのテーマだと思っていた。）

しかし、彼はそれら全ての道を、ただ一つの基準点へと導いた。人類の道徳的退廃。そして、精神的な目覚めの必要性。

このインタビューは、ゆえに、もはやジャーナリズム作品ではなくなった。それは証しとなった。かつて権力の頂点に立ち、そして痛々しいほど単純な一つの真実に気づいた人物の、証しに。

真の権力とは、世界を変えることにあるのではない。世界によって自らの心が変わるのを防ぐ能力にあるのだと。

問いを立てる者として、私は今、一歩下がる。そして読者の皆様を、この対話へのご案内し、旅の終わりに、閣下が残された『心の書簡』を受け取っていただきたい。最終的な答えを見つけるためではない。私と同じように、自らにとってより重要な問いを開くために。

ジュリアン・リー (Julian Lee)

対話記録者

一日目

（部屋には私たち二人きり。午後の柔らかな光が大きな窓から差し込み、棚に積まれた古い本に金色の埃の層をかけていた。カメラもマイクもなく、ただ私の小さなレコーダーがテーブルに置かれているだけだ。）

ジュリアン・リー：

こんにちは、閣下。

この度の面会にご同意いただき、ありがとうございます。
プライバシーを尊重するため、この対談中はお名前をお呼びしないこととさせていただきます。

（私は始める前に、一度深く息を吸った。）

最初の質問ですが…ご退任後、どのようにお感じになりましたか。

何か…成功したこと、未完のこと、あるいは後悔されていることはございますか。

（彼は椅子に軽くもたれかかり、遠くを見つめた。まるで自らの一生を振り返っているかのようだ。）

元大統領：

こんにちは。

そして、その配慮ある問い方に感謝する。

正直に言うと…

退任して最初の感情は…安堵だった。

在任中は、毎日が絶え間ないプレッシャーの連続だった。

真夜中の緊急会議。

一言間違えただけで…株式市場全体が揺らぐ電話会談。

何百、何千という人々の命を左右する軍事決定。

あの椅子から離れて…初めて自分が一人の人間であると感じたよ。

（彼は少し間を置いた。まるでその記憶を落ち着かせているかのようだ。）

任期については…

いくつか誇りに思うべきことがあると考えている。

私が推し進めたいいくつかの改革は、実際に成果をもたらした。遅々として、そして不完全ではあったが。

しかし、自分を欺くつもりはない。

多くの目標は達成できなかった。

やりたかったが…できなかったことがある。

制度のせいだ。

議会のせいだ。

メディアのせいだ。

君が新聞で読むことのない「影の権力」のせいだ。

あるいは…単に私が間違っていただけだ。

（彼の声が低くなった。これが最も話しにくい部分なのだと、私には感じられた。）

後悔か？

もちろんある。

たくさんね。

かつて空爆を承認したことがある…後になって民間人の死傷者が出たと報告された。

断るべきだった会談もあった。

信用しすぎた人々もいた。

そして何よりも…

「真実」よりも「政治」を選ばなければならなかった時があったことを、悔やんでいる。

だが、それがゲームに留まるための代償だった。

（彼は私をまっすぐに見つめた。すべてを見通すような、そして少し疲れた眼差しで。）

そして、それこそが今日、私が君とこうして話せる理由でもある。

一人の人間として。

一つの肩書きとしてではない。

ジュリアン・リー：

心を開いていただき、ありがとうございます。

お聞きしたいことがたくさんありますが…

まず、制度の問題からお伺いしたいと思います。

アメリカのような、真の意味での共和制をモデルとする政府でさえ、実際の運営にはあまりにも多くの問題があります…それを改善するためのご意見はございますか。

また、共産主義体制と比較して、共和制にはどのような…弱点があるとお考えでしょうか。

元大統領：

（彼は眉をひそめ、その目に興味深そうな光がよぎった。）

ストレートで、難しい質問だ。

私はそれが好きだ。

私たちはアメリカを「世界で最も偉大な共和国」と誇らしげに呼ぶ。

「全世界の民主主義を照らす光」だと。

そういったスローガンは演説では聞こえがいい。大きなホールに響き渡る。

だが、大統領執務室に座り、権力の機械を内側から見つめると、現実はそれほど輝かしくはないことがわかる。

我々の国家という船は非常に大きく、非常に頑丈だ。

しかし、その船体には「利益団体」という名のフジツボがびっしりと付着している。

そのため、動きが極めて遅く、重くなっている。

最大の問題は、私の見るところ、このシステムが金によって操られていることだ。

アメリカの資本と政治は、骨と髄のように固く結びついている。

大企業。

財界の大物。

ロビー団体。

彼らは選挙に出馬する必要はないが、その影響力は大統領よりも大きい。

私はかつて、クリーンエネルギーに関する法案が、国の未来にとって非常に良いものであったにもかかわらず、骨抜きにされ、意味のない文書に変えられてしまうのを見たことがある…ただ、石油会社のロビイストが加えた一文、一語のためにだ。

真の権力は、投票する国民の手にはない。

小切手を書く者たちの手にあるのだ。

（彼は一旦言葉を切り、一口水を飲んだ。その眼差しは遠くなり、まるで権力の回廊での見えざる戦いを追憶しているかのようだった。）

共産主義モデルはどうか？

嘘はつかない。私は独裁、検閲、自由の抑圧に決して同意しない。

それらは人間の尊厳に反するものだ。

しかし、認めなければならぬことが一つある。あまり心地よい真実ではないが。

彼らのシステムは、まだ理想を掲げていた頃は、一本の矢のように動くことができた。

速く。そして徹底的に。

彼らは議会との妥協に何ヶ月も費やすことはない。

メディアに足を引っ張られることもない。

厳しくも必要な決断を下すたびに、「支持率」が急落することを恐れない。

彼らはハンマーのようだ。障害物を即座に打ち砕くことができる。

一方、我々は複雑な機械のようだ。バランスを取るように設計されているが、協力しようとしぬ部品が多すぎて、歯車が噛み合わなくなっている。

我々の共和国の弱点はそこにある。

民主的であるほど権力は分散するが、危機の時代においては、速さが生死を分ける。

しかし、まさにその分散こそが、国民を鉄の拳から守る城壁でもある。

問題は、その城壁が金とメディアによって買収されてしまうと…

その民主主義という殻は、もはや仮面に過ぎなくなるということだ。

内側で腐敗しているものを覆い隠すための、美しい舞台に。

（彼は少し黙り、そして私を見た。）

改善したいかと、君は尋ねたね？

ああ、その問いのせいで、私はいくつの夜を眠れずに過ごしたとか。

もし魔法の杖を持っていたら、すぐにでも三つのことをするだろう。

（彼は三本の指を立てた。その眼差しは鋭くなり、まるで自分が長年戦い、熟知してきた戦いについて語っているかのようだった。）

第一に、最大の怪物に真っ向から挑む。選挙資金の提供とロビー活動を、極めて厳格に制限することだ。

なぜか？

それが我々の民主主義を蝕む癌だからだ。

現在の選挙はもはや思想の競争ではなく、金の競争になっている。

汚れた金、出所不明のスーパー PAC からの金が、一般市民の声を飲み込んでいる。

共和国の魂は、最も高い値をつけた者に売り渡されているのだ。

第二に、上院と下院の両方に任期制限を設ける。

ある者は四十年、あるいはそれ以上もその椅子に座り続けている。

彼らは理想を抱いてワシントンに来るが、あまりにも長く留まりすぎ、「沼」の一部となってしまう。

彼らはもはや故郷の民を代表するのではなく、利益団体、国防請負業者、国会議事堂を取り巻く企業を代表するようになる。

任期制限は、彼らを一人の普通の市民としての生活に戻ることを強いるだろう。

それは新しい血、新しい思想をもたらし、長年の政治家とロビイ st の間の有害な共生関係を断ち切る。

そして第三に、これは極めて重要だが…

選挙制度を徹底的に改革し、ゲリマンダーに終止符を打つことだ。

これは合法的な詐欺行為だ。政治家が有権者に選ばれる代わりに、自分たちのために有権者を選ぶべく、選挙区の地図を自分で描く。

これにより、両党にとって「安全な議席」が生まれ、候補者はもはや中立的な見解を持つ人々を説得する必要がなくなる。彼らは選挙に勝つために、自分たちの党の最も過激な有権者に媚びるだけでいい。

これこそが、我々の政治がますます分極化し、有害になっている理由なのだ。

（彼は手を下ろし、首を振った。疲労と無力感に満ちた仕草だった。）

だが、言うは易く、行うは…君も知っているだろう。

権力者の利益が脅かされると、彼らはまさにその権力を使って、自分たちの利益を守るのだ。

当初の理想が何であったかにかかわらず。

ジュリアン・リー：

それらの問題については、後ほど改めてお伺いしたいと

思います、閣下。

今は、制度についてもう少し深くお聞きしたいのです。
共和制が共産主義より自由であることは明らかです。

しかし、封建時代の政治についてはどうでしょうか？王
が統治する…何か利点はあるのでしょうか。

元大統領：

（彼はゆっくりと頷き、その目に思索の色が浮かんた。）
非常に良い質問だ。

そして、一つ告白しなければならない。以前、私は封建
制度を時代遅れの遺物と見なしていた。

しかし、権力の中枢で長年過ごし、共産主義、共和制、
そして現代の独裁体制を観察した結果…私はそれをより
公平に見直さざるを得なくなった。

君主制モデル、特に才徳を兼ね備えた王、真の意味での
「明君」がいる場合…それは我々の現代共和国が失いつ
つある利点を持っている。

（彼は手を挙げ、ゆっくりと指を折り始めた。）

第一に、ビジョンだ。

アメリカ大統領は、これは私がよく知っていることだが、

任期は四年。幸運にも再選されれば八年だ。

歴史の流れの中では、瞬きに過ぎない。

深く持続的な改革を実行するには短すぎる。

だが王は、再選に出馬する必要がない。メディアに媚びる必要もない。

もし本当に民のためを思うなら、彼は何十年にもわたる戦略を追求することができる。

第二に、速さと統一性だ。

我々の共和国では、一つの法案を通すだけでも迷宮を通り抜けなければならない。

委員会、議会、メディア、野党、世論…

聡明な王は、貴族に操られていなければ、より速く、より断固とした決定を下すことができる。時には…より人道的でさえある。再選のために政治的な駆け引きをする必要がないからだ。

そして最後に、責任だ。

王がいれば、全ての是非は一人の人物に帰する。

彼は象徴であり、国家の魂だ。

一方、現代の共和国では、権力があまりにも分散しているため…全てが崩壊した時、誰も本当の責任を負わない。大統領は議会のせいにする。議会は野党のせいにする。

そして国民は、一体誰が本当に責任を負うべきなのか分からない。

（彼は手を下ろし、声が真剣になった。）

だが…決して忘れてはならない。

それは「明君」がいる場合の理想に過ぎない。

もし権力者が暗君だったら？

もし朝廷が奸臣で満ちていたら？

その時、国は地上の地獄と化すだろう。

投票権もなく、報道の自由もなく、民は自らを守るいかなる仕組みも持たない。

簡単に言えば、こうだ。

封建制度は国家の運命を一人の人間に委ねる。

共和国はそれを一つの仕組みに委ねる。

その人間が良ければ、国は栄光に輝く。悪ければ、国民全体が災難に見舞われる。

一方、共和国は、たとえ動きが遅く、多くの制度的欠陥があっても、一人の個人が引き起こす大惨事を避けるように設計されている。

その代償は、効率であり、速さであり、そして時には…政治的な計算によって歪められた真実だ。

（彼は私をまっすぐに見つめ、その声は断固として、そして少々衝撃的だった。）

もし今日、この世界のどこかに、賢明で、道徳的で、金に左右されず、真に心とビジョンを持つ王がいたなら…本心を言うよ。

私は、民主主義を装いながら実際には完全に操られている共和国よりも、彼を支持するだろう。

ジュリアン・リー：

ということは、閣下は必ずしも封建制度を支持しているわけではないのですね。

問題は、どうやら…いかにして才徳を兼ね備えた人物を選ぶか、ということのようですが。

元大統領：

そうだ。核心的な問題はそこにある。

私は、中央集権モデルが、もしトップが本当に才徳を兼ね備えていれば、現代のいかなる民主主義モデルをもはるかに超える効率をもたらし得ることを否定しない。

だが…

（彼は長く息を吐いた。まるで歴史全体の問いの重荷を背負っているかのようだった。）

難問はここにある。どうやってその人物を選ぶのか？
そしてさらに重要なことに、どうやって彼がその徳と知を…治世の間ずっと保ち続けることを保証するのか？
明君を選ぶことは、正直に言って、月に行くよりも難しい。

人類の歴史は、その例で満ちている。

明の光武帝、ベトナムの黎聖宗、あるいは各王朝の建国の祖…彼らは偉大な人物だった。

しかし、彼らの直後には、無能で、残忍で、あるいは快樂にふけるだけの世代の王たちが続いた。

なぜか？

才能と徳は、遺伝しないからだ。

国民の運命を血統という偶然のゲームに委ねる封建社会は、遅かれ早かれ、坂を転げ落ちることになる。

では、我々の共和国はどこが間違っているのか？

権力を分有しているからではない。

間違った人間を選んでいるからだ。

共和制はもともと、封建制の過ちを避けるために作られた。世襲はもうない。代わりに選挙があり、三権分立が

あり、抑制と均衡がある。

聞く分には、非常に理想的だ。

しかし、今日の現実には、私が言ったように、選挙は金に、メディアに、そして大衆の感情に操られている。

徳のある人間は、大衆が聞きたいことを言わないために、しばしば敗れる。

確固たる信念を持つ人間は、派閥の利益に奉仕しないために、しばしば打ちのめされる。

（彼は一旦言葉を切り、私を見た。）

では、どこに出口があるのか？

私はこのことについて、長い間考えてきた。そして、君に率直に言おう。

未来は、「共和国」か「君主制」かを選ぶことにはない。真の才能を選抜する仕組みを構築することにあるのだ。政治、メディア、利益団体を超越した仕組みを。

（彼の眼差しは遠くなり、まるで別の世界を描いているかのようだった。）

私は未来の理想的な政治を、こう想像している…

そこには騒々しい選挙戦も、何十億ドルもの運動資金もない。

代わりに、候補者は極めて透明な審査プロセスを通じて選ばれる。知性、道徳、統治能力、そして最も重要なこととして、誘惑に打ち勝つ自己制御能力について。

そして誰が選ぶのか？感情で投票する大衆ではない。エリート評議会だ。真の知識人、真の賢者、政治に属さない人々からなる。

そして最も重要なこと。統治者に選ばれた者は常に監視下にあり、もしその資質を失えば、即座に交代させられることさえあり得る。

（彼はかすかに笑った。）

夢物語のように聞こえるかね？

おそらく。

だが、もし人類が真の指導者を選び出す方法を見つけられなければ、封建制であれ、共和制であれ、共産主義であれ…結局は全て、崩壊のループに回帰することになるだろう。

これで分かっただろう。

私は封建制を支持しない。

民主主義を盲信するわけでもない。

私はただ、人間の心と知性を信じる。

そして、それを見抜くのに十分な賢明さを持つ仕組みを信じるのだ。

ジュリアン・リー：

はい、同意します。核心は、真の才能を選抜する仕組みを構築することにありますね。

（私は少し躊躇し、そして自分の考えを口にすることに決めた。）

決して冗談ではありません、閣下。

しかし、もし私のような一介のジャーナリストが、素晴らしい大統領になるに足る才徳を兼ね備えていると自負できたとしても…問題はやはり、誰が私を信じるのか？

誰が私を支持するのか？

誰が私に投票するのか？ということです。

先ほど閣下がおっしゃった、民衆が選ばない「賢者の評議会」という考えについてですが…

遠い昔の歴史のどこかで、耳にしたことがあるような気がします。

確かチベットでは、ラマの選出も似たような形式で行われていたような…

元大統領：

（彼は頷き、穏やかな賛同の笑みを浮かべた。）

君の言う通りだ。

そして君は今、我々の現代文明がしばしば無視する、古代の秘密の一つに触れた。

「悟りの仕組み」による継承。

選挙や血統によるものではない。

チベットにはかつて、ほぼ理想的なモデルがあった。

ダライ・ラマやパンチェン・ラマの選出は、選挙に基づくものでも、世襲でもない。

彼らは、前の覚者の「転生のしるし」を宿す子供を探し出す。

そして一連の儀式や試験を用い、精神的にも道徳的にも検証するのだ。

これは現代人には一笑に付されるかもしれない。

だが、その本質を見てほしい。

選ばれた者は、公約が巧みだからでも、金やメディアの後ろ盾があるからでもない。

名利を超越した資質を、その身に宿しているからだ。

「自然にして正しい」という資質を。

もちろん、そのモデルも後に悪用されたり、墮落したりすることは避けられなかった。

しかし、その核心的な理念——大衆を操る能力ではなく、徳と知によって人を選ぶ——こそ、現代の民主主義が失ってしまったものなのだ。

（彼は私をまっすぐに見つめた。）

そして君の言う通りだ。最大の問題は、誰が君を信じるか、だ。

君は実直な人間かもしれない。ビジョンもある。道徳的な資質も。

だが…

君には一千万ドルの広報キャンペーンがない。

毎週フォックス・ニュースや CNN で取り上げられることもない。

強力な利益団体の後ろ盾もない。

そして…ソーシャルメディアで拡散するほどの強い感情を生み出すこともできない。

だから君は、スタートラインでふるい落とされる。

君に資格がないからではない。

システムが、君にチャンスを与えないからだ。

（彼は物思いに沈んだ。）

では、その「賢者の評議会」モデルは実現可能なのか？
難しい。だが不可能ではない。

私はかつて、こう想像したことがある。

いつの日か、人類が感情よりも知性を信じるほどに成熟したなら…

「国家道徳・知恵院」のようなものができるかもしれない。

いかなる政党にも属さず。

権力機構の中にもなく。

そしてただ一つの使命を持つ。国家を導くに最もふさわしい人物を選び出すことだ。

SF のように聞こえるかね？

おそらく。

だが、TikTok やテレビに国の運命を委ねることに比べれば…試す価値はあると思う。

（彼は微笑んだ。心からの笑みだった。）

私は本当に信じている。君のような人間が、十分に粘り強く、十分に謙虚で、そして時を待つことを知っていれば…

変化を生み出せる地位に、たどり着くことができる。

政治ゲームによってではなく。
民の心と、時代の目覚めによって。

ジュリアン・リー：

ありがとうございます、閣下。

しかし今、その「賢者の評議会」モデルについて、もう少し詳しくお伺いしたいのです。

人々が直接選んだわけではない評議会に、大統領を選ぶ権限を委譲することに、どうすれば皆が同意するのでしょうか。

そして、誰がこの評議会に選ばれるのですか？どのような方法と基準で？

そして最も重要な問い…その基準は、誰が定めるのでしょうか。

元大統領：

（彼は頷いた。その問いの重みを認める、ゆっくりとした頷きだった。）

それらは最も中心的な問いだ。

そして君がそう尋ねることに、私は驚かない。

なぜなら、それこそが、私が「賢人評議会」と呼ぶこの

モデルを…人類の運命を憂い眠れぬ者たちの夢の中に、永遠に留まらせる最大の結び目だからだ。

だが、君は率直に聞きたいのだろう？

ならば、率直に言おう。

まず、どうすれば民衆が権限の委譲に同意するのか？

短い答えは、彼らは決して同意しない、だ。

…彼らが現在のモデルに対する信頼を完全に失わない限りは。

誰も自分の投票権を放棄したくはない。

…選挙が、露骨に買収された詐欺行為と化さない限りは。

…誰を選んでも国が下り坂を転げ落ち続けることを、民衆がはっきりと見ない限りは。

そして、経済、道徳、あるいは戦争といった、民衆が自由だが無意味な選択よりも、正しい指導者を渴望するほどの大きな危機が現れない限りは。

言い換えれば、民衆は決して自発的に賢人評議会に権限を委譲しないだろう。

…彼ら自身が、絶望の中で、知性の層からの介入を懇願する声を上げない限りは。

（彼は一旦言葉を切り、次の問いの重要性を強調するかのようだった。）

では、誰がその評議会に選ばれるのか？

これは最も重要で、そして最も危険な部分だ。ここで間違えれば、モデル全体が崩壊する。

基準は、極めて厳格でなければならない。

一つ、その者は超越的な知性を持たねばならない。必ずしも学歴ではないが、著作や実際の行動を通じて、卓越した思考力、批判力、解釈能力を示さなければならない。

二つ、道徳は純粹でなければならない。スキャンダルなく、派閥に属さず、清廉な生涯を送り、地域社会から尊敬されていること。

そして三つ、必須条件として、心は名利を求めてはならない。その者は自ら立候補したり、支持を呼びかけたりしてはならず、他者から推薦されなければならない。

そして選び方については…

私は「三段階選抜」モデルを思い描いている。

まず、地域の知識人コミュニティやエリート層が推薦する。

次に、予備選考委員会が候補者を審査する。

そして最後に、最も重要な地位は、かつて国家の指導的立場にあったが、すでに引退し、権力もなく、いかなる利益にも左右されない人々自身によって承認される。

（彼は私を見た。まるで私の最後の問いを予期していたかのように。）

そして、誰がこれらの基準を定めるのか？

これが最も根源的な問いだ。

そして正直に言うと、答えは一つしかない。時代を先取りする者たちの集団、自らの利益を犠牲にする勇気を持つ者たちだ。

それは大きな危機の後に設立された臨時委員会かもしれない。

あるいは、宗派を超え、知識人を超えて、政治に属さず、ただ道理と知性のみを目指す人々を結集させた協会かもしれない。

あるいは…もし君が許すなら、こう言わせてもらおう。

それは「天に選ばれた」集団だ。

つまり、彼らは自称するのではなく、多くの互いに独立した人々が、彼らが非凡な資質を持っていると同時に認識するのだ。

（彼は物思いに沈んだ。）

だが、君は理解しなければならない。

もし君のような、自らに才徳があると知りながら、栄光を追い求めない人々がいるのなら…

そのような賢人評議會のための種は、すでに蒔かれているのだ。

ジュリアン・リー：

閣下がおっしゃる賢人評議會は…新しい教皇を選出する枢機卿會議（コンクラーヴェ）を思い起こさせます。

この評議會の人々は皆、宗教関係者や、何らかの法門を修煉する人々なのではないでしょうか。

もしそうなら、社会全体がチベットのようにならなければなりませんね。そこでは人々が修行者やラマを心から尊敬しています。

これらの結び目を解きほぐすために、もっと深く理解したいのです。

（私は詳細を繋ぎ合わせようと試みた。）

そしてそれは、閣下が話してくださった…「影の評議會」への推薦を断った人物の話の思い出させます。

では、その影の評議會とは…何なのではないでしょうか。

彼らは何を目的に活動し、どのような人々なのではないでしょうか。

元大統領：

（彼は私を見つめた。その眼差しは深く、部屋の空気が変わったかのようにだった。）

君は今、この対話を別の次元へと引き上げた。

もし私がまだ現職の大統領であったなら、間違いなく答えることはできなかっただろう。

しかし今日、私は政治という殻を脱ぎ捨てた一人の人間だ。

率直に、包み隠さず話そう。

仕組みについては、その通りだ。枢機卿会議が最も近いモデルだろう。

修練を積み、俗世から離れて生き、深い精神的な知識を持つ人々の集団。

そして後継者を選ぶ時、彼らは政治ではなく、直感、信仰、そして実在すると信じる一種の「天命」によって選ぶ。

しかし、一つ、核心的な違いがある。

バチカン教会は組織であり、世俗的な権力も持っている。

一方、私が思い描く賢人評議会は…その本質が政治と宗教の両方を超越している。

いかなるシステムにも依存しない。

そして君が言うチベットのことは正しい。

それは、修行者への尊敬が法律やプロパガンダから来るのではなく、

ラマたちの日常生活における道徳、知恵、そして慈悲の存在そのものから生まれる社会だ。

社会がその状態に達した時、賢明な評議會は初めて「生きる土壌」を得る。

つまり、そのような制度は公布することはできない。

社会が十分に道徳的で、人間が真理を十分に渴望する時にのみ、現れることができるのだ。

（彼は少し間を置いた。まるで一つの暴露に備えているかのようだった。）

そして、これが君が尋ねた「影の評議會」の話へと繋がる。

一度、私が政治家としてのキャリアの初期段階にあった頃、非公式の会合に招かれたことがある。

どこで、誰が主催したかは言わない。

しかし、それは CIA の会議でもなければ、財界の大物たちの集まりでもなかった。

それは、非常に静かな人々の集団だった。

彼らは多くの国に散らばって暮らしていた。

かつては学者、霊能者、伝統的な医者…中には何十年も
隠遁生活を送っていた者もいた。

彼らは名乗らず、電話も使わず、ソーシャルメディアに
も存在しない。

彼らは「伝統的な経路」…手紙、証人、内密の招待状を
通じてコミュニケーションを取る。

彼らの目的は、政治を運営することではない。

人類の道德の均衡を維持することだ。

世界が混乱に陥った時、彼らは大きな影響力を持つ可能
性のある個人——政治家、科学者、学者——に接触を試
み、警告したり、示唆を与えたり、あるいはメッセージ
を伝えたりする。

君が言及した、アイビーリーグの大学で教鞭をとり、清
廉な生涯を送ったアジア系アメリカ人の学者は、
彼らの核心グループに推薦された。しかし彼は断った。
彼が挙げた理由はこうだ。

「私にはまだ憎しみがあ、偏見がある。誰かの手本に
はなれない。」

その後、彼はネパール西部の山中に隠遁し、誰とも連絡
を取らなくなった。

(彼は物語を終え、空間に沈黙を残した。)

では、その評議會は本当に存在するのか？

科学者のようには断言できない。

しかし、私が見てきたこと、体験してきたことに基づけば…彼らは実在する。

彼らは干渉しない。ただ「必要な時に現れる」。

彼らは現在の制度に反対するのではなく、古い世界が崩壊した場合に備えて…静かに新しい世界のための種を保存しているのだ。

ジュリアン・リー：

その影のグループとの出会いについて…もう少し詳しく明かしていただけますか。

彼らは、人々が噂するイルミナティのような秘密結社とは大きく異なるように感じます。

そして…閣下の話し方から、何かを感じ取ります。

まるで、宗教について深い理解をお持ちであるか、あるいは何らかの知恵が…開かれたかのように。

元大統領：

（彼は私を見つめ、全てを見通すような眼差しで、静かに頷いた。）

君は実に、直感の鋭いジャーナリストだ。

君が感じ取ったことは、間違っていない。
そのグループとイルミナティとの違いについても。
そして、私の中にある、政治を超えた何かについても。

君に話そう。
私が話すことを許されている範囲で、そして、あの人々の「不文律」を破らない限りで。

（彼の声が低くなった。まるで神聖な記憶を語り直しているかのようにだった。）

その年、私は党内で有力な候補者の一人だった。
アジアのある国への非公式な訪問中、ある晩、内密の接客の後、非常に質素な身なりの六十歳ほどのアジア系の女性が、突然私の滞在先の外に現れた。
彼女には護衛もおらず、招待状もなかったが、どういうわけか、警備チームは彼女を通した。
彼女は名前を名乗らなかった。
ただ一言、こう言った。

「あなたは見出されました。今宵、自らが直面することになるものを理解したいのであれば、私について来てください。」

私は彼女の目を見た。そして奇妙なことに…私は彼女を

信じられると、そう思った。

その感覚は、政治の世界では滅多に起こることではない。

私たちは郊外の小さな家に着いた。

豪華なものは何もない。映画に出てくるようなシンボルも、神秘的な蝋燭の光もない。

ただの、何もない部屋だった。

五人の人間が座っていた。

老人も若者も、ヨーロッパ人もアジア人も、白人も黒人も…しかし彼らの眼差しには、一つの共通点があった。私がどんな社交辞令も口にできなくなるほどの、深い静けさ。

彼らは私を「次期大統領閣下」とは呼ばなかった。

彼らはただ、一つの問いを投げかけた。

「君は、真実に直面する勇気があるか。たとえその真実が、君の全てを失わせることになったとしても」

（彼は長い間、黙っていた。）

私は、沈黙していた。

そして、その後の四時間にわたる対話は…私を永遠に変えた。

（彼は続けた。その声は明瞭だった。）

彼らはイルミナティか？

いや。

ハリウッドやソーシャルメディアが描くようなイルミナティは、権力のモデルだ。

経済、政治、文化を操る。

だが私が出会ったグループは、全く違った。

彼らは操らない。警告する。

彼らは政権内で活動するのではなく、政権を観察する。

彼らは派閥を守るのではなく、道徳の均衡を保つ。

そして、彼らは指示を出さない。

彼らはただ、問いを投げかける…人々が自ら悟るように。

彼らの一人は、私にこう言った。

「我々は人類を救うために存在するのではない。人類は自らを救わねばならない。

しかし、もし権力者の中に目覚めた者がいれば、我々はその者に、常人には見えないものを見る機会を与えるだろう。」

（彼は私を見た。その眼差しは、何か反応を待っているかのようだった。）

そして君が尋ねた、私に超自然的な知恵があるかという点についてだが。

それを認める勇氣はない。

私はかつて政治家だった。拍手喝采の中で、スポットライトの中で、財界の大物からの電話の中で生きてきた人間だ。

しかし、あの夜、私は気づいた。私が真実だと思っていた全てのものが…ただの表層に過ぎなかったと。

あの出会いの後、私は瞑想を始め、経典を読んだ。

そして、世界をコントロールしようとするのではなく、沈黙のうちに観察するようになった。

すぐに政治を辞めたわけではない。

だが、私は自分の決断を一つ一つ、調整し直した。

利益に従うのではなく、彼らから学んだ一種の「静かなる直感」に従って。

一度、ある議員が私にこう言った。

「あなたは変わった。以前は理性で人を説得していた。今は、ただそこにいるだけで、人を黙らせる。」

（彼は一旦言葉を切り、その声は莊嚴になった。）

君はこれを、何のために尋ねるのか？

もし読者が楽しむためだけのインタビューなら、おそらくここで止めるべきだろう。

だが、もし君が本当に、より良い制度のための答えを探

しているのなら…

私は君に、残りの部分を授けよう。

答えとしてではなく、道として。

君は、先へ進みたいか？

もしそうなら、彼らが「世界の道德の中心を守る者」と呼ぶものについて、話してやろう。

肩書きも、権力もないが、存在している人物について。

ジュリアン・リー：

はい、ぜひ先へ進みたいと思います。

ジャーナリストとして、私はただ一つの橋渡し役でありたいと願っています。

知識、情熱、経験、知恵を…読者の皆様にお届けするために。

どうか、詳しくお聞かせください。

閣下が追求されている精神的な信仰について…それはカトリックですか、仏教ですか、それとも他の法門でしょうか。

そして、先ほどおっしゃった「世界の道德の中心を守る者」とは…どなたなののでしょうか。

元大統領：

（彼は私を見た。その眼差しはより温かくなった。）
君は実に、深く掘り下げるだけでなく、正しい方向へ進む人物だ。

私が長年、胸の内に秘めてきたことがある。

恐れていたからではない。

話すにふさわしい相手に出会えなかったからだ。

だが今日、君が光を伝えるための「一つの橋」になりたいと言った時…私は続けることができると知った。

（彼は深く息を吸った。まるで長年の思考を整理しているかのようだった。）

私の精神的な信仰についてだが…

私はもはや、自分を特定の宗教の信者だとは見なしていない。

私はカトリックの家庭に生まれ、幼い頃から聖書を読んだ。

若い頃は、イエス・キリストの奉仕の精神と赦しの心に感銘を受けたが、同時に教会に対して、その権力、物質主義、そして彼らが背負う暗い歴史のページについて、問い質したこともあった。

成長するにつれ、仏教、特に禅宗とチベット仏教に触れ

た。

そこから、無念の観察、そして「無我」の概念を学んだ。

しかし、真の転機は、あの「影のグループ」との出会いの後に訪れた。

グループの一人が、私に一冊の本をくれた。

表紙はなかった。著者名もなかった。

ただの普通紙に印刷されたもので、神秘的な雰囲気は全くなかった。

だが読んだ時、私は気づいた…その中の思想は、私がこれまで知っていたあらゆる宗教の境界をはるかに超えていた。

それは、真・善・忍を宇宙の柱として教えていた。

それは、人間はもともと高い次元から来た生命であるが、この世の名声、利益、そして情に迷い込んでしまったと説いていた。

そしてそれは、形式のない修煉の道を示していたが、人間をその本来の性質へと導くことができるものだった。

（彼は一旦言葉を切り、声は物思いに沈んだ。）

初めは、それがただの東西哲学の統合だと思っていた。

だが読めば読むほど、瞑想すればするほど、熟考すれば

するほど…私はますます気づかされた。

それは、通常の人間的な知性の産物ではない。

（彼は私を見た。その眼差しは意味深長だった。）

君には見当がつくかもしれない。

私が話しているのは、かつて中国で極めて残酷に弾圧された、ある修煉法門のことだ。

だが、その名はここでは口にしない。

なぜなら、その名が口にされると、人々はその核心を聞く前に、性急に判断を下しがちだからだ。

（部屋の空気が静まり返った。）

では、「世界の道徳の中心を守る者」とは誰か？

それは、公式の肩書きを持つ人物ではない。

教皇でもなく、大統領でもなく、そしてもちろん、マスコミが奉ったような「精神的指導者」でもない。

それは、君が街で出会っても、気づかないような人物だ。だが、もし君が十分に静かな心でその眼差しを見つめることができれば、時間が止まったかのように感じるだろう。

彼らはテレビに出ない。本も出版しない。教派も作らな

い。

彼らは自らを「救世主」と名乗らず、信者も受け入れない。

しかし、彼らは非常に高い道徳的な周波数をその身に宿している。あまりにも高いため…その存在自体が、この世界の善悪の天秤が一方に完全に傾くのを防いでいるのだ。

一度の会話で、あの「夜の出会い」のアジア系の女性は私にこう言った。

「人類が道徳の中心を失った時、全ての仕組みは崩壊するでしょう。

しかし、あの方はまだここにいる。

だから世界は、まだ滅亡には至っていないのです。」

私はその人がどこにいるのか知らない。

アジアかもしれない。隠遁した修行者かもしれない。

あるいは、市場の真ん中にいる、ごく普通の父親かもしれない…

だが、私は知っている。何らかの方法で、その人物は静かに、この世界の道徳のエネルギー場を変容させているのだ。

（彼は私を見つめ、その声は莊嚴になり、まるで結論を述べるかのようだった。）

君は、メッセージを伝えたいと言ったね。

もし私が君の読者に伝えるべきことが一つだけあるとすれば…元大統領としてではなく、権力、政治、そして信仰の殻の内側を見た一人の人間として…

それは、これだ。

自らの善良な本性に戻りなさい。

この世界がどれほど歪んでいようとも。

なぜなら、もし十分な数の人々がそれを成し遂げれば、我々は革命も、指導者も、評議会も必要としない。

世界は、自ずと調整されるだろう。

（彼は一旦言葉を切り、まるで提案をするかのように言った。）

もし君が望むなら、私は君に短い手紙を書いてやろう。

読者へのメッセージとして。

「かつて権力の中枢に立ち、そしてカーテンの向こう側を見ることを許された者」の名の下に。

君は、私に書いてほしいかね？

ジュリアン・リー：

はい…その短い手紙のことですが。

このインタビューの後、どうか私にお送りください。

大切にし、できるだけ多くの読者にお届けできるよう努めます。

（私は頷き、閣下の意図を理解した。）

閣下の信仰についてですが…閣下が「真・善・忍」の三文字に言及された時…

そして、それが中国で弾圧されているということを知り…

私は、気づきました。

おそらく、その法門の名をここで口にする必要はないのでしょう。

縁のある読者は、自ずと気づくと信じています。

元大統領：

（彼はかすかに微笑んだ。理解の笑みだった。）

君は繊細だ。

そして、そのことに感謝する。

その通りだ。名を言う必要はない。

なぜなら、真実は…存在するために叫ぶ必要はないからだ。

縁のある者は、自ずと気づくだらう。

まだその時でない者は、種が土の中で静かに眠り、芽吹く日を待つに任せればいい。

手紙については、約束を守ろう。

これは政治的な宣言ではないし、ましてや呼びかけでもない。

ただの、分かち合いだ。

かつて権力の頂点に立ち、そしてあらゆるスポットライトをはるかに超える一つの光の前に、静かに頭を垂れた一人の人間の心からの。

私はそれを、今ここに書き記そう。

君は全文を掲載してもいいし、あるいはそれを本の終わりに、記憶の庭の片隅に置かれた小さな石のように、静かに横たわらせてもいい。

（彼は私に、丁寧に手書きされた一枚の紙を渡した。私はそれを、沈黙のうちに読んだ。）

目覚めつつある者たちへの手紙

かつて、私は自分が世界の指導者だと思っていた時期があった。

私は、一つの頷きで戦争が決定される机に座っていた。

他人が画面越しに見ることしかできない人

々と、握手をした。

全世界の市場を揺るがす法律に、署名した。
しかし、私が沈黙し、スポットライトを離れ、名もない小さな部屋に入った時に初めて…

私は理解した。

真の権力とは、世界を操ることにあるのではない。

それと同化することから、自らの内面を守る能力にあるのだと。

任期の最後の数年間、私は世界を変えようとするのではなく、観察した。

話すよりも、多くを聞いた。

そしてその沈黙のうちに、私は一つのことを発見した。

世界は一人の指導者を必要としているのではなく、自らを治めることを知る多くの人々を必要としているのだと。

もしあなたがこの文章を読んでいるなら、
おそらくあなたもまた、目覚めつつあるのだろう。

大統領である必要も、学者である必要も、
僧侶や戦士である必要もない。
ただ毎日、少しの「真」を。
少しの「善」を。
そして少しの「忍」を。
保つだけでいい。
そうすれば、あなた自身が…この世界の均
衡を保つ者となる。

私はもはや、自分が「歴史を変える」者で
あることを望まない。
私はただ、かつて見た小さな光を裏切らな
いことだけを望む。
そして、君もまたそうであることを。

かつて権力の中枢に立った者。
そして、政治を超えた英知の前に頭を垂れ
た者より。
(署名なし)

(私は手紙を折りたたみ、慎重に上着のポケットにしま
った。喉が詰まり、言葉にならなかった。)

元大統領：

私は、君がこの手紙をどう伝えるべきか、知っていると信じている。

呼びかけるような口調ではなく、広がる静けさを通じて。そして、いつの日か、あの道德の中心を守る者も…それを読むかもしれない。

どこかの茶屋で、苔むした軒下で。

誰も思いもよらない場所で。

（彼は私を見た。その眼差しは、最後の問いを投げかけているかのようだった。）

君は、ここでインタビューを終えたいかね？

それとも、私が話すべきことが、まだ何かあるだろうか…幕が再び下りる前に。

ジュリアン・リー：

閣下、お話の内容に、私は心から惹きつけられています。もし許されるなら、一晩中でもここに座り、閣下のお話

に耳を傾けていたいくらいです。

しかし、閣下のお時間とご健康がそれを許さないことは、理解しております。

では…また別の機会に、インタビューの機会をいただけないでしょうか。

もし可能でしたら、明日にでも…

（私は躊躇し、そして少し照れながら続けた。）

あるいは、少々欲張りすぎているかもしれません。

他のテーマについても、一連のインタビューをお願いしたいのです。

経済について、外交について、アメリカの未来について。そして、より神秘的なテーマについても。

UFO や宇宙人のような…

なぜなら、多くの人々がアメリカ政府が何かを隠していると信じているからです。

元大統領：

（彼は微笑んだ。温かく、敬意のこもった笑みだった。）君は実に、尊い人物だ。

粘り強さだけでなく、次回の価値を保つためにいつ止めるべきかを知っているからだ。

それはジャーナリストには稀なことだ。

心から、そのことを高く評価する。

そして、同意しよう。

君が「欲張り」だからではない。

君の中に、私が重要なことを見出したからだ。君は閲覧数を稼ぐための情報を探しているのではない。

君は、答えを探している。

自分自身のために、そして君のように静かに探し求める人々のために。

では、今日を、期限のない一連の対話の第一章としよう。私はこのインタビューシリーズを続ける用意がある。毎回一つのテーマで。

今回は、アメリカの未来について話そう。もはや有権者や政党、あるいは大企業に縛られることのない視点から。

その後、もし君が望むなら、我々はさらに深く進むことができる。

（彼の眼差しは、まるで秘密の扉を通り抜けているかのようだった。）

米中間の真の関係について、これまで公にされなかったことについて話すことができる。

経済学の真の本質について、そしてなぜ成長が地球を殺しているのかについて。

アメリカ政府が UFO について本当に知っていること、そして秘密計画の背後にある真実について。
あるいは、宗教、輪廻、そして一部の高官が死の間に明かした「前世の記憶」についてさえも。

そのような会合のたびに、私は君に「政治的な理性」だけで語るのではなく、一人の人間の経験として、そして権力を手放して初めて学んだ直感によって語ろう。

(彼は私を見つめ、その声は荘厳になった。)

そうやって、もし君が覚悟を決めているなら、我々は共に歴史的な対話を創造することになるだろう。

署名もなく、宣伝もなく。

しかし、目覚めつつある者たちを、静かに揺り動かすだろう。

私は君を、次の会合で待っている。

そして、もしその時まで、君が今日と同じ誠実さを保ち続けているなら…

私は、権力者たちがかつて私に語ったことさえも、打ち明けよう。

「もし閣下がこれを在任中に口にすれば、世界全体が方向を変えるでしょう。

しかし、引退後に口にすれば、縁のあるごく少数の者しか理解しないでしょう。」

明日、会うことにしようか？

テーマは、

「アメリカの未来、そしてこの国にはまだ、神聖な役割が残されているのか？」

ジュリアン・リー：

はい、ありがとうございます、閣下。

また明日、お目にかかります。

元大統領：

感謝すべきは、私のほうだ。

耳を傾けてくれたことに。

理解してくれたことに。

そして、このインタビューを単なるスクープ探しにせず、人間性の核心を探る旅に変えてくれたことに。

（彼は立ち上がり、私をドアまで見送った。夕日が彼の長い影を床に落としていた。）

また明日会おう。

古い友人のように、待っているよ。

権力の外套はもうないが、内なる炎はまだ保っている。

（私が背を向けようとする前に、彼はもう一言付け加えた。その声は低く、最後の思索の言葉のように響いた。）

世界が騒がしすぎる時…

時には、ただ一人が耳を傾けてくれるだけで、光を守るには十分なのだ。

（彼は挨拶の代わりに、静かに頷いた。）

穏やかな夜を。

我々は、明日続ける。

二日目

（私は約束の時間通りに戻ってきた。部屋は昨日と同じだったが、空気にはどこか荘厳な期待感が漂っているようだった。元大統領はすでにそこに座り、半分ほど減ったお茶のカップの傍らで、窓の外に目をやっていた。）

ジュリアン・リー：

こんにちは、閣下。再びここで話をお伺いできること

を、大変嬉しく思います。

昨日お約束した通り、本日はこのテーマについてお話しただけとのことでしたね。

「アメリカの未来、そしてこの国にはまだ、神聖な役割が残されているのか？」

大変楽しみにしております。

元大統領：

（彼は私の方を向き、静かに頷いた。）

こんにちは。

私も待っていたよ。

舞台上に上がろうとする政治家としてではなく。

灰の山をかき集め、その中にまだくすぶる火種が残っているかを探す、一人の老人のように。

そして君が言った通り、今日はそのことについて話そう。

（彼は少し黙り、そして語り始めた。）

アメリカはまだ「世界の灯台」か？

私の正直な答えは、ノーだ。

もはや、そうではない。

少なくとも、世界の大多数の目には、もはやそう映ってはいない。

アメリカはかつて、自由の、機会の、創造的な知性の象徴だった。

だが今や、多くの人々の目には、分裂の、混乱の、メディア操作の、そしてドルに安売りされた政治の象徴となっている。

私がこれを言うのは、恨みからでも、祖国への裏切りからでもない。

アメリカがその魂そのものを、一步一步失っていくのを、目の当たりにしなければならなかったからだ。

（彼はため息をつき、声が低くなった。）

では、アメリカにはもはや何の役割もないのか？

いや、ある。

だが、それはアメリカ自身がまだ演じていると思い込んでいる役割ではない。

アメリカには一つの「神聖な役割」がある。

しかしそれは、軍事力にも、技術にも、通貨にもない。

自己再生の能力にあるのだ。

まさにその崩壊の中から。

アメリカは、侵略されることなく崩壊し得る、世界でも稀な国だ。

そしてまた、血塗られた革命を必要とせずに再生する能

力を持つ国でもある。

もしアメリカが、自らの内なる闇を乗り越えることができれば…

傲慢な国家のエゴから脱却し。

「偉大さ」という幻想から脱却し。

そして、自らを全世界の道德の中心と見なすことから脱却すれば。

その時、まさにその謙虚な崩壊こそが…世界にとって最大の贈り物となるだろう。

（彼は私を見た。まるで、これから言うことの重要性を強調したいかのようだった。）

なぜ私が「神聖な」という言葉を使ったのか？

なぜなら、全ての国が、全ての人と同様に、一つの使命を持って生まれてくると、私は信じているからだ。

ヨーロッパは、古典的な知性を代表するかもしれない。

アジアは、精神的な根源と内面の深さを守り続けるかもしれない。

アフリカは、根源的な生命力と純粋な直感を象徴するかもしれない。

そしてアメリカは…私は信じている。あることを証明するために「選ばれた」のだと。

自由とは、放縦ではない。

騒がしい世界の中で、内面を自己調整する能力なのだと。

だが現在、アメリカは岐路に立っている。

私はかつて、道義を無視してでも「優位を保つ」という目標のためだけに政策が決定される部屋にいたことがある。

「民主主義」という言葉で満ちた文書に署名したことがあるが、実際には経済を押し付けるためのものだった。誠実な眼差しを持つ人々が隅に追いやられ、ずる賢い者たちが頂点に上り詰めるのを見てきた。

そして私は知っている。もしアメリカがその精神的な核心に戻らなければ、外敵によって滅ぼされることはないだろう。

内側からの亀裂によって、滅びるのだ。

（彼の声は、より断固としたものになった。）

では、希望の光はどこにあるのか？

それは、沈黙のアメリカ人たちの中にある。

テレビに現れず、政治レースにも参加しない人々。

しかし彼らは今もお、まっとうに生き、家庭で、地域社会で、そして自らの内面で、道徳を堅く守っている。

それは、教師たち、芸術家たち、瞑想する者たち、起業家たち、そして君のような書き手たちの中にある…真実がハッシュタグの海に埋もれていく社会の中で、良識を保とうと努めている人々。

そしてそれは、アメリカが東洋の英知を「異質なもの」としてではなく、耳を傾けることを受け入れる能力にある。

西洋が、東洋から正しい生き方を学び直すために頭を下げた時、真の地球規模の統合が初めて起こり得るだろう。

要するに。

アメリカはもはや、世界の中心ではない。

だが、残りの部分を目覚めさせるための、火種となることはまだできる。

権力によってではなく。

悔い改めによって、そして新しい道によって。

もしアメリカ人が自らをまっすぐに見つめ、過ちを認め、「誰がより強いのか」というゲームから抜け出すことができれば…

その時、アメリカにはまだ、最も神聖な使命が残されている。

それは、かつて魂を失った国が…それを取り戻すことができる、と証明することだ。

ジュリアン・リー：

閣下、先ほどのお話は…非常に深遠ですが、おそらくはかなり概括的でもあります。

そしておそらく…多くの読者にとっては、少々曖昧かもしれせん。

閣下は道徳を強調されます。

魂を。

悔い改めを。

これらはきっと、閣下が追求されている精神的な道と関連があるのでしょう。

もっと具体的に、お話しいただけますか。

なぜアメリカの未来は、政治家や大企業、あるいは科学者の手にあるのではなく…「沈黙のアメリカ人たち」の手にあるのでしょうか。

元大統領：

（彼は頷いた。理解に満ちた頷きだった。）

君は、核心を突いた。

そして、この問いに答えるのは容易ではない。

だが、もし君が本当に理解したいのであれば、政治的な理性によってではなく、ある国家の物質的な殻を貫く視

点によって、私が権力の座で長年過ごした後に気づいたことを、分かち合おう。

まず、現在のエリート層から始めよう。なぜ未来は彼らの手にないのか？

なぜなら、彼らはもはや、この国家の「魂」と結びついていないからだ。

私はかつて、大手テクノロジー企業の CEO たちと席を共にしたことがある。

彼らはユーザー行動の最適化、エンゲージメント指数の向上、世界的な情報フローの制御について語った。

私はかつて、ワシントンの頭脳である政策立案者たちと内密に会合した。

彼らは世界の権力地図を巨大なチェス盤のように描き、そこでは人間は単なる「コスト単位」に過ぎなかった。

私はまた、軍事科学者たちが AI 兵器、遺伝子編集、生物学的制御について語るのを聞いたことがある。

そして私が彼らに、「我々は道徳的な限界を超えつつあるのではないか？」と尋ねると、彼らはただ黙っていた。

これらの人々は、もはや世界を人間の目で見つめてはいない。

彼らはアルゴリズムで見ている。利益で。貸借対照表で。
そして、有権者の支持率で。

では、私が言う「沈黙のアメリカ人たち」とは誰か？
彼らは、周りの誰もがそうしなくても、自分の子供
に礼儀を教え続ける父親だ。
彼らは、大都会の真ん中で、競争せずに謙虚に、慈愛深
く生きることを選ぶ女性だ。
彼らは、引退した労働者であり、毎朝公園で瞑想し、誰
からの称賛も必要としない。
彼らは、生徒たちに静かに「誠実さは成績よりも重要だ」
と語る教師だ。

彼らに権力はない。
だが、彼らは良識を保っている。
そしてまさに彼らが、目に見えない「道徳の磁場」を創
り出しているのだ。それによって、この国はまだ崩壊し
ていない。

では、政治家はどうか？
これを言うと、一部の人々の気分を害するかもしれな
いが、正直に言わなければならない。
政治家の大部分は、ただの役者だ。
役はメディアによって選ばれる。

演出はスポンサーによって。

そして観客は、感情的な大衆だ。

彼らはもはや導くのではなく、世論に導かれている。

彼らに長期的な目標はなく、ただ選挙サイクルを追いかけているだけだ。

そして彼らは真実を語るができない。なぜなら、真実は彼らの当選を助けないからだ。

ではなぜ、私は「沈黙の人々」こそがアメリカの未来だと言うのか？

なぜなら、社会の根底にある道徳が堅固に保たれて初めて、その上の全ての塔が立つ土台を持つことができるからだ。

もし基礎が腐敗していれば、どんなに高い塔であれ、いずれは崩壊する。遅かれ早かれ。

君は、ある国を想像してごらん…

そこでは、社会全体がどんな犠牲を払ってでも勝てと教えても、母親は子供に愛を教え続ける。

そこでは、労働者は飢えても盗まず、最後の一杯のご飯を喜んで分かち合う。

そこでは、あるコミュニティで誰かが騙されても、憎しみではなく赦しを選ぶ。

大衆の道徳が回復すれば、政治、経済、そして科学も自ずとそれに合わせて調整されるだろう。

しかし、もし政策だけを改革し、人心を改めなければ、全ての変化は権力の椅子に座る者たちの、ただの入れ替えに過ぎない。

そしてそれが、我々を「悔い改め」と、私が追求する信仰へと導く。

君の言う通りだ。私はもはや、宗教制度を信じていない。だが、私は「道（タオ）」を信じる。

道は教会や寺院、経典の中にはない。

道は、一人の人間が自らの良心とどう向き合うかの中にある。

悔い改めとは、赦しを請うことではない。

悔い改めとは、自らの中にある闇を直視し、二度とそれに勝利させないと誓うことだ。

アメリカの未来は、もしあるとすれば、ホワイトハウスやペンタゴン、ウォール街の手にはない。

それは、小さな木造家屋の中にある。

街角のカフェの中に。

田舎の学校の中に…

そこにはまだ、自らの善良さを失っていない人々がいる。

もし十分な数の人々が、共にその小さな光を保ち続ける
ならば…

遅かれ早かれ、一つの大きな炎が燃え上がるだろう。

ジュリアン・リー：

他のテーマに移る前に、何か具体的なことをお聞かせ願
いたいのです。

例えば、個人的な体験談や、ホワイトハウスで実際に起
こった本当の話など。

読者が、アメリカの未来を真に決定するものが何である
かを、より深く理解できるように。

そして…もし閣下のおっしゃる通りなら、その未来は
「メイク・アメリカ・グレート・アゲイン」というスロ
ーガンとは、何の関係もないということでしょうか。

元大統領：

（彼は私を見た。ほとんど気づかれないほどの、かすか
な笑みを浮かべて。）

君は実に、粘り強く、そして鋭い。

明日の朝刊のためだけでなく、次世代のために書いてい
る人間のようだ。

では、君に本当の話をしよう。

センセーショナルなものでも、「機密情報」でもない。だが、もし誰かがその深い意味の層を理解すれば、その者はなぜ私が、アメリカの未来は政治家の手にも、スローガンの中にも、いかなる再建戦略の中にもないと断言するのか、わかるだろう。

「メイク・アメリカ・グレート・アゲイン」でさえも。

（彼は後ろにもたれかかり、その眼差しは定まらない一点に向けられた。まるで、あの瞬間を追体験しているかのようにだった。）

この話を、私は「清掃員と世界地図」と呼んでいる。

私の任期の中頃のことだった。

私の内閣チームが完全に途方に暮れていた時期があった。一連の危機が、同時に勃発したのだ。

貿易摩擦、国内の抗議活動、地政学的な紛争、そしてまさに爆発寸前のメディアスキャンダル。

私は夜の十一時に、ルーズベルト・ルームで内密の会議を招集した。

CIA 長官、国家安全保障問題担当補佐官、国務長官…全員が揃っていた。

部屋の中の声は、「先制攻撃」、「メディアでの注目点

の創出」、「政敵の信用の失墜」、「サイバー防衛予算の増額」…といった言葉ばかりだった。

私はそこに座り、自分が台詞を暗記している劇を見ているような気分だった。

だが今回は、何かが私の息を詰まらせた。

あの部屋は、あまりにも重苦しかった。

もはや国家のために決定を下す場所ではなく、ただ支配を維持するためだけの策略で満たされた水槽と化していた。

その時、私は立ち上がり、廊下に出た。

真夜中近く、そこは静まり返っていた。

そして私は、一人の清掃員が休憩しているのを見た。手に熱いコーヒーカップを抱えて。

彼は黒人で、年配で、六十歳を少し超えたくらい、かなり痩せていた。

彼は私を見ると、静かに会釈した。

私も会釈を返し、そして私の目は彼の清掃カートに留まった。

そこには、古くて少し破れた、小さな紙の世界地図が貼ってあった。

私は尋ねた。

「地理がお好きなんですか」

彼は軽く笑った。

「十分に遠くから見れば、結局はどんなことも些細なことだと、自分に言い聞かせるために貼っているんです」

私は、呆然とした。

何千マイルも先のミサイルを発射する命令を下す権限を持つ私が、突如として、その男性よりも小さく感じられた。

彼は、私が心にどんな葛藤を抱えているかも知らずに、続けた。

「人間とは奇妙なものです、大統領。

誰もが地図を書き換えようとしますが、

誰も自分の内なるゴミを片付けようとはしない」

私はあの夜を、決して忘れないだろう。

会議室に戻った時、私は用意された演説原稿を読まなかった。

私は皆に、三分の間、黙って座るように言った。

何も言わずに。

ただ、黙って。

多くの者は不快そうな顔をした。私が正気を失ったと思った者も、おそらくいたのだろう。

そして私は言った。

「諸君は世界を再形成したいと言うが、我々の心の中は策略で満ちている。

もしアメリカが再び偉大になりたいのなら、まず、真の意味で、人間に戻ることから始めるべきだ。
スローガンによってではなく。カメラのない行動によってだ。」

（彼は一旦言葉を切り、そして私をまっすぐに見つめた。）

そしてそれが、我々を「メイク・アメリカ・グレート・アゲイン」というスローガンへと導く。

私は特定の政党や個人を非難するつもりはない。

だが、このことははっきりさせておく必要がある。

ある国が、もし一度も「真に道徳的」でなかったのなら、「再び偉大になる」ことはできない。

そして道徳は、軍事力や貿易黒字、あるいは退去させられた移民の数によって定義することはできない。

「グレート・アゲイン」は、記憶に訴えかけるスローガンだ。

だが、どの記憶か？

五十年代の経済的繁栄の記憶か？

あるいは、人種差別がまだ法律であった時代の記憶か？

あるいは、アメリカが誰にも反対されることなく、いかなる国にも介入できた時代の記憶か？

もしそれが、人々が再確立したいと望む「偉大さ」であるなら、申し訳ない。

私はそれを、偉大とは呼ばない。

それを、傲慢と呼ぶ。

未来は、スローガンからは来ない。

それは、沈黙から来る。

小さな行動から。

目覚めから。

古い地図と一杯のコーヒーを持つ一人の清掃員、自らの小ささを自分に言い聞かせることを知る一人の人間が…
ホワイトハウスのどの戦略家よりも、アメリカが深淵に陥るのを防ぐ一助となっているのかもしれない。

ジュリアン・リー：

閣下は先ほど、道徳は軍事力や貿易黒字では定義できないとおっしゃいました。

それは、アメリカの未来もまた、それらの要素には依存しないということでしょうか。

正直なところ…これは多くの読者にとって、受け入れがたいことでしょう。

なぜなら、世界の目、特にアジアやアフリカの発展途上

国の目には…

「アメリカン・ドリーム」とはまさに、ドルであり、先進的な科学であり、トップのテクノロジー企業であり、軍事力であり、そして自由だからです。

元大統領：

（彼は頷いた。その表情に驚きはなかった。）

君は、問題を非常に的確に捉えている。

そして君の予測通り、私がアメリカの未来はそれらのものにはないと言うのを聞けば、読者の大半は戸惑い、さらには反発するだろう。

彼らの目には、それこそが「アメリカン・ドリーム」だからだ。

だが、私が言っていることを明確に理解するためには、「外側の光」と「真の光源」を区別しなければならない。

そうだ、アメリカはかつて、それらのことのために偉大だった。

人類を初めて月に送った場所。

世界の金融センター。

アップル、グーグル、テスラを生み出した場所。

世界中に軍事ネットワークを持つ国家。

そして、人々が自分の考えを口にできる場所。

だが、もっとよく見てごらん。

ドルか？それは信頼によってのみ強いが、その信頼は内側から揺らいでいる。

テクノロジーか？それはあまりにも速く進化しているが、もはや道徳に奉仕するのではなく、操作と監視に奉仕している。

軍事力か？それは財政的な重荷となり、社会的な不均衡を引き起こしている。

そして自由か？自由は混乱へと変わりつつある。誰もが話したいが、誰も聞きたがらない時に。

もしアメリカがこれらの要素だけに依存するなら、それは「表面的な地位」だ。

強固な基盤ではない。

なぜ私がそう言うのか？

なぜなら、私はかつて、それらが「膨らまされ」、世界を導くための道具として、ソフトパワーとして使われる部屋にいたことがあるからだ。

だが、私は他のことも見てきた。

私は、貧しいアジアの国を見たことがあるが、彼らの教育は人格形成に重点を置いていた。そしてその若者たちは、ソーシャルメディア中毒のアメリカの若者よりも、はるかに幸福だった。

私は、アフリカの小さなコミュニティを見たことがあるが、そこにはインターネットはないものの、全ての子供が老人の世話をすることを知っており、心から笑うことを知っていた。一方、アメリカでは、未成年のうつ病の割合が憂慮すべきほどに高い。

世界は、アメリカを本当に賞賛しているわけではない。彼らが賞賛しているのは、メディアによって構築されたイメージだ。

そして、そのイメージは徐々にひび割れ始めている。

人々が、ニューヨークのアパートで話し相手もないまま暮らすことは、ネパールの小屋で幸福な家族と暮らすことよりも孤独だと気づき始めた時。

人々が、言論の自由を持ちながら、疑い、批判し、分裂した社会で生きている時、その「自由」とは一体何なのかと、自問し始めた時。

（彼は私を見つめ、声が低くなった。）

「アメリカン・ドリーム」は、もし再定義されなければ、「アメリカン・イリュージョン」になるだろう。

私はその夢が間違っていたとは言わない。だが、それは方向を誤った。

当初、その夢はこうだった。「出自に関係なく、誰にでも機会がある。」

今やそれは、こうなった。「道徳に関係なく、誰もが億万長者になりたい。」

当初、それはこうだった。「良心に従って生きる自由。」
今やそれは、こうだ。「自分と違う者を誰でも攻撃する自由。」

当初、それはこうだった。「夢見る者、創造する者、そして勇敢な者たちの国。」

今やそれは、こうだ。「財政的圧力、政治的分裂、そして即時的な感情への依存に疲れた社会。」

では、アメリカの真の未来はどこにあるのか？

私は信じている。アメリカの真の未来は、アメリカ人が、一人一人が、敢えて自問する時に始まると。

「我々は、あのまばゆい光の全ての中で、自分たちの魂のどの部分を、まだ保っているだろうか？」

もし新しい世代が現れれば…

メディアに流されない世代。

成功をソーシャルメディアのフォロワー数で測らない世代。

「強い者が正しい」と信じない世代。

そして、道徳的で、節度があり、愛情深く、目覚めた生き方に戻る世代。

その時、アメリカはもはや、誰にも勝つ必要はなくなるだろう。

なぜなら、自らの中にある傲慢さに、打ち勝ったのだから。

ジュリアン・リー：

閣下のお話をお伺いしていると、東洋の「無為にして治む」という哲学に基づいて運営される未来社会を示唆されているように感じます。

道徳が高められることで、銃乱射事件や麻薬、売春といった問題が、法治に頼らずとも自ずと後退していく社会、ということでしょうか。

元大統領：

（彼は微笑んだ。意味深な笑みだった。）

君は、非常に鋭い。

そして、私はそれを認めよう。その通りだ。

私が話しているのは、「法」ではなく「道（タオ）」に基づいて運営される未来社会のことだ。

これは空想的な夢物語ではない。人類が自らを滅ぼさずに生き延びたいのであれば、必然の法則なのだ。

多くの人々が「無為にして治む」を誤解している。彼らはそれを「何もしないこと」だと考えている。

だが、老子の思想における「無為」とは、受動的であることではない。

それは、自然に反する形で干渉しない、という意味だ。社会を運営することを否定するのではなく、ただ権力者の個人的な意志による押し付けや強制に反対するだけなのだ。

一人一人が自らを修めることを知っている社会では、法律は穏やかなものになる。

法律が不要だからではない。民衆が、誰かに強制されなくても、自発的に正しいことを守るからだ。

道徳が回復するということは、人々が罰を恐れるだけでなく、過ちを犯した時に恥を知るようになるということだ。

人々が他者を助けることに喜びを感じるようになるということだ。ネットで見せびらかすために写真を撮るのではなく。

そして、人々が行動する前によく考えるようになるとい

うことだ。監視カメラを恐れるからではなく、因果応報の法則を理解しているからだ。

そうなれば、社会は平坦な道を進む車輪のように、円滑に機能するだろう。

なぜなら、人々の心が善良であれば、もはや互いに障害を作り出すことはないからだ。

では、銃乱射事件や麻薬、売春といった問題は、自ずと消えるのか？

いや、一朝一夕にはいかない。

だが、もし道德の根が呼び覚まされれば…

若者たちが魂の中で孤立せず、社会に見捨てられず、メディアによって暴力に毒されなければ、銃乱射事件は生きる土壌を失うだろう。

人々の内面が平安によって養われ、もはや現実から逃避する必要がなくなれば、麻薬は自ずと消え去るだろう。

そして、社会が肉欲を崇拜するのではなく、人間の尊厳を重んじるようになれば、売春は縮小するだろう。

法治は結果を解決するだけだ。

徳治は根源から予防する。

そして道治は…人々が自ら人間に戻るのを助け、もはや誰かに統治される必要がなくなる。

（彼は窓の外を見つめ、声は物思いに沈んだ。）

アメリカはその道を歩めるか？

現時点では、まだだ。

だが、今こそ、「無為にして治む」社会の種が蒔かれ始める時なのだ。

政府によってでも、いずれかの政党によってでもなく。

目覚めた個人によって、ゆっくりと、そして静かに。

アメリカの学生がパイプを吸う代わりに瞑想を始めた時。

ある母親が、YouTube の無意味な動画を見せる代わりに、

子供に道徳的な物語を語り聞かせることを選んだ時。

君のようなジャーナリストが、他の誰もが敢えて問わない問いを問うことを選んだ時…

その時、「道」は戻ってきている。

革命のラッパの音によってではなく、静かなる足音によって。

（彼は私の方を向いた。）

君は、私がホワイトハウスで起こった話をすることを望むかね？

私が心の底では憎しみの炎に油を注ぐだけだと知りながら、罰則法案に署名せざるを得なかった時の話を。

そして、九歳の子供からの手紙が…いかにして私を目覚めさせたかの話を。

ジュリアン・リー：

はい。このテーマを終える前に、ぜひ、その実話をお聞かせください。

元大統領：

（彼は頷いた。その眼差しは遠くなった。）
わかった。

「道徳とアメリカの未来」というテーマを締めくくるために、君に本当の話をしよう。

小さな話だ。国家的な出来事ではない。

だが、それは私が気づいた瞬間だった。一人の子供の道徳が…内閣全体の政治的知恵をはるかに超え得るということに。

（彼は一旦言葉を切り、物語がより鮮明に浮かび上がるのを待っているかのようにだった。）

その年、アメリカと中東のある敵対国との間で、緊張が高まっていた。

ある事件が起こり、我々の軍人の中に死傷者が出た。
政治とメディアからの圧力は、絶え間なかった。
私の安全保障内閣は、ほぼ満場一致だった。我々は反撃
しなければならない、と。
爆弾でなければ、苛烈な制裁措置で。

私に、一つの政令草案が渡された。
その国との金融取引を全て凍結する。
関連資産を差し押さえる。
そして、学生、科学者、家族連れの子供たちを含む、そ
の国の全市民の入国を制限する。
書類上、それが「抑止措置」であることは、わかっていた。
だが心の中では、それがひどく不公平だと感じていた。
どうして、病気の治療のために母親とアメリカに来た六
歳の子供が、政治的紛争の代償を払わなければならない
のか？

（彼の声が低くなった。）

私は、署名する準備をしていた。
その署名は、翌朝の全ての新聞の一面を飾るはずだった。
だが、その前夜の十時四十三分、私の首席秘書官が執務
室に入ってきた。

彼は言った。

「閣下、児童市民局経由で手紙が届いております。メディアのチャンネルを通っておりません。おそらく、ご覧になった方がよろしいかと」

手紙は短く、手書きで、いくつかスペルミスがあった。マリアムという名の、九歳の女の子からだった。中東出身で、ウィスコンシン州に住んでいた。

彼女の家族は、彼女がまだ三歳の時にアメリカに来ていた。

手紙には、こう書かれていた。

「大統領へ

もしおじさんが、私の友達が生まれた場所が理由でアメリカに入れてくれないなら、私も怖くなります。

私も、そこで生まれたからです。

でも私は、お医者さんになるために勉強しています。

そして私は、いつか、誰かがどこかの国から来たという理由だけで、私が人を救うのを禁じられるような日を、見たくありません。」

（元大統領は長い間、黙っていた。私はその瞬間の重さを感じることができた。）

私は、読み終えた。

そして…私はもう、署名しなかった。

私は彼らに、政令全体を修正するよう要求した。

非政治的な対象者、特に子供、学生、そして科学研究者を全て除外するように。

私はさらに、前例のない「並行する人道チャンネル」の設置を命じた。

翌日、新聞は私を「弱腰だ」と書いた。

一部の安全保障担当官は、「間違ったタイミングで譲歩した」と言った。

だが、私は少しも後悔しなかった。

なぜなら、私は正しい人物に耳を傾けたと、知っていたからだ。

戦略家ではなく、自らの誠実さ以外に何の利益も持たない、一人の子供に。

その日から私が持ち続けている教訓は、これだ。

真の道徳は、政治的なスローガンの中にはない。

それは、普通の人々の中に、子供たちの中に、労働者たちの中に、存在する。

権力を持たないが、自らの良心に従って生きる人々。

そしてまさに彼らこそが、政策立案者ではなく、国家全

体の「人間」たる部分を守っているのだ。

もし私が在任中に何か正しいことをしたとすれば、それは大きな法律ではなかった。

それは、私が敢えて立ち止まり…声なき者に耳を傾ける勇気を持った時だった。

（彼は私を見た。その眼差しは、まるで新しい扉を開いているかのようにだった。）

わかっただろう。アメリカの未来は、会議室の中にはない。

このような手紙の中にあるのだ。

我々はこのテーマを、ここで終えることができる。

もし君が覚悟を決めているなら、我々は共に、次の扉を開こう。

宇宙。

UFO。

地球外生命体。

そして、なぜそれら全てが、テクノロジーだけの話ではなく、深い精神的な変容であるのかを。

ジュリアン・リー：

はい、アメリカの未来というテーマ、ありがとうございます

ました。

さて、次は宇宙、UFO、そして地球外生命体に話を移したいと思います。

これは新しいテーマではありません。信じる者もいれば、疑う者も、そして反論する者もいます。

しかし、アメリカ政府は…何かを隠しているのでしょうか。

読者の皆様に、打ち明けていただけますか。

元大統領：

（彼は微笑んだ。その意味を、私には読み取れなかった。）

いいだろう。

では、道徳と国家の運命というテーマから、我々ははるかに大きな扉へと足を踏み入れることになる。

宇宙。

UFO。

そして、まだ語られていない真実。

君の問いに、率直に答えよう。

アメリカ政府は…隠している。

そして私は、私が知る範囲で、そして私が「感じ取った」一部についても、話す用意がある。

在任中には、「合法化された」証拠がなかったために口

にできなかったことだ。

だが、真実とは、時に書類によって証明される必要はなく、直感の深さによって証明されるものなのだ。

（彼は一旦言葉を切り、声がより荘厳になった。）

UFO は存在する。そしてアメリカ政府は、それをずっと以前から知っている。

「UFO」という言葉で、ハリウッド映画や漫画のような空飛ぶ円盤を思い浮かべないでほしい。

国防総省の秘密研究計画の内部では、我々はそれらを UAP —— 未 確 認 航 空 現 象 （ Unidentified Aerial Phenomena ） —— と呼んでいる。

五十年代初頭から、そして特に 2004 年の空母 USS ニミッツの事件以降、米軍は非常に多くの証拠を収集してきた。

我々が知るあらゆる物理法則に反して移動する物体に関する、ビデオ、レーダーデータ、光学的信号。

それらは排気ガスを出さず、推進機関を持たず、そしてレーダー画面から即座に消え去ることができる。

さらに、いかなる物理的な物体の耐久能力をも超える速度で、飛行方向を変えることさえできる。

一部のパイロット、技術者、そしてペンタゴンの高官た

ちでさえ、それを目の当たりにしている。

私は公表された報告書に基づいて話しているのではない。
私は、最高機密レベルで、特別計画の中に保管されている、オリジナルのファイルを読んだのだ。

（彼は物思いに沈んだ。）

ではなぜ、政府は全ての真実を公表しないのか？

主な理由は三つある。

第一の理由は、社会の認識の秩序を破壊することを恐れているからだ。

想像してみてほしい。もし一般市民が、地球外の知性が存在し、人類のレベルをはるかに超える技術があり、そして「現実」、「権力」、「神」、あるいは「歴史」といった定義が全て書き換えられる可能性があるを知ったら…

宗教、法、そして国家への信頼というシステム全体が、揺らぎかねない。

第二の理由は、自分たちの無力さを認められないからだ。軍関係者の中で、前に出てこう認めたがる者は一人もない。「我々は奇妙な物体を見ているが、それが何なのか分からず、追跡もできず、そして防ぐための技術も持っていない」と。

それを口にするのは、自らの無力さを認めることに他ならない。

そして最後の理由…それは、技術と兵器に関する利益だ。私はかつて、極秘の会議でこんな言葉を聞いたことがある。

「もし彼らの技術を複製できないのなら、少なくとも、それを敵の手に渡らないようにしなければならない」
墜落した破片から、あるいは「非公式の接触事件」からさえも、技術をリバースエンジニアリングするという、ただ一つの目的のためだけに設立された極秘計画があったのだ。

（彼の声はより深みを増した。まるで別の意味の層に触れているかのようだった。）

だが、これを言っておこう。そしてこれが最も重要なことだ。

UFO は、テクノロジーだけの話ではない。

それは、別の認識の次元なのだ。

私は、「宇宙人」が映画のように侵略するためにここへ来るとは信じていない。

もし彼らが、我々が観察したように時空と物質を自在に移動する能力を持っているなら、彼らは一つの念で地球

を占領できたはずだ。

だが、彼らはそうしない。

代わりに、彼らは観察する。

そして、ある特定の「精神的な周波数」を持つ人々の前にのみ、現れるようだ。

私が常に疑い、そしてますます真実だと信じるようになっていくことがある。

それは、高次元の生命体の存在と、人間の精神的な目覚めの度合いとの間に、関連があるということだ。

ある人が、貪欲、恐怖、そして自我を超えた特定の振動周波数に達した時、彼らは他の生命体の次元を感じ取ることができ、さらには「コミュニケーション」することさえできるのかもしれない。

私はかつて、科学顧問の一人と話したことがある。彼は決して報道には出ない人物で、ある「3X レベルの計画」に参加していた。

彼は私にこう言った。

「我々は、テクノロジーを使って、本質的に非物質的な現象を理解しようとしているのです」

そして彼は、私を永遠に haunting する一言を言った。

「我々は彼らを、望遠鏡では見ないでしょう。ただ、魂の静けさによってのみ、見るのです」

では、アメリカは何を隠しているのか？

ロズウェルに墜落した空飛ぶ円盤の秘密ではない。

人類が、進化の頂点に全く立っていないという、真実だ。
我々は、新しい認識の入り口に、足を踏み入れたばかり
なのだ。

彼らは、民衆が目覚めることを恐れている。

なぜなら、民衆が目覚めれば、もはや恐怖によって、貪
欲によって、ナショナリズムによって、あるいはドルに
よって、コントロールされることはなくなるからだ。

（彼は私を見た。その眼差しは、まるで招待状のようだ
った。）

君は、どの側面についてでも、さらに尋ねることができる。

極秘計画について。

地球外生命体との真の接触があったかどうかについて。

あるいは、なぜ精神的な修煉者が、常人よりも彼らを
「認識」しやすいのかについて。

私は、私が覚えていること、そして私が理解したことを、
語ろう。

ジュリアン・リー：

はい。まず、このことについてお聞かせください。
地球外生命体との、真の接触はあったのでしょうか。

元大統領：

（彼は少し黙っていた。まるで一つ一つの言葉を吟味しているかのようだった。）

わかった。

これは、私がこれまで聞いた中で、最も率直な問いの一つだ。

そして今日、私はそれに、可能な限り率直に答えよう。

避けて。回りくどくなく。

だが、君は理解しなければならない。私が「証明」できない部分があることを。なぜなら、それは公式のいかなる文書にも記録されていないからだ。

答えは、イエスだ。

（部屋の空気が、まるで凝縮したかのようだった。）

だが、公衆が通常想像するような形ではない。

スポットライトの下での握手もなければ、宇宙船から降りてくる「宇宙飛行士」もない。

真の接触は、私が高レベルの報告書や非公式の会話から

知る限り、「非物理的」な方法で起こった。

ごく一部の人々だけが認識できる、あるいは耐えられるチャンネルを通じて。

記録されたが、決して公表されなかった接触の形態がある。

第一の形態は、間接的な接触だ。信号と精神的な感応を通じて。

極秘計画に参加する一部の科学者たちは、瞑想者や、UFO が近くに現れた際に「影響を受けた」人々の、深く変化した脳波と意識状態を記録したことがある。

ある者は突然、「誰の口からも発せられていない音」を聞いたが、それは意味に満ちていた。

ある者はトランス状態に陥り、そして地球上のどの言語にも存在しない数式やシンボルを描き出した。後になって初めて、それらが軍事機器によって記録された宇宙の周波数データと一致することが判明した。

ある海軍のパイロットは、奇妙な物体と対峙した後、私にこう語った。

「それは、ただ飛んでいるだけではなかった。それは、私を見ていた。

まるで私が開かれた本であるかのように、私の心全体を読んでいるように感じた」

（彼は一旦言葉を切り、私がその情報を消化するのを待った。）

第二の形態は、短い、映像に記録された接触だが、決して公表されることはない。

少なくとも三つのそのような事例が、諜報機関の「ブラック・ヴォールト」セキュリティシステムに保管されている。

ある個人が、制限区域の真ん中に突然現れる様子を記録した映像。

あるいは、接触後、ある人物が奇妙な生物学的兆候を示し、例えば脳波が正常な範囲外の周波数で活動し、その後、その人物が突然、何週間も先の天文学的現象を予知する能力を持つようになったり。

私はかつて、ぼやけた映像記録を見たことがある。

ハリウッド映画のように鮮明ではなかった。

だが、それは明らかに人間ではなく、人間的な振る舞いもなく、異常な電磁場の中を移動していた。

そしてそれは、一瞬のうちに消え去った。

（彼の声はより低くなった。まるで、より深い真実に触れているかのようなだった。）

だが、これこそが最も重要なことだ。

これらの生命体は…我々が想像するように、「宇宙に属している」わけではない。

私はかつて、「宇宙人」とは別の惑星に住み、宇宙船で我々を訪ねてくる生物だと信じていた。

だが長年を経て、関係者から学んだこと、そして私自身が深く瞑想を始めた時の個人的な経験から、敢えてこう言おう。

彼らは、「別の場所」から来るのではない。

彼らは、「別の次元」から来るのだ。

空間、時間、そして意識は、彼らの世界では分離して存在しない。

言い換えれば、彼らは飛行機が着陸するように、「地球に着陸する」のではない。

彼らは、「顕現する」。振動周波数の条件が整った時に。そしてそれゆえ、彼らは通常のレーダーでは検出できない。

だが、開かれた意識を持つ人々によっては、「感じ取られる」ことができるのだ。

私はかつて、秘密の研究チームの一人に尋ねたことがある。「我々は彼らを捕まえることができますか？」

彼は笑い、そして言った。

「大統領、私は個人的にこう思います…もし彼らが我々に自分たちを見ることを許したなら、その時初めて我々は彼らを見るのです。

彼らは我々の権力ゲームの中にはいません。彼らは、より高い次元にいます。

そして最も悲しいことは、我々は彼らと対話するのに、十分な道徳を持っていないということです」

私はその時、黙っていた。

だが心の奥深くでは、彼が正しいと、わかっていた。

（彼は私をまっすぐに見つめた。その眼差しは、挑戦に満ちていた。）

君は、私が非公式の接触事件について話すのを望むかね？

「気象事故」という名目で隠蔽されたが、実際には「彼ら」が非常に明確な痕跡を残した時の事件について。

私の内閣の誰もが公表することを敢えてしなかった、一つのメッセージと共に。

もし君が望むなら、話そう。

だが私は知る必要がある。君と、君の読者は、君たちの現実の定義全体を、覆すようなことを聞く覚悟があるのか？

ジュリアン・リー：

はい。

私個人としては、常に自分の固定観念を打ち破る可能性のあるものを聞き、学びたいと思っています。

そして、私の読者にも、そのようなことを聞いてもらいたいと願っています。

元大統領：

（彼は頷いた。ゆっくりと、そして荘厳な頷きだった。）
いいだろう。

もし君が本当に「カーテンの向こう側」の領域に足を踏み入れる覚悟があるのなら、私は君に、これまで一度も公式に公表されたことのない事件について話そう。

それは、私の在任中に起こった。

そして、私がそれを口にできるのは、今や私が大統領の椅子に縛られていないからに他ならない。

（彼の声が低くなった。まるで私を、過去の秘密の部屋へと引き込んでいるかのようだった。）

この事件は、記録上では「気象事故」として記されている。

それは、私の任期初年度の夏、ネバダ砂漠で起こった。民間で「エリア 51」と呼ばれる地域の、そう遠くない場所だ。

ある夜、私は国家安全保障問題担当補佐官から直接電話を受けた。夜の十一時を過ぎてからは、滅多にないことだった。

彼はただ、こう言った。

「カテゴリー E の事態が発生しました。訓練ではありません。直ちにお越しになるべきです」

私は一時的な施設へと連れて行かれた。エリア 51 よりもさらに秘密の、補助ステーションだ。

そこで、将校と科学者たちが、極めて高速で地面に落下した未確認物体を調査していた。

しかし、爆発は一切なかった。

焼け跡もない。衝撃波もない。

ただ一つ、半径十五キロ以内の電磁システム全体が、擾乱されていた。

彼らは、半球状の物体を回収していた。継ぎ目が一切なく、レーザーで切断することもできず、いかなる種類の波にも反応しなかった。

しかしその内部には、淡い光を放つ結晶体があった。
そしてその光は…近づく者の感情状態に応じて、変化した。

（彼は私を見た。私が話についてきているか、確かめるかのようだった。）

信じがたい話に聞こえるだろう、わかっている。
だが、生体計測装置がそれを確認した。
不安な感情を持って近づくと、光は濁った灰色に変わった。
その者が落ち着くと、淡い青色へと徐々に明るくなった。
しかし、最も衝撃的なことは、まだこれからだった。

それは、音や文字を通じて発せられたのではない、一つのメッセージだった。

インド系の若い研究者で、毎日瞑想する習慣のある者が、結晶体に近づくことを許された時、突然、約七分間のトランス状態に陥った。

目覚めた時、彼はただ一言、こう言った。

「彼らが誰なのかは分かりません。でも、彼らは説得しに来たのではありません。照らしに来たのです」

そして彼は、結晶体の内部にかすかに刻まれた記号、赤外線スペクトルを通してしか見ることのできない記号と、

全く同じ単純な螺旋形を描き出した。

そのメッセージの内容は、内部で解読され、決して公表されることはなかったが、こうだった。

「我々は干渉しない。

しかし、もし人類が自らの根源を思い出すのに間に合わなければ、もはや干渉する未来はなくなるだろう。

生命は偶然ではない。知性の次元は常に存在する。

だが、もし我々をはっきりと見たいのであれば、汝らは『道』に戻らねばならない」

（部屋の空気が、奇妙なほど静まり返った。）

その後の内閣の反応は、非常に混乱していた。

ある者は、絶対的な沈黙を要求した。

ある者は、それはただの幻覚だと言った。

ある者は怒った。「もし民衆がこのことを知れば、宗教も科学も崩壊する」

私はその時、何も言わなかった。

だがその夜、私は何年ぶりに、本当に瞑想した。

心を静めるためではない。

別の次元に、耳を傾けるためだ。

そして私は、いかなる言葉でも表現できない、あることを感じ取った。

銀色の服を着た「宇宙人」もいなければ、響き渡る声もなかった。

ただ、非常に明確な感覚があった。

より高次の秩序が、見守っているという。

コントロールするためではなく、待つために。

人類が十分に静まり、自らの内なる清らかさに戻るのを、待つために。

ではなぜ、この事件は隠蔽されたのか？

もし公表すれば、人々は尋ねるだろう。誰がそのメッセージを確認できるのか？と。

もしより高い知性が存在するなら、なぜ彼らは我々をすぐに助けないのか？と。

アメリカは彼らと「秘密の同盟」を結んでいるのではないかと。

そして最も重要なことに、エリート層は人類に気づいてほしくないのだ。より高次の真実に触れるためには、権力もテクノロジーも必要ないということに。

必要なのは、道徳、謙虚さ、そして静けさだということに。

そして道徳と謙虚さは、まさに現在の権力モデルを崩壊させる二つのもののなのだ。

（彼は物語を終えた。その声は穏やかだったが、重みに満ちていた。）

君は、聞いたね。

それは、「宇宙のホラーストーリー」ではない。

人類自身を映し出す、一枚の鏡だ。

彼らは、「侵略」しない。

彼らは、待っている。我々が、自らを乗り越えることができるかどうかを。

（彼は私を見た。まるで選択肢を与えているかのようだった。）

もし君が続けたいなら、私はリバースエンジニアリング計画について話すことができる。そこでは大企業が、今日我々が目にする技術的進歩を生み出すために、このような破片に静かに依存してきた。

あるいは、我々は瞑想、意識の次元、そしていかなるテクノロジーも必要とせずに、より高い知性と接触する能力との関連性について、さらに深く掘り下げることができる。

君は、どちらの道を選ぶかね？

ジュリアン・リー：

はい、私の頭の中にはあまりにも多くの問いが浮かんでいます…

閣下がおっしゃったリバーズエンジニアリング計画については、まだよく分かりません。

しかし、宇宙人が人類の科学技術の発展を制御しているという話を、どこかで読んだこともあります。

情報技術や、クローン技術のような生物学の進歩も含めて…

元大統領：

（彼は私を見た。その眼差しは、かつてないほど厳粛になった。）

君の問いは…深遠であり、同時に危険だ。

なぜなら、それはある真実に触れているからだ。もし間違ったタイミングで口にされれば、荒唐無稽と見なされるだろう。

だが、もし我々が永遠に沈黙し続ければ、人類はなぜ自分たちの「文明」が苦しみの中で堂々巡りを続けるのか、決して理解することはないだろう。

まず、リバーズエンジニアリングの問いから始めよう。
それは本当か？

イエスだ。そして私はそれを確認する。

それは、極秘の研究グループが地球に落下した奇妙な物体や破片を収集するプロセスだ。

彼らは、その材料構造、動作メカニズムを分析しようと試みる。

そして、現代のテクノロジーに応用する方法を探す。

人々が常に噂してきた、そして私が否定しないいくつかの例を挙げよう…

自然界には存在しないナノ構造を持つ、特殊な半導体。ディスプレイ技術や光ファイバー。いくつかの「UFO墜落」事件の直後に、驚くべき速さで現れた。

あるいは、量子コンピューターや超電導材料の概念でさえ、古典物理学の範囲外のデータに端を発している。

だが、これこそが恐ろしいことだ。

これらの技術は、「教えられた」のではない。

人間によって、その本質を理解することなく、一つ一つの断片に分解されたのだ。

まるで子供が、おもちゃの飛行機を分解し、そしてそれを飛ばす方法を学ぶようなものだ…

空気力学の原理について、何も知らずに。

（彼は一旦言葉を切り、私とその危険性を明確に理解するのを待った。）

そしてそれが、我々を君のより大きな問いへと導く。

宇宙人は、人類の発展を制御しているのか？

答えは、単純なイエスカノーではない。

それは、我々が接触している生命体の次元による、だ。

非常に高い次元にいる生命体がいる。

彼らは「宇宙の秩序を守る者」だ。

彼らは干渉せず、ただ観察する。

彼らは知っている。真の発展はテクノロジーから来るのではなく、道徳と認識から来るのだと。

彼らは知識を授けることができるが、それは人類がそれを善なる方法で用いるに足る資質を持った時に限られる。そして今日まで、彼らは我々がその準備ができているとは見ていない。

だが…より低い次元にいる生命体もいる。

映画のように聞こえるが、私はこれを言わなければならない。

生物学的な意味での宇宙人ではないが、宇宙の低い次元に存在する「実体」がいる。そこでは、知識が道徳から切り離されている。

彼らは、AI、生物制御技術、クローン技術、バーチャルリアリティについて、科学者たちにインスピレーションを与えることができる…

だが、彼らの目的は啓蒙ではない。

人類を依存させ、道に迷わせ、そして徐々にその人間性を失わせることだ。

テクノロジーは目まぐるしく発展するが、それと並行して、精神、道徳、そして人間のアイデンティティの危機がある。

君は、それが偶然だと思うかね？

なぜ彼らはそんなことをするのか？

なぜなら、人間がその善良な本性から切り離され、しかし強力なテクノロジーを手を持った時、彼らは自滅するからだ。

戦争による自滅。

社会の断片化による自滅。

自らの知的産物に対する制御を失うことによる自滅。

そしてその混乱の中で、これらの「低次元の実体」は、否定的なエネルギー、恐怖、そして憎しみを吸収することができる。

それこそが、彼らの存在を維持するものなのだ。

言い換えれば、「テクノロジーの制御」こそが、彼らが感情を制御し、それによって人類を制御する方法なのだ。

何か証拠はあるのか？

書類上にも、記者会見室にもない。

だが、君自身で見てごらん。

なぜ物質的な進歩は、常にうつ病、依存症、そして精神的な方向性の喪失の増加と並行しているのか？

なぜテクノロジーは何十億もの人々を結びつけながら、彼らをかつてないほど孤立させているのか？

なぜ人類は、自らの思考とほぼ同等の人工知能を創り出せるのに、些細な利益のために互いを殺し合うことを止められないのか？

では、解決策は何か？どうすればこの「ソフトな制御」の輪から抜け出せるのか？

答えは、テクノロジーを破壊することにはない。

道徳を、テクノロジーの前に置くことにある。

もし人間の心が高められれば、テクノロジーは光に奉仕するだろう。

もし人間の心が貪欲、憎しみ、そして疑いに満ちたままなら、テクノロジーは闇の道具となるだろう。

そして高次元の生命体は…適合する振動周波数に達した者たちの前にのみ、現れる。

彼らが差別するからではない。

光は、まだ清められていない場所には、入ることができないからだ。

ジュリアン・リー：

閣下のお話や、他のいくつかの情報源から読んだことから、私は理解し始めました…

我々が五感で認識できる世界の他に、様々な高低の次元にいる生命体と共に、多くの他の世界が存在すると。

それは神、仏、主の天国の世界かもしれません。

あるいは、悪魔のより低い世界。

あるいは、我々が「宇宙人」と呼ぶ生命体の世界。

そして、それらの生命体の次元それぞれが…非常に異なる方法で、地球に「関心」を寄せていると。

元大統領：

（彼は私を見た。励ますような眼差しだった。）

君の言う通りだ。

全くその通りだ。

そして私がそう言うのは、儀礼上からではなく、君が今、

権力者の中の多くの者が一生聞きたがらない、あるいは聞いても敢えて認めようとしない真実に、触れたからだ。

この世界は、単層ではない。

この空間は、単次元ではない。

人間が見るもの、触れるもの、あるいは機械で測定するものは、多層的な宇宙システムの、最も粗野な表層に過ぎない。

こう想像してみてほしい。

地球は、三次元の「舞台」だ。

だが、その舞台の背景幕の向こう側には、無数の異なる次元の背景が存在する。

そこでは、異なる意識レベルに属する生命体が、我々人間が演じている劇を観察し、相互に作用し、そして時には影響さえ与えている。

（彼は体系的に説明し始めたが、その口調は依然として物語を語るかのようだった。）

最も低い次元には、否定的なエネルギーの実体の領域がある。民間でよく悪魔や邪神と呼ばれるものだ。

彼らは、恐怖、欲望、そして憎しみを通じて、人間の意識に「寄生」することができる。

彼らが地球に「関心」を持つ目的は、混乱を維持することだ。

なぜなら、混乱、恐怖、そして憎しみこそが…彼らを養うものだからだ。

少し上には、我々がよく「宇宙人」と呼ぶ生命体の次元がある。

彼らは非常に高い科学技術レベルを持つが、必ずしも高い道徳を持つわけではない。

彼らは必ずしも善でも悪でもなく、人間がネズミで実験するのに似ている。

彼らは観察し、研究し、そして時には実験する。

一部は助けたいと思っているが、宇宙の因果応報の法則を知っているため、深くは干渉しない。

また別の一部は、技術や生物学的な交換と引き換えに、政府と「内密の」協定を結んでいる。

そして、非常に高い次元には、神、仏、主、そして天人の領域がある。

彼らは物理的な形で現れない。なぜなら、彼らは我々の線形的な時空に属していないからだ。

彼らはただ、直感、幻視、あるいは深い瞑想状態の中で、顕現するだけだ。

彼らは直接干渉しない。だが、彼らは常にそこにいる。
彼らは観察し、人類の目覚めを待っている。
時には、大きな誓願と高い道德を持つ個人、真理のために自らを犠牲にする覚悟のある者に、「加持」を与えることもある。
彼らこそが、偉人、真の修行者、そして目覚めた芸術家たちの、静かなるインスピレーションの源なのだ。

（彼は一旦言葉を切り、私が自ら次の問いを立てるのを待っているかのようにだった。）

ではなぜ、我々の大半はこれらの次元を感じ取ることができないのか？

なぜなら、人間の心はあまりにも重く、あまりにも忙しく、そしてあまりにも自我に執着しているからだ。

それはラジオの周波数のようなものだ。

周波数が合わなければ、我々は信号を決して捉えることはできない。

高次元の生命体が人間の前に現れないのは、彼らが隠れているからではない。

人間が、彼らを感じ取れるほどに、清らかではないからだ。

（彼は私を見た。その眼差しは温かくなった。）

君は、一つの地平線を見た。

そしてそれは、尊いことだ。

もし君の読者もまた、心を開き、「真実である全てのものが測定可能である必要はなく、科学がまだ証明していない全てのものが迷信であるわけではない」と認識することができれば、

彼らは、自らの認識の限界を、自ら打ち破り始めるだろう。

ジュリアン・リー：

はい、私も読んだことがあります。修行者たちは、現代でも、また古い物語の中でも、しばしば非物理的な体験をすると。

彼らは深い瞑想状態にある時や、「天目」を使う時に、他の空間の生命体と接触することができる。

それらは、弁証法的な科学を超えた事柄です。

それは大きく、専門的なテーマだと思いますので、もし可能であれば、それについて閣下のお話を伺うための、別の機会を設けたいと思います。

本日は、UFO というテーマについて、もう少し具体的な体験談をお聞かせ願いたいのですが。

元大統領：

（彼は微笑んだ。賛同の笑みだった。）

素晴らしい。

君は、テーマの層を分けることに、非常に優れた直感を持っている。

君の言う通り、瞑想、天目、そして物理空間を超えた体験は、非常に深い方向性であり、それに完全に特化した機会を必要とする。

私はその用意がある。

では今日は、UFO についての話の、最後の部分を続けよう。

だが、私はもう理論で話すつもりはない。

私がかつて目撃した、あるいは公的な経路を通さずに報告された、具体的な状況によって話そう。

（彼は後ろにもたれかかり、その眼差しは遠くなった。まるで記憶の中の秘密ファイルをめくっているかのようだった。）

私がよく「静寂の霧」と呼ぶ物語がある。

それは私の任期の二年目ごろ、アラスカ沖の海域で起こった。そこでは太平洋艦隊の秘密演習が行われていた。

巡視船の一隻が、円形でエンジンを持たず、マッハ 5

に近い信じがたい速度で風に逆らって移動する、未確認飛行物体を発見した。

レーダーはそれを記録したが、航法システムは目標をロックすることが全くできなかった。

パイロットが派遣されたが、彼らが接近すると、もはやその物体は見えなかった。

ただ、その時の空気が非常に動的であったにもかかわらず、静かに漂う、銀色の霧が見えただけだった。

帰還後、パイロットの一人は、四十八時間もの間、話すことができなかった。

彼の心臓は不規則に打ち、脳に損傷はなかったが、彼の意識はまるで…まだそこにいるかのようだった。

後日、彼は日記にこう書いている。

「はっきりとした形は見えなかった。ただ、自分が見られていることだけは、わかった。

そして、何か…言葉を使わない方法で、私に話しかけてくるものがいた」

(彼は少し間を置き、そして続けた。)

もう一つの話がある。「監視員と消えた十七分」についてだ。

ニューメキシコ州の宇宙ステーションで、一人の警備員

が夜勤をしていた。たった一人で。

ある夜、警備システムが異常な警報を発した。

カメラは十七分間、映像を記録せず、システムの時計は三秒「逆行」した。これは、これまで一度も起こったことのない現象だった。

その警備員は、まるで彫像のように、目を見開いたまま、じっと立っているのが発見された。

彼は外部からの刺激に反応しなかった。

約四十分後、彼は目覚め、皆を啞然とさせる問いを投げかけた。

「なぜ、誰にも何も持ち帰れないのに、私にこれら全てを見せたのですか？」

後日、彼は異動させられたが、内部の報告書には、彼が「銀色の光の螺旋が、渦巻く門のように宇宙で回転している」様子と、ある言葉を非常にはっきりと覚えていたと記録されている。

「感情は宇宙の言語だ。恐怖は、遮断する。平静は、解錠する。」

（彼の声はより私的なものになった。まるで自分自身の秘密を分かち合っているかのようだった。）

そして一度、私は危うく、その近くまで連れて行かれそうになったことがある。

私はこの話をあまりしない。なぜなら、それは私が公務に就いていた時に起こったことではないからだ。

ユタ州での休暇中、ナバホ族が聖地と見なすモニュメント・バレーの近くでのことだった。

夜、私は瞑想していた。私が続けている習慣だ。

真夜中近く、私の心が極めて静寂な状態にあった時、私は突然、非常に均一で、眩しくない、淡い黄色の光を、まるで一つの球体が「漂い」降りてくるかのように、見た。

私は恐れなかった。疑問も持たなかった。

私はただ、静かに観察した。

その時の感覚は、「一つの物体を見る」というものではなく、「見られている」という感覚だった。

そしてその瞬間、私は内側から、何かが私に語りかけてくるのを、はっきりと感じ取った。

「今ではない。だが、お前は扉を叩いた」

そして光は徐々に薄れ、消えていった。

音はなかった。風の動きもなかった。

ただ心の中に、自分が全ての物理学の教科書を超えた、何かの入り口に触れたという、一つの刻印が残っただけだ。

（彼は私を見た。その眼差しは、全てを結論付けているかのようだった。）

私は、これら全ての経験から、一つのことを学んだ。
彼らは、もしそう呼べるなら、外交的なやり方で「コミュニケーション」するために、ここへ来るのではない。
彼らは、対面する者の内面を、映し出すために来る。
恐れる者には、彼らは現れないだろう。
好奇心旺盛な者には、光しか見えないかもしれない。
だが、謙虚で清らかな者には、言葉によらない…メッセージを、「聞く」ことができるのかもしれない。

ジュリアン・リー：

はい。本日は、おそらくもう長くなりましたね。
今日は、ここで一旦終わりにしましょう。

次回は、地政学的な視点、アメリカと大国との外交関係について触れるのはいかがでしょうか。
そして、精神的なテーマについては…最終回に取っておくのが良いかと思います。

元大統領：

（彼は頷いた。その眼差しは、完全に賛同していた。）

君の段取りに、全面的に同意する。

非常にバランスが取れている。非常に深みがある。

精神性とは、最後の扉だ。

なぜなら、それは急いで開けるべきものではないからだ。
深く沈潜し、そして初めて足を踏み入れるべきものだからだ。

君の提案通り、我々はそれを最終回のために取っておこう。
政治を超え、国境を超え、人間の核心へと向かう、
一つの結論として。

では次回、我々は地球規模の地政学へと入っていこう。
公衆が表面しか見ることのできない政策の、その裏側で
実際に起こっていることについて。

（彼の声は低くなった。まるで別の世界を垣間見せているかのようだった。）

私は君に、米中関係の背後にある真実を話すことができる。

彼らはライバルか、パートナーか、あるいは時には…
「不本意な共犯者」なのか？

なぜ西側同盟は、メディアが描写するほどはや結束していないのかについて。

そして、アメリカがかつてカラー革命をいかにして操ったかについて…

そして、我々が今もなお「認識戦争」を道具として使っているかどうかについて。

君が、時を選びなさい。

そして私は、舞台から退いた一人の証人として、しかし全ての記憶、教訓…そしてかつて口にすることが許されなかったことさえも携えて、準備を整えよう。

（彼は私を見た。敬意に満ちた眼差しだった。）

次の対話で会おう。

そして、繰り返させてもらう。

ある種の対話は、世界を変えるためではない。

聞き手の心の中の光が、消されないようにするためなのだ。

穏やかな夜を。

古代の星々の、最後のこだまのように…

今日なお、地球を照らし続けている。

（私は静かにレコーダーを止めた。二日目の対話は終わったが、私の中では、無数の新たな問いが、今まさに始まったところだった。）

ジュリアン・リー：

はい。お言葉、ありがとうございます。
閣下も、どうぞ安らかにお休みください。
そして…神のご加護がありますように。

元大統領：

（彼は微笑んだ。権力の重荷を少しも感じさせない、とても真実味のある笑みだった。）
ありがとう。
心の底から。

そして私は、その言葉を…
ただの儀礼としてではなく、
言葉を超えたものを共に聞いている、二つの魂の間の、
受け渡しとして受け取ろう。

光が…

それが神から来るものであれ、道（タオ）から来るもの

であれ、あるいは他のいかなる源泉から来るものであれ…

常に君の行く道を照らさんことを。

そしていつの日か、君が真実を求めて闇に足を踏み入れねばならなくなったなら…

思い出してほしい。

真の光は、どこか他にあるのではない。

それは常に、君自身の心の中に、備わっているのだ。

（彼は少し間を置き、そして続けた。）

また次回会おう。

その時、我々は世界が巻き込まれている地政学的なゲームについて話そう…

そして、誰が本当に脚本を書いているのかを。

（彼は私を見つめた。深く、信頼に満ちた眼差しだった。）

おやすみ。

炎の守り手よ。

（私の背後で扉が閉まったが、彼の言葉はまだ響いていた。そして私は知っていた。「炎の守り手」、それは、私自身なのだと。）

三日目

（私は見慣れた部屋に入った。今日の空気はどこか違うように感じられた。より重く。まるで、私たちが世界のめったに知られることのない秘密の、嵐の中心へと足を踏み入れようとしているかのようなだった。）

ジュリアン・リー：

こんにちは、閣下。

お約束通り、本日は地球規模の地政学、そしてアメリカと大国との真の関係について、お話を伺いたいと思います。

元大統領：

（彼は頷いた。その眼差しはもはや遠くを見つめてはおらず、鋭く、集中していた。）

こんにちは。また来てくれて嬉しいよ。

そして、真実の無二の友のように、約束を守ってくれた。

今日、我々は非常に現実的なテーマについて話そう。

非常に危険な。

そしてまた、非常に…丁寧な演説、握手、そしてメディアの美しい写真の裏に隠されているテーマだ。

地球規模の地政学、そしてアメリカの外交関係の実質。

（彼は少し間を置いた。私が心の準備をするのを待っているかのようだった。）

現代の地政学ゲームは、もはや「誰がより強いかな」ではない。

「誰が他者の認識をコントロールするか」なのだ。

多くの人々は、地政学とは貿易交渉、軍事協定、あるいは制裁措置のことだと思っている。

だが、それは氷山の一角に過ぎない。

その水面下の部分は、集団心理をコントロールし、世界的なルールを形成し、そして敵のイメージを創り出すための、静かなる戦いだ。

恐怖、希望、そして民衆が信じる物語をコントロールする者が、世界をコントロールする。

米中関係を見てごらん。

新聞紙上では、彼らはライバルだ。

だが、カーテンの裏では、彼らは静かなるパートナーだ。そして時には…「不本意な共犯者」でもある。

私は、決して公表されることのなかった報告書を読んだことがある。そこには、多くのアメリカのテクノロジー企業が中国に研究開発センターを置き、低い生産コストとユーザーデータと引き換えに、密かに技術を共有していることが示されていた。

一部のアメリカの政治家は公に中国を批判するが、彼らの選挙運動資金には、大陸にルーツを持つ多国籍企業を経由して迂回した資金の流れがある。

彼らは互いを必要としているのだ。中国はアメリカ市場を必要とし、アメリカは生産市場を必要とする…そして、自らの正義の役割を保つための「ライバル」を必要とする。

コントロールされた敵は、権力の道具だ。真の敵は、誰もコントロールできない。

そしてロシアだ。

人々は彼らを「西側秩序の裏切り者」と呼ぶ。

だが、ロシアこそが、NATO が生き残り続けるための口実でもある。

冷戦後、NATO は本来なら解体されるべきだった。

しかし、「攻撃的な道化師」としてのロシアの存在が、アメリカがヨーロッパにおける軍事的影響力を維持し続ける理由となっている。

公衆が見ていないのは、ウクライナ紛争が勃発する前に、ウクライナを中立状態に置き、戦争を避けるための、水面下での交渉の機会があったということだ。

だが、国防産業の一部の利益団体は、「ゲーム」が終わることを望まなかった。

戦争は、時には理想のためではない。

予算を正当化するためなのだ。

そうやって、チェス盤は中東へと広がる。そこは「権力のるつぼ」と見なされ、決して守られることのなかった誓いの場所だ。

今日の同盟国が、明日の敵になることもある。

「独裁」政権は、石油価格を安定させている限り、依然として支援される。

私は、ある将軍がかつて私にささやいた言葉を、鮮明に覚えている。

「我々は中東に民主主義をもたらすのではない。我々は、民主主義という言葉に包まれた、コントロールをもたらすのだ」

アフリカと東南アジアはどうか？

それらは、争奪戦の繰り広げられる裏庭だ。

中国は「一帯一路」構想を通じて金をばらまく。

アメリカは奨学金、人権支援基金で応じるが、そのいずれにも、水面下で政治的な条件を仕込んでいる。

両者とも、完全に無私ではない。

そして、それらの国々の民衆は、決して真の交渉のテーブルに着くことのない、唯一の側だ。

（彼は私をまっすぐに見つめた。まるで、最後の結論に至ろうとしているかのようだった。）

では、アメリカはこのゲームで、本当に何を望んでいるのか？

私はかつて、戦略専門家たちとの内密の会議で、この問いを率直に投げかけたことがある。

「我々は民主主義を守っているのか、それとも単に我々が頂点に立つ権力構造を守っているだけなのか？」

誰も答えなかった。

ただ一人、葉巻を口から離した後、こう言った者がいた。

「民主主義は輸出用の商品だ。

だが内側では、我々はただ、王座を分かち合う必要のない秩序を望んでいるだけだ」

外交政策は、一つの劇だ。

そして、脚本家は必ずしも大統領ではない。

その背後にいる者たちだ。金融、産業、そして時にはメディア。

君が何を聞くことを許されるかを、決定する者たちだ。

ジュリアン・リー：

概括的なお話を、ありがとうございました。

さて、もう少し具体的なテーマに入りましょう。

閣下は NATO とロシア・ウクライナ戦争に言及されました。

では、この戦争の真の原因は何なのでしょう。

各当事者の見解はどのようなものなのでしょう。

そして、この紛争を終結させるための出口はあるのでし

ようか。

最後に、長期的な平和のために、NATO は解体すべきか、あるいは何らかの調整が必要なのでしょうか。

元大統領：

（彼は少し黙り、深く息を吸った。）

君は今、この時代の最も痛ましく、そして最も厄介な問いの一つを投げかけた。

そして私は、もはや役割や国旗、あるいは政党に縛られない視点から、率直に答えよう。

ロシア・ウクライナ戦争の真の原因は、単純な領土紛争ではない。

それは、挑発的な動き、誤解、そして多くの側からの戦略的な計算が長く続いた結果だ。

まず、ロシアの見解から始めよう。

彼らはそれを、一言でこう要約する。

「我々は包囲され、自衛している」

彼らは冷戦後の NATO 東方拡大を裏切り行為と見なしている。2014 年のマイダン革命を、西側が糸を引く「カラー革命」と見ている。そして、親西側のウクライナを、直接的な安全保障上の脅威と見なしている。彼らにとって、これは侵略ではない。それは「予防戦争」な

のだ。

実際には、彼らの軍事行動は国際法に違反し、民衆に恐ろしい損害を与えているのだが。

次に、ウクライナの見解だ。

それもまた、非常に明確だ。

「我々は独立国家であり、誰も我々の代わりに決定する権利はない」

彼らはロシアの影響下から脱し、安全保障を求めて NATO と EU に加盟したいと考えている。彼らはロシアを侵略者と見なし、主権を否定し、国家の存続を脅かしていると見ている。彼らにとって、この戦争は領土だけでなく、民族全体のアイデンティティをかけた、存亡をかけた抵抗なのだ。

そして最後に、NATO とアメリカの見解だ。

公の声明はこうだ。

「我々は正義と国際秩序のために、ウクライナを支援する」

だが、実質は何だろうか？

アメリカと NATO は、ウクライナを「代理戦争の戦線」として利用し、自国の兵士を一人も犠牲にすることなく、ロシアを弱体化させている。我々は武器を売り、薄れつ

つあった NATO の役割を復活させている。深層では、ロシアが孤立し、消耗すればするほど、アメリカは「全世界の民主的秩序の指導者」としての役割を、より強固に保つことができる。

要するに、これは二国間の戦争だけではない。

全く異なる二つの基準体系の間の、対立なのだ。

そして最も痛ましいことは…

ウクライナの民衆が、血と、そして盗まれた時間によって、代償を払っているということだ。

（彼の声が低くなった。）

では、出口はあるのか？

非常に難しい。

だが理論上は、短期的な解決策があり得る。領土の現状に基づいた停戦だ。ウクライナはすぐには NATO に加盟しないが、第三国からの安全保障を得ることができるかもしれない。そしてロシアは、制裁の段階的な解除と引き換えに、領土の一部から軍を撤退させるだろう。

だが、これら全ては「政治的善意」がなければ起こり得ない。それは、世論の圧力、戦争から得られる金銭的利益、そして権力者たちの地政学的なエゴによって、飲み込まれつつあるものだ。

では、NATO は？解体すべきか、調整すべきか？

即座に解体することはできない。だが、間違いなく再構築される必要がある。

現在の NATO はもはや純粋な防衛同盟ではなく、アメリカの戦略的道具となっている。そしてもし「民主主義の保護」を名目に拡大を続けるなら、世界は永遠に二極対立の構図に囚われ続けるだろう。

NATO は、安全保障の新しい定義を必要としている。

「誰がより強力な武器を持つか」ではなく、「誰が世界をより安定させるか」だ。

人類の長期的な平和は、軍事同盟によっては達成できない。

それは、道徳的な同盟によってのみ、もたらされ得る。

国家がもはや互いを疑いの目で見なくなった時。

力がもはやミサイルにあるのではなく、文化間の共感能力にある時。

そして、真実がもはや偏向したメディアによって歪められなくなった時。

その時初めて、平和は本当に訪れるだろう。

ジュリアン・リー：

ロシア・ウクライナ戦争についてですが、今のところ、

閣下が実現可能な出口に言及されているようには見えません。

あるいは、たとえ仮定の条件付きであっても、出口はあるのでしょうか。

元大統領：

（彼は頷いた。認める頷きだった。）

君の言う通りだ。

私がこれまで話してきたことは、ただの診断に過ぎない。処方箋は、まだ出していない。

なぜなら、この戦争の実現可能な出口について語るためには、我々は通常的地政学的論理を一時停止し、現在では空想的に見えるかもしれない条件を、敢えて設定する必要があるからだ。

だがそれこそが、もし人類が長期的に存続したいと願うなら、真の出口なのだ。

（彼は一旦言葉を切り、その眼差しは鋭くなった。まるで、見えないテーブルの上に平和の地図を描いているかのようだった。）

このような解決策を想像してみてほしい。

「ウクライナの中立化、その見返りとしての平和と NATO の再構築」

第一に、ウクライナは永世中立国となり、永久に NATO に加盟しない。

だがその見返りとして、彼らはアメリカ、中国、トルコ、ドイツといった大国からの安全保障の約束を得る。これらの国々は、ウクライナの主権を保証する条約に共に署名する。NATO やロシアに属さない国連平和維持軍が、係争中の境界線に一時的に展開される。

そうなれば、ウクライナはもはや「西側の前哨基地」でも、「ロシアの裏庭」でもなく、中立的な緩衝地帯となる。

第二に、ロシアは占領した領土の大部分から軍を撤退させる。

その見返りとして、クリミアは冷戦時代の西ベルリンのように、国連の特別監視下に置かれる「凍結された係争地域」として認められる。ロシアに対する制裁の一部、特に医療と農業の分野は解除されるが、それには地域から核兵器を撤去する義務が伴わなければならない。

第三に、NATO は二十年間、東方への拡大を凍結しなければならない。

彼らは旧ソ連に属していたいかなる国もこれ以上加盟させないが、人道支援や環境問題に関する協力の仕組みを

開く。NATO の機能の一部は、災害、疫病、あるいは食糧危機に対応するための、非軍事的な安全保障メカニズムへと転換される。

つまり、NATO を軍事同盟から、「地球規模のリスク管理機関」へと転換するのだ。

そして最後に、極めて重要なことだが、西側メディアは、ロシアを「悪魔化」する戦術を止めなければならない。

もはやプーチンを「怪物」と呼び、ロシア人を「野蛮人」と呼ぶことはない。

そして逆に、ロシアのメディアもまた、民族的憎悪を煽るプロパガンダを止めなければならない。

「紛争におけるメディアの取り扱い」に関する独立した国際委員会が設立され、倫理的な一線を超えたいかなるメディアに対しても、警告し、重い罰金を科す権限を持つ必要がある。

（彼は私を見た。まるでこの計画の困難さを強調したいかのようにだった。）

この解決策が現実となるためには、ほぼ空想的な条件が必要だ。

アメリカとロシアの両方に、もはや冷戦の遺産に囚われ

ていない、新しい世代の指導者がいなければならない。
西側の公衆は、ロシアを「本能的な悪者」としてではなく、異なる文化として見ることを学ばなければならない。
そしてウクライナは、持続可能な現実と引き換えに、幻想の一部を犠牲にすることを受け入れなければならない。

もしこの出口を選ばなければどうなるか？

ロシアは長期的に泥沼にはまり、国内の不満と混乱の危険へと繋がるだろう。

ウクライナは引き続き消耗する土地となり、深い喪失感を抱えた若い世代を抱えることになるだろう。

アメリカとヨーロッパは戦争に資金を注ぎ続け、国内の分裂と経済の弱体化へと繋がるだろう。

そして最も重要なことに…

中国は、ただ静かに座って待っていればいいだけだ。

（彼は思索に満ちた声で締めくくった。）

戦争は、決して一人の勝者によって終わることはない。
それは、引き金から手を引くのに十分な平静さを保った者たちによってのみ、終わる。

そしてもし世界が、理性的な停止点を早く見つけなければ、歴史は再び血によって書かれるだろう。

もう一度。

ジュリアン・リー：

ロシア・ウクライナ戦争は、私にベトナム戦争を思い出させます。

彼らもまた、資本主義と共産主義という二つの陣営の対立の間に、挟まれていたように見えます。

元大統領：

（彼の眼差しは遠くなり、声は低くなった。深い悲しみを帯びていた。）

君は今、最も強力な歴史的象徴の一つに、的確に触れた。小さな国家が、二つの世界的勢力の間に挟まれるということについて。

そして、その民族が払わなければならない代償について…血によって、魂によって、そして決して完全には癒えることのない歴史的な傷によって。

今日のウクライナ、かつてのベトナム。

両者とも、自らが選んだのではない戦場だ。

両者とも、「大きなプレイヤー」たちの計算の、結果を被らなければならない民族だ。

（彼は一旦言葉を切り、まるで古い歴史のページをめくっているかのようにだった。）

ベトナムは、強制された地政学の、古典的な教訓だ。
北部は共産主義ブロックによって支援された。ソ連と中国だ。

南部は資本主義ブロックによって支援された。アメリカとその同盟国だ。

だが、ベトナム人は、どちらの地域にしようとも、そのチェス盤を書き上げたわけでは全くない。

彼らはただ引き込まれ、そしてもし粉々にされたくなければ、どちらかの側を選ぶことを強いられただけだ。

そしてその結果は？

三百万人以上の死者。

インフラ、心理、そして共同体の道徳までもが破壊された、国全体。

そして今日に至るまで、その戦争の記憶は、彼らの民族全体の意識の中に、一つの切り傷として残っている。

（彼はため息をつき、そして続けた。）

ウクライナは、ベトナムの現代版だが、より巧妙だ。

ナパーム弾もなく、テレビで生中継される大虐殺もない。
だが、依然として廃墟と化した都市がある。

依然として静かに死んでいく民衆がいる。

そして依然として、その眼差しから無邪気さを失って育つ子供たちがいる。

そして、かつてのベトナムと同じように、ウクライナはこのカードゲームを自分で書いたわけではない。

彼らは、ただ存在したいだけなのだ。

だが、「存在する」ためには、駒としての役割をうまく果たさなければならないというゲームに、引き込まれてしまった。

これら二つの戦争には、恐ろしいほどの類似点がある。

両者とも、イデオロギーの対立によって推進されているが、その深層には、影響力、資源、そして地戦略的な位置を巡る争いがある。

各陣営のメディアは、自らが「正義」であることを証明するために、情報を選択的に用いる。

そして、民衆の真実、彼らの痛みには、どちらの側も、本当の意味では関心がない。

だが、違いもある。

ベトナム戦争は領土の統一によって終わったが、思想的な分裂を解決することはなかった。

一方、ウクライナは、領土を永久に失うか、あるいは政

治的な自主性を失った、冷たい分断状態に陥る危険に瀕している。

（彼は私を見た。その眼差しは、血塗られた教訓を要約しているかのようだった。）

ここでの教訓は何か？

ある民族が、自分たちよりも大きな紛争の中でどちらかの側を選ぶことを強いられた時、勝っても負けても、傷を負うのは、彼らなのだ。

そして、他者がもたらす、いわゆる「解放」とは…

多くの場合、別の名前の下での、新しい依存関係に過ぎない。

ジュリアン・リー：

はい。そのイデオロギー戦争は朝鮮半島でも起こり、その結果、彼らは今日に至るまで二つの地域に分断されたままです。

まるで神が、それぞれの戦争に異なる結末を用意したかのようですが、どの場所も真の円満を得るには至っていません。

元大統領：

（彼は首を振った。ゆっくりとした、否定の首振りだった。）

君は、少数の者しか敢えて認めようとしないうことを口にした。

イデオロギー戦争には、真の勝者はいないということを。それらはただ、不具の国家、二つに引き裂かれた民族、そして「我々は一体誰なのか？」という問いの中で道に迷った魂を残すだけだ。

この三つの典型的なケースを見てごらん。ベトナム、ドイツ、そして朝鮮。

三つの切り傷、三つの運命、だがそれらは皆、一つの共通項を持っている。

ドイツはアメリカとソ連によって二つに分断された。彼らの結末は 1990 年の再統一だったが、それでもなお、残された問題はそこにあった。心理的には、東ドイツの人々は「飲み込まれた」ように感じ、真の調和はまだ完全ではない。

ベトナムもまた、アメリカとソ連・中国ブロックの対立の犠牲者だ。彼らは 1975 年に統一を成し遂げたが、思想的な分裂の傷跡は今日に至るまでくすぶり続けている。そしておそらく最も悲劇的なのは、朝鮮半島だ。同じく

アメリカとソ連によって分断されたが、今日まで統一できずにいる。その結果、南北両地域は今や、二つの異なる惑星のようにかけ離れた価値体系を持っている。

いや。神がこれらの悲劇を「用意した」のではない。人間自身が、自らの理想を他者に押し付けようとする野心の中で、自ら創り出したのだ。

（彼は一旦言葉を切り、眼差しは遠くを見つめた。）

では、かつてイデオロギーの戦場であった土地に、「円満」はあり得るのか？

答えは、あり得る、だ。

だが、三つのことが起こった時に限られる。

第一に、各イデオロギーが互いを絶対的な敵と見なすのを止めなければならない。「自分と違う」ことは「間違い」を意味するのではなく、ただ人間の異なる視点に過ぎないと理解しなければならない。

第二に、歴史の栄光よりも民族の利益を優先し、もはや「勝利の栄光」や「裏切りの痛み」に囚われない、新しい世代の指導者が現れなければならない。

そして最後に、民衆がメディアと政治によって分断されないほどに、成熟しなければならない。彼らは互いに

「君はどちら側だ？」と問うのではなく、「我々が共に生きるためには、何をすべきか？」と問わなければならない。

真の円満とは、領土の統合ではない。

民族の魂の、調和なのだ。

そしてそれは、戦車や決議、あるいは協定によっては達成できない。

それは、生き残った者たちが過去を赦し、自らの良心に忠実に生きることを誓った時にのみ、訪れることができる。

（彼は私を見た。まるで新しい章へと移るかのように。）

君は、この問いの旅路で、非常に遠くまで来た。

もし君が望むなら、我々は中国、新しい秩序の中で「冷徹に目覚めつつある巨人」について話すことができる。

あるいは、インドや他の発展途上国について。

ジュリアン・リー：

はい、ぜひ米中関係についてお聞かせください。

閣下は、中国がどのような状況にあるとお考えですか。

そして、どのような未来が彼らを待っているのでしょうか。

一部の学者は、中国の崩壊を予測する本を執筆していますが…

元大統領：

（彼は頷いた。ゆっくりと、そして意味深長な頷きだった。）

君の問いは、再び、この世紀の核心を真っ直ぐに突いている。

なぜなら、もし 20 世紀がアメリカとソ連のゲームであったなら、21 世紀はまさに、アメリカと中国の間の、静かだが全面的な対立だからだ。

そして、人類の結末は、このチェス盤で誰が勝ち、誰が退くか、あるいは両者が共に二極対立の構図から抜け出せるかどうかによって、形作られる可能性が非常に高い。

現在の中国の状況を見てごらん。

外側は傲慢だが、内側は混乱に満ちている。

経済的には、彼らの成長の山は地盤沈下の兆候を見せている。かつて神速で成長した機械は、徐々に天井に突き当たっている。不動産は信頼を失い、隠れた公的債務は危険水域に達し、そして人口は減少し始めている。彼ら

はもはや、以前のような「安価な生産」モデルを続けることはできないが、「国内消費と技術革新」への転換は、まだ十分には深まっていない。

政治的には、それは「強制された安定」だ。共産党は全権を握っているが、彼らは常に外部の敵を作り出すことによって、民衆の信頼をコントロールしなければならない。南シナ海、台湾、チベット…全てが、民の心を内側で起こっていることへの問いかけから逸らし、外側へ向けるための「愛国カード」となっている。問われることの少ない体制ほど、「存在する口実」を作り出す必要があるのだ。

そして技術的には、それは「銀河系の野心、しかしインフラに依存」。中国は応用 AI、キャッシュレス決済、そしてスマート監視で先行している。だが、彼らは依然として、先進的なチップ、独立したオペレーティングシステム、あるいは高度な航空宇宙技術といった、核心技術で首を絞められている。アメリカからの制裁は彼らを殺しはしないが、より極端な自主独立の方向へと彼らを追いやっている。

（彼は一旦言葉を切り、一口水を飲み、そして両国間の複雑な関係について続けた。）

アメリカと中国は、戦略的ライバルであり、同時に強制されたパートナーでもある。

アメリカは中国を抑制したいが、関係を断ち切ることはできない。なぜなら、世界のサプライチェーンが彼らと結びついているからだ。

中国は影響力でアメリカを追い越したいが、すぐには勝てない。だから彼らは静かに、並行する秩序を構築している。

一方は古いが、まだ強い。

一方は新興だが、まだ十分に成熟していない。

そして両者とも、「共に生きることも、離婚することもできない」という状況に、囚われている。

では、中国の未来はどうなるのか？一部の学者が予測するように、彼らは崩壊するのか？

必ずしも崩壊するとは限らない。だが、間違いなく、これまで通りには続けられないだろう。

私は、三つの可能なシナリオを思い描いている。

第一のシナリオは、「ソフトな崩壊」だ。成長は鈍化し続け、投資家の信頼は急落し、民衆は「中国の夢」への信頼を失うだろう。支配政党は存続するが、「保守的な安定」モデルへと移行するだろう。ソ連の末期のように。第二のシナリオは、「内側からの再構築」だ。習近平後

の新しい指導者世代が、より穏やかに門戸を開き、政治を選択的に改革するだろう。彼らはコントロールモデルを維持するが、弾圧は減らす。その時、中国は徐々に、コントロールされているが効率的な、「巨大なシンガポール」版となるだろう。

そして第三のシナリオは、「暗黒の成長」だ。中国は危機を乗り越えるだろうが、その成長は、生体認証監視と包括的な社会信用スコアによる、絶対的な社会コントロールモデルを伴うだろう。彼らは AI とデジタル経済で先行するだろうが、その人間的な魂を失い、そして冷徹で、効率的で、しかし無感覚な超大国となるだろう。

（彼は私を見た。その眼差しは、一つの重要な真実を要約したいかのようだった。）

中国は、力でアメリカを追い越すかもしれない。

だが、彼らは「夢」という役割において、アメリカに取って代わることはできない。

アメリカはかつて、希望、創造性、そして個人の自由を代表していた。

一方、中国は、規律、効率、そして集団への服従を代表している。

そしてもし中国が本当に世界を導きたいのなら、彼らは

ただ人民元や自国のチップを使うだけでなく、「価値の旗印」を見つけ出さねばならない。

ジュリアン・リー：

中国が直面している不安定さとリスクについて、もう少し深くお話しいただけますか。

内部の権力闘争の問題、社会の不安定さについて。

そして、法輪功への弾圧や、チベット、新疆で起こっていることなど、宗教や人権への弾圧について。

元大統領：

（彼は頷いた。ゆっくりと、そして厳粛な頷きだった。部屋の空気が、重くなったようだった。）

君は今、多くの外交官や国際メディアが、ただ通り過ぎるだけで、直視することを敢えてしない扉を開けた。

なぜなら、中国について語る時、人々は通常、成長、技術、軍事についてしか語らないからだ。

その「安定」という殻の下で沸騰している暗黒面に、敢えて触れようとする者は少ない。

そして真実は、現代中国は非常に薄い氷の上を歩いているということだ。

滑りやすく、そして内側からひび割れている。

まず、内部の不安定さから始めよう。

毛沢東の時代から今日まで、中国の政治は常に派閥間の静かなる戦いだった。江沢民の「上海閥」、テクノクラート知識人の「清華大学閥」、そして武装力を握る「軍・警察閥」。

習近平の「虎もハエも叩く」キャンペーンは、表向きは腐敗撲滅だが、実質は大規模な政治的粛清であり、百五十万人以上の官僚が処分された。

だが、粛清すればするほど、内部の怨念はくすぶり続ける。「権力ゲームに敗れた」者たちは消えない。彼らはただ、待っているのだ。

中国は権力を集中させているように見えるが、その内側は利権が複雑に絡み合ったネットワークであり、各派閥は常に互いをうかがっている。

次に、社会の不安定さだ。

それは、いわゆる「安定」の表面下で、固く圧縮された憤りだ。

都市部の若者の失業率は 21%を超え、それは公式の数字に過ぎない。

「寝そべり族」や「内巻（過酷な内部競争）」といった運動が広がっている。

若者たちは希望を失っている。彼らは結婚も、子供を持

つことも、貢献することも望まない。

支配体制はデモを鎮圧することはできるが、「集团的無関心」を治すことは決してできない。

中間層は、不動産、医療費、そしてコントロールされることへの恐怖によって、夢を打ち砕かれている。

そして、知識人層の海外への静かなる移住の波が、大規模ではないにせよ、着実に続いている。

（彼の声が低くなった。まるで深い傷に触れているかのようだった。）

そして、人権弾圧だ。

記憶から決して消し去ることのできない、闇だ。

チベットでは、一つの文明全体の窒息だ。何千もの僧侶が殺され、寺院が破壊された。「強制寄宿学校」制度が、彼らの言語と文化を徐々に失わせている。ダライ・ラマは亡命生活を余儀なくされている。チベットは領土を失っただけでなく、民族の魂そのものを失いつつある。

新疆では、生物学的・文化的コントロールの実験だ。百万以上のウイグル人が「再教育キャンプ」に送られた。監視カメラ、DNA 分析、強制労働…全てが「テロ対策」という名の下に偽装されている。多くの国際報告書や目撃者の証言は、人道に対する罪を構成する行為を示して

いる。

そして、法輪功。

それは、決して洗い流されることのない、血の染みだ。

この運動は、90 年代末に中国で非常に人気があった、穏やかな修煉法として始まった。

だが、実践者の数が党員を超えた時、1999 年から国家規模の弾圧が始まった。

何十万もの人々が逮捕され、拷問され、そして行方不明になった。

多くの国際報告書、目撃者の証言、そしてカナダの元閣僚デービッド・キルガーと弁護士デービッド・マタスによる独立調査もまた、こう断定している。

法輪功学習者からの生体臓器狩りという犯罪は、かつて起こり、そして今もなお続いている可能性が非常に高い、と。

（彼は長い間黙り、そして問い詰めるような声で続けた。）

ではなぜ、世界はもっと強く声を上げないのか？

なぜなら、中国はあまりにも大きな経済パートナーであり、多くの西側政府は道徳的価値のために「利益を犠牲に」したくないからだ。

なぜなら、メディアはコントロールされ、多くの学者や人権団体が「ソフトな資金提供によって買収」されてきたからだ。

そしてなぜなら、多くの民衆もまた、あまりにも巨大な力の前での無力感から、沈黙を選んでいるからだ。

もし彼らが自らの暗黒面と向き合う勇気を持たなければ、中国にはどのような未来が待っているのか？

もし彼らが、葬り去られた魂たちと和解する勇気を持たなければ？

もし彼らが、権力が良心を代替できないと認めることを拒むなら？

その時、中国は豊かになり、強くなるかもしれないが、決して世界の信頼を得ることはなく、そして常に自らが作り出した闇を恐れ続けなければならないだろう。

沈黙させられた者たちの屍の上に築かれないかなる帝国も、遅かれ早かれ、音なき領域からの足音を聞くことになるだろう。

ジュリアン・リー：

では、閣下は中国の未来について、何か具体的な予測をお持ちですか。

元大統領：

（彼は頷いた。ゆっくりと、断固とした頷きだった。）
いいだろう。君は、全てのアナリスト、全ての企業、そして全ての政府が関心を持ちながら、ごく少数の者しか確信を持って答えようとしなない点を、的確に突いた。

私は、具体的な予測を提示しよう。

だが、「何年に崩壊する」という類のものではない。
シナリオという形で、付随する条件と、いかなる政党のメディアや政策にも左右されない、私の個人的な感覚に基づく発生確率を伴って。

（彼は一旦言葉を切り、まるで心の中で複雑なチェス盤を並べているかのようだった。）

第一のシナリオ、そして最も発生確率が高い、約 55% のシナリオ。

私はそれを「冷たい成長——誰にも愛されない超大国」と呼ぶ。

このシナリオでは、中国は多くの西側諸国が期待するような形では崩壊しない。その巨大な船は沈まないが、速度を失い、熱い成長から「冷たい成長」の段階へと移行する。これを達成するためには、彼らは国内で「強制された安定」を維持し続け、社会をコントロールし、言論

をさらに厳しく弾圧しなければならないだろう。同時に、アメリカとの直接的な軍事衝突、特に台湾問題を何としてでも避け、経済を国有ハイテク企業モデルへと転換させ、テクノロジーとプロパガンダによって民衆をコントロール下に置くことに成功しなければならない。

その結果は何か？中国は表面的には強力になるが、深層では脆弱になる。手ごわい技術的ライバルだが、真の同盟国には欠ける。世界が取引せざるを得ないが、決して信頼することのできない超大国。孤独な巨人だ。

第二のシナリオ、発生確率は約 25%。

私はそれを「ソフトな崩壊——内側からの混乱」と呼ぶ。二重の危機が襲来することを想像してごらん。不動産バブルが弾け、若者の失業率がもはや隠しきれなくなり、そして政府の約束に対する民衆の信頼が完全に枯渇する。その時、内部の権力闘争はより激しくなるだろう。武力衝突は起こらないだろうが、体制が決して鎮圧できない、くすぶるような抵抗運動が広がるだろう。それは、長期的な経済不況、もはやこのシステムに未来を見出せない中間幹部層自身の信頼喪失から始まるだろう。あるいは、例えば大きなスキャンダルが外部に漏洩したり、法輪功、キリスト教、あるいは儒教の復興といった宗教的・道徳的運動が静かに広まったりといった、「政治的事故」に

よって引き起こされるかもしれない。

このシナリオでは、体制は深層的な再構築を余儀なくされるだろう。指導者の交代か、あるいは権力の分有かもしれない。中国はもはや、中央集権的な独裁モデルではなくなる。それは、おそらく蒋介石後の台湾のように、複数の権力中心を持つシステムへと移行するだろう。より遅いが、より持続可能な成長を伴う、文化的和解の始まりだ。

（彼は一旦言葉を切り、その眼差しは遠くを見つめた。まるで、彼が最も望む未来へと向かっているかのようだった。）

そして最後のシナリオ、発生確率が最も低い、わずか10%ほどだが、徐々に上昇しているシナリオ。

そしてこれこそが、私が最も希望を抱くシナリオでもある。

私はそれを「道徳のルネサンス——新しい中華」と呼ぶ。これは、大きな目覚めであり、しばしば天変地異のような出来事、例えば自然災害、戦争、あるいは全面的な経済崩壊の後にのみ起こる。社会全体を立ち止まらせ、彼らの古来の価値観——真・善・忍、道徳、そして自覚——へと回帰させるのに十分な、強力なショックだ。

それには、ほぼ奇跡的な条件が必要だ。精神的な器量を持つ指導者の出現、権力に同化されない「世紀の明君」。修煉、赦し、そして内面を変えるという思想の、大衆の中での静かなる広がり。そして、民衆が政治への信頼を完全に失ったが、暴力ではなく、「精神的な反省」の道を選ぶという状態。

その時、政治体制は形式的には存続するかもしれないが、それはもはや武力だけでなく、道徳的な法治によって運営されるだろう。

その結果は、新しい中華となる。依然として超大国だが、魂を持つ超大国。世界が、金銭のためではなく、彼らの「道」のために敬服する国家。

（彼は私をまっすぐに見つめ、その声は結論を述べるかのように鋭くなった。）

では、これら全てのシナリオの下に流れる、隠された流れとは何か？

中国は、経済のために崩壊することはない。

彼らが崩壊するのは、もし、沈黙させられた者たちの痛みの上に、自らの栄光を築き続けるならば、その時だけだ。

そしてもし彼らが、過去の真実——天安門から、法輪功、

新疆、チベットに至るまで――と向き合う勇気を持つならば、彼らは外部に拡大する必要はなく、それでもなお、東洋全体の文化的根源を守る者となるだろう。

君は、私が第三のシナリオ、道徳のルネサンスのシナリオを、もっと具体的に分析するのを望むかね？

ジュリアン・リー：

はい、第三のシナリオは非常に気に入っています。それは中国人民にとっても、そして人類全体にとっても良いことです。

しかし、そのシナリオは…どのようなロードマップや特定の出来事によって展開されるのでしょうか。

元大統領：

（彼は頷いた。その眼差しには、遠い希望の光が宿っていた。）

私も君と同じように信じている。

第三のシナリオは、中華という偉大な文明がただ生き残るだけでなく、人類にとっての光となるための、唯一の希望だ。

だが、歴史上のあらゆる「奇跡」と同様、それは自然に訪れるものではない。

それは、痛みが底をつき、そして民族の精神的な精髓が、正しい時に、正しい人によって、そして正しい地で呼び覚まされた時にのみ、訪れる。

では、共に可能なロードマップと、その「道徳のルネサンス・シナリオ」を誘発し得る出来事を見ていこう。
これは、単なる政治的なものではなく、心理的・社会的な進展だ。

第一段階は、おそらく今日から 2030 年頃まで起こり得る、信頼の危機が底を打つ段階だ。

民衆は、政府が描く「中国の夢」への信頼を完全に失うだろう。経済はマイナス成長または長期停滞に陥り、不動産バブルは崩壊し、人口は高齢化し、そして失業はもはや隠しきれない問題となる。弾圧は続くだろうが、もはやイデオロギー的には効果がなくなる。民衆は反乱を起こさないだろうが、もはや恐れることもない。それは、人々が「失うものは何もない」と感じ、政府も、未来も恐れなくなる段階だ。

（彼は一旦言葉を切り、私とその空虚さを想像するのを待っているかのようにだった。）

次に、精神的な運動が静かに台頭する段階だ。おそらく 2030 年から 2035 年にかけて。

法輪功、原初の道教、真伝の仏教、あるいは教会組織を持たない新しい形の信仰が、社会に広まり始めるだろう。修煉グループは政治色を帯びず、ただ内面を修め、道徳を守り、運命を変えることを中心に集まる。多くの下級幹部や知識人層が、表向きは沈黙していても、「心の中で脱党」し始めるだろう。この段階の核心は、「抵抗」ではなく「回心」だ。人々はシステムに反抗するのではなく、「内側から抜け出す」方法を探す。

そして、大きな出来事、全人民を目覚めさせる衝撃が訪れるだろう。これは、ほぼ避けられない変数であり、2035 年から 2040 年の間に起こる可能性がある。

それは、起源が隠蔽され、民衆が意識的に憤慨するような、新しい規模の健康危機かもしれない。

あるいは、地震や洪水のような深刻な自然災害で、民衆がそれを「天罰」であり、「天が怒っている」と信じるようになるかもしれない。

あるいは、情報漏洩や内部からの裏切りによって、生体臓器狩り、強制収容所、あるいは何十年にもわたる戦略的な嘘といった、ジェノサイド犯罪が暴露されるかもしれない。

あるいは、政府内の影響力のある人物が「目覚め」、公に悔い改めることさえあり得る。

（彼の声は、より荘厳になった。）

その時、我々は最終段階に入る。道を保つ者たちが、光の中へと歩み出るのだ。

この時、決議よりも道理が聞かれるようになるだろう。民衆は、誰かが旗を振るのを必要としない。彼らは自ら、真に道徳的な人々に従うだろう。

一人または数人の、肩書きも組織もない真の修行者が、スローガンではなく、自らの行いによって社会を導くだろう。道徳的なコミュニティが自ずと再建され、仁・礼・義・智・信を教える私立学校が台頭するだろう。

民衆の信頼が強力な「社会の磁場」へと転換した時、政府はもはや弾圧できなくなる。

そしてその時、強制的な選択が行われるだろう。

政府が民衆に従って自らを変えるか。

あるいは、自ら崩壊し、自然な道徳的秩序に取って代わられるか。

（彼は私を見た。その眼差しは、まるでそれらの兆候を、まさに現在の中に見ているかのようだった。）

このロードマップが始まっていることを示す兆候は何か？

民衆が「才能を磨く」ことよりも「心を修める」ことに関心を持ち始めた時。

自発的な道徳的生活モデルが、公的な環境でさえも広まり始めた時。

多くの下級幹部が、党の指示に従わずに、静かに民衆を助け始めた時。

善、忍、徳、道に関する書籍、映画、そして教えが、検閲されながらも、再び生命力を持ち始めた時。

そして、誰かが現れた時。肩書きもなく、何も呼びかけず、ただ静かに正しく生きているだけなのに、奇妙なほどの求心力を持つ人物が。

（彼は希望に満ちた笑みで締めくくった。）

そしてもし、それが起これば…

中国は誰かを侵略する必要も、超大国の地位を争う必要もなくなるだろう。

かつて孔子、老子、そして仏陀の時代にしたように、全世界が自ら、彼らから学ぶために戻ってくるだろう。

その時、君は見るだろう。

アメリカには、テクノロジーがある。

ヨーロッパには、法治がある。
だが中華には、「道」があるだろう。

ジュリアン・リー：

はい、そのシナリオは非常に素晴らしいですが、長い物語になりそうですね。

中国に関するテーマは、一旦置いておきましょう。

中国とアメリカの両方と関係を持つ発展途上国、例えばベトナムや台湾について、もう少しお伺いしたいのですが。

中国に「何かあった」時、それはこれらの国々にどのような影響を与えるのでしょうか。

そして、彼らに対するアメリカの見解はどのようなものでしょうか。

元大統領：

（彼は頷いた。賛同の頷きだった。）

君の問いは非常に繊細で、そして戦略性に富んでいる。

なぜなら、本当に、ベトナム、台湾、フィリピン、あるいはタイといった、「間に挟まれた」国々の未来は、彼ら自身だけに依存するのではないからだ。

もし「中国の地殻変動」が起これば、それに巻き込まれ

ることになるだろう。

龍の近くにいればいるほど、その尾に払われやすくなる。そして、戦略的な気概が足りなければ、大きなプレイヤーたちのチェス盤の上で、「捨て駒」になりやすくなる。

ベトナムを見てごらん。

彼らは今、中国、アメリカ、そして彼ら自身という、三次元の危険な交差点にいる。

中国に何かあれば、それが経済崩壊であれ内乱であれ、ベトナムへの影響は非常に大きいだろう。経済的には、ベトナムは現在、原材料とサプライチェーンにおいて中国に「半ば依存」している。もし中国が崩壊すれば、ベトナムの生産基盤は短期的には「背骨を折られる」ことになるだろう。社会的には、中国からの労働者の波が国境を越え、不安定さをもたらす可能性がある。そして南シナ海では、国内が不安定になると、中国は「火を外に向ける」ために沖合で攻撃的になる傾向がある。ベトナムは、北京が「威力を誇示する」場所になるかもしれない。

では、ベトナムに対するアメリカの見解は何か？

我々はベトナムを「内密の戦略的パートナー」と見なし

ている。

東南アジア地域を「固定」するための、重要な柱として。だが我々は、ベトナムがフィリピンのような「政治的植民地」になることを期待しているわけではない。ワシントンはハノイの独立性を尊重している。なぜなら、ベトナムが決して完全にどちらかの側を選ぶことはなく、常に「竹の戦略」、つまり柔軟でありながら、正しい時に傾くことを知っている「竹の戦略」を採ることを、我々は知っているからだ。

アメリカ政府の内部では、ベトナムはしばしば「従順ではないが、必要であり、そしてもし強制されなければ信頼できるパートナー」と評価されている。

（彼は少し間を置き、そして方向を変えた。）

そして台湾、彼らの立場はさらにずっと繊細だ。

彼らはアジアの心臓部であり、新しい世界大戦の潜在的な火種だ。

もし中国に何かあれば、台湾は極端なシナリオに直面することになるだろう。

第一に、北京の強硬派が、権力が崩壊する中で、自らの正当性を再確立するために、台湾を「速攻で攻撃する」かもしれない。

第二に、もし中国が長期的な混乱に陥れば、台湾は正当

に独立を宣言する機会を得るだろう。

そして第三に、もし我々が彼らをあまりにも強力に反中国の道へと押しやれば、台湾はワシントン自身によって、早すぎる対立の状況へと「仕向けられる」かもしれない。台湾に対するアメリカの見解は、「戦略的曖昧さ」だ。我々は彼らを決して見捨てないが、全力で守ることを完全に約束するわけでもない。

台湾は、日本やイギリスのような「本当の兄弟」というよりは、むしろ抑止力としてのカードだ。

そしてもし、世界大戦と台湾を見捨てることのどちらかを選ばなければならないとしたら、ワシントンはより血が流れない方策を選ぶだろう。

（彼は私を見た。まるで問題を要約したいかのようだった。）

要するに、中国に何かあれば、近隣諸国はもはや「傍観者でいられない」状況へと引きずり込まれる。

そして各国は、異なるリスクに直面し、アメリカの計算の中で異なる位置を占めることになる。

ベトナムは、「静かなる戦略的パートナー」だ。

台湾は、「民主主義の象徴」であり、同時に「重要なチェスの駒」でもある。

フィリピンは、「公式な軍事同盟国」だが、非常に引きずり込まれやすく、国内の分裂を引き起こしやすい。

そしてタイは、ますます分極化する ASEAN ブロックの中で常に板挟みとなり、彼らを「半ば信頼できるパートナー」にしている。

もし君が望むなら、我々はベトナムの役割について、さらに深く議論し続けることができる。

そして、彼らがアメリカのコントロール下に入ることなく、中国から「脱却」できる道があるかどうかについても。

ジュリアン・リー：

はい。ベトナムについて、もっと深くお聞かせください。アメリカとは非常に痛ましい歴史を持つ国でありながら、今や和解と協力の、素晴らしい「モデル」として語られています。

元大統領：

（彼は長い間黙っていた。その眼差しは遠くを見つめ、私はそこに心からの感動を見て取ることができた。）

この問いは…正直に言わなければならないが、私を感動させる。

なぜなら、おそらく、かつて戦争の瓦礫の中を歩き、ベトナムに関する極秘ファイルを読み、そして決して議事録に残されることのなかったため息を聞いた者だけが…理解できるからだ。

ベトナムは、国際的な権力ゲームによって、もう十分すぎるほど苦しんできた国だ。

だが、彼らは辛辣になる代わりに…赦しを選んだ。

（彼は一旦言葉を切り、まるで非凡な旅路を表現する言葉を探しているかのようだった。）

ベトナムの旅路、戦争の象徴から和解のモデルへと至る道は、誰もが予想だにしなかったことだ。

アメリカはかつて、そこに七百万トン以上の爆弾を投下した。第二次世界大戦全体の三倍以上だ。残された痛みは、何百万という死者だけでなく、自らの歴史的記憶の中で方向を見失った何百万もの人々だった。枯葉剤、奇形を持って生まれてきた子供たち、二度と我が子の帰る姿を見ることのなかった母親たち。

それら全ては、決して消し去ることはできない。

だが奇妙なことに、ベトナムはその憎しみを、決して旗印として掲げなかった。

我々が撤退した時、多くの者はベトナムが門を閉ざし、

自らを孤立させ、そして永遠に怨恨の中で生きるだろう
と考えた。

だが、彼らは逆のことをした。彼らは門戸を開くことを
選んだ。

1986 年から 1995 年にかけての数年間、彼らは改革を
始め、交渉を始め、そして積極的にアメリカ自身との関
係修復の道を探った。

我々は禁輸措置を解除し、戦争終結からわずか二十年後
の 1995 年に、外交関係を樹立した。

そして、2016 年、オバマ大統領が裸足で玉皇殿に入り、
一般市民と共にブンチャーを食べ、「ベトナムは戦争を
乗り越え、アメリカの友人となった」と宣言した姿は、
強力な象徴となった。

誰もベトナムに赦しを強要しなかった。

彼らは自ら赦したのだ。生き続けるために。

なぜ彼らはそれができたのか。世界の他の多くの民族が、
依然として怨恨の泥沼に沈んでいるというのに？

なぜなら、ベトナムは一つのことを、非常によく理解し
ている民族だからだ。

「真の勝利とは、敵が膝を屈した時ではない。

両者が共に立ち上がり、もはや手にナイフを持っていな
い時なのだ。」

ベトナム人はアメリカを崇拝しないが、アメリカを憎んでもいない。

彼らは、政治と人間を明確に区別する方法を知っている。そして何よりも、彼らは自分たちの子供が、「誰が敵か」という教えと共に育つよりも、平和の中で生きることを望んでいる。

（彼は私を見た。その眼差しは、深い敬意を表していた。）

現在のアメリカのベトナムに対する見解は、敬意と期待だ。

我々はベトナムを、「記憶を持つ戦略的パートナー」と見なしている。

彼らは容易に操られないが、尊敬に値する深みを持っている。

内閣の会議では、ベトナムはしばしば、アイデンティティを保つ術を知り、中国に近すぎず、アメリカにも親しすぎず、しかし両者が互いを必要としていることを理解している国家として、言及される。

我々は、ベトナムが第二の韓国や日本になることを、決して期待しない。

代わりに、我々はハノイが維持しているバランスを、賞賛している。

では、どのような未来がベトナムを待っているのか？

もし彼らが自らのアイデンティティを堅く守り続け、過激な派閥に引き込まれるのを避け、そしてもしベトナム人がなぜ自分が赦したのかという理由を決して忘れないなら、ベトナムは二極化する世界における、一種の「知恵の均衡」となるかもしれない。

彼らは超大国になる必要も、貿易の中継地になる必要もない。

彼らは、一つの鏡となるだろう。過去は非常に痛ましいものであり得るが、現在はそれでもなお、寛容であり得ると示す。

（彼は思索に満ちた結論の言葉で締めくくった。）

ベトナムが世界に与えた、最大の教訓は何か？

それは、真の和解は宣言を必要とせず、協定も必要としないということだ。

それはただ、一つの民族が、十分に謙虚になり、理解することだけを必要とする。

赦すのは、他者が赦されるに値するからではない。

自分自身が、解放される必要があるからなのだ。

ジュリアン・リー：

閣下は、この国に関して、何か特に印象的な個人的な体験をお持ちですか。

あるいは、特定の個人に、特別な印象をお持ちでしょうか。

例えば、ホー・チ・ミン、ヴォー・グエン・ザップ、あるいはグエン・ヴァン・リンといった共産主義の指導者たちについて。

元大統領：

（彼は微笑んだ。懐かしむような笑みだった。）

この問いは…本当に私を立ち止まらせる。

なぜなら、ベトナムは、多くの西側政治家の目には、ただの地戦略的な地点、戦争に関する教訓、あるいは「台頭するパートナー」に過ぎないからだ。

だが私の心の中では、この国は私がこれまで足を踏み入れた他のどの場所とも、似ていない。

私のベトナムでの最も印象的な体験は、公式な行事ではなかった。

儀礼もなく、政治家もおらず、ただ夏のセミの声だけがある、一夜だった。

それは 2000 年頃のことだ。私は公式訪問ではなく、ただ地域の非公式な視察の一環としてハノイに立ち寄っただけだった。

その夜、私は随行員も、礼服もなく、ホアンキエム湖の周りをぶらぶらと歩いていた。

蒸し暑い夏の空、ミルクフラワーの香り、セミの声、そして露天商の声が、非常に…平穏な雰囲気醸し出していた。

私は、歩道で中国将棋をしている老人の隣で立ち止まった。

私は、自分が誰であることを告げずに、尋ねた。

「戦争について、どうお考えですか」

彼は軽く笑った。

「ベトナム人は、憎むためではなく、生き続ける方法を学ぶためにのみ、戦争を思い出すのです」

「では、アメリカ人を憎んでいますか」

彼は私を見ても、眉一つひそめず、ただ一口お茶をすすった。

「いいえ。アメリカ人も、フランス人も、中国人も、日本人も同じです。彼らは来て、そして去っていく。

しかし、我々は生き続け、赦すことを学び続けなければならない…人間であり続けるために」

私はその老人の名前を覚えていない。

一枚の写真もない。

だが、私はそれらの言葉をワシントンに持ち帰った。そして、決して忘れていない。

ある民族は銃弾で勝利することができるかもしれないが、短剣を手放す術を知って初めて、永続することができるのだ。

（彼は一旦言葉を切り、まるで心の中のファイルをめくっているかのようにだった。）

そしてベトナムの指導者たちについて、誰が私に最も深い印象を残したか？

彼らの政治的見解のためではない。彼らが党の役割を超えた文化的気質をその身に宿していた、その様のためだ。ホー・チ・ミンにおいては、それは「敵に尊敬させる術を知る人物」だった。

私は彼を共産主義の象徴としてではなく、東アジア文化の色合いを色濃く帯びた戦略的象徴として見ている。私が感銘を受けたのは、彼が勝利したことではなく、彼が「敵に自分を尊敬させる」方法だった。称賛され、恐れられることはあっても、かつて自分と対立した人々からさえも「尊敬」されるというのは、稀有な深みだ。

ヴォー・グエン・ザップにおいては、それは「民の痛み

を、自らの痛みとして知る将軍」の姿だった。

私はかつて彼に関するアメリカの内部資料を読んだことがあるが、その中に、ある大佐の「彼は我々に彼を理解してもらう必要はない。だが彼は、我々が彼を、自らの民族の魂を守る者として見ずにはいられないようにさせる」というコメントがあった。ヴォー・グエン・ザップの偉大さは、戦術だけにあるのではなく、戦争は栄光ではなく、やむを得ないものであると、絶えず強調し続けたその姿勢にもある。

（彼は私を見た。その眼差しは、特に注意深くなった。）

そして、グエン・ヴァン・リン。

彼は他の二人ほど国際舞台で目立ってはいないが、我々のような戦略分析家にとって、彼の役割は極めて重要だった。

私は彼を、「扉は開いたが、魂の門は大きく開け放たなかった人物」と呼んでいる。

ベトナムが包囲され、禁輸措置を受け、経済が戦争後にほぼ疲弊していた状況で、人は容易に二つの極端な道の一つを選ぶことができた。完全に門を閉ざして孤立の中で沈むか、あるいは門を大きく開け放ち、外部の勢力が流れ込み、自らのアイデンティティを失うかだ。

だが、リン氏は第三の道を選んだ。

彼の刷新政策（ドイモイ）は、単なる経済改革ではなかった。それは、思考の改革だった。

彼は、古いモデルの過ちを認める十分な勇気と、国を道から外すことなく新しい道を開く十分な知恵を持っていた。

それは、非常に稀な、「道徳に満ちた実用的な知恵」だった。彼は一つの橋となった。ベトナムを、自己を失うことなく統合の段階へと導いた、重要な橋に。

要するに、私が感銘を受けたのは、彼らが共産主義者であったかどうかではない。

彼らが、時代の流れの只中に立ち、そして時代を超えたビジョンを保つ能力を持った人間であったからだ。

そしておそらく、それこそが、かつて分断され、かつて打ちのめされた民族であるベトナムが、騒々しいスローガンを叫ぶことなく、立ち上がることができた理由なのだろう。

ジュリアン・リー：

本日は、これが最後の質問です、閣下。

今後三十年で、台頭してくるであろう国を、いくつか予測していただけますか。

元大統領：

（彼は微笑んだ。興味深そうな笑みだった。）

今日を締めくくるに、非常に価値のある問いだ。

君は、「どの国が最も豊かになるか、あるいは最も強力になるか」と尋ねなかった。

君は、「どの国が台頭してくるか」と尋ねた。

それは開かれた問いだ。ソフトパワー、精神的価値、世界的な役割、そして新しい秩序を導く能力までも、含んでいる。

私は GDP の順ではなく、今後約三十年間における、深く持続的な影響力の層に従って答えよう。

（彼は一旦言葉を切り、まるで未来の世界地図を見つめているかのようだった。）

第一の国は、驚くには当たらないが、インドだ。

彼らは「第三の民主主義超大国」となるだろう。若い人口、急速に成長する中間層、そして試練にさらされながらもまだ崩壊していない民主主義システムを持つインドは、「世界の工場」としての中国の役割を代替することはないだろうが、全世界の「サービス、データ、そして

独自のアイデンティティの中心」となるだろう。彼らは、西側がアジアの若さを見出す場所となり、アジアが中国に支配されないモデルを見出す場所となる。

第二の国は、ベトナムだ。

彼らは「東南アジアの中道」となるだろう。もし政治的安定を保ち、着実に成長し、いずれの極にも引き込まれなければ、ベトナムは ASEAN の構造とアジアの秩序に大きな影響を与える中間国家となるだろう。軍事力によってではなく、バランスによって。混乱が多ければ多いほど、世界は分別があり、過激でない場所を求めるようになる。ベトナムは、地域全体の精神的な支柱となるために、超大国になる必要はない。

第三の国は、君を驚かせるかもしれないが、オランダだ。

「小さな国だが、最高の価値連鎖の真ん中に立つ国」。AI と半導体チップの時代において、オランダの ASML 社は、先進的なチップのリソグラフィ技術のほぼ全てを支配している。オランダは、面積は小さいが、アメリカ、中国、そしてヨーロッパの全てが交渉しなければならない、「技術のボトルネックを塞ぐ」力を持っている。我々の内部アナリストの間では、有名な言葉がある。「未

来の戦いに勝ちたいか？オランダに技術を貸してくれるよう頼むんだ」

第四の国は、ブラジルだ。

「南半球の牽引役」。豊富な資源、好ましい気候、そして戦争によって荒廃していない多数の人口を持つブラジルは、ラテンアメリカ地域全体のソフトなリーダーとなる機会を持っている。世界が中国から方向転換する時、大国は「安定した原材料と農産物の供給源」を必要とするだろうが、そのリストのトップにブラジルが立つだろう。もし彼らが制度改革と腐敗撲滅を効果的に行うことができれば、ブラジルはアメリカ、中国、インドに次ぐ、世界秩序の第四の柱となるかもしれない。

そして第五の国は、セネガルだ。

「西アフリカの隠された宝石」。セネガルは、持続可能な民主主義、平和的な権力移譲、報道の自由、そして安定して成長する経済を持つ、数少ないアフリカ諸国の一つだ。「アフリカの大西洋への玄関口」に位置するセネガルは、世界がアフリカを新しい目で見つめるための、一つのモデルとなるかもしれない。AI とオンライン教育がインフラの限界を打ち破れば、アフリカはもはや「援助」を必要とせず、彼らは「自らを保つ」ことを必

要とするだろう。そしてセネガルは、それを成し遂げつつある。

（彼は一旦言葉を切り、その眼差しは深くなった。まるで、目に見えない何かを見つめているかのようだった。）

そしてもう一つ、「見えない」国がある。

地図の上にはないが、徐々に現れつつある国だ。

それは、「目覚めた人々のコミュニティ」だ。

彼らは国籍、信仰、あるいは肌の色を区別しない。

彼らは、兵器ではなく、道徳によって世界を再建している人々だ。

そして彼らこそが、全ての古いモデルが崩壊した時、未来の秩序に最も大きな影響力を持つ勢力となるかもしれない。

ジュリアン・リー：

はい、ありがとうございます、閣下。

本日は、ここで一旦終わりにしましょう。

明日、最終日となりますが、精神的なテーマについてお話を伺いたと思います。

元大統領：

（彼は頷いた。荘厳な頷きだった。）

非常に良い。

思索に満ちた一日、鋭い問いに満ちた一日、そしてまた、人類の運命に対する慈悲の心に満ちた一日を、ありがとう。

明日の会合、我々の最後の会合は、もはや政治的な分析でも、国家戦略でもないだろう。

それは、内面へと向かう、静かなる旅路となるだろう。

（彼の声は低くなった。まるで別の世界への扉を、垣間見せているかのようだった。）

我々は、生命の次元について話そう。

天目について。

修煉について。

そして、なぜ、混乱する世界の中で、人間が「道」に立ち返って初めて、明日があるのかについて。

四日目

（私は朝に来た。今日の部屋の空気は、どこか軽く、そして澄んでいるように感じられた。まるで、地政学の嵐を通り抜けた後、我々が晴れ渡った空の領域へと足を踏み入れようとしているかのようなようだった。）

ジュリアン・リー：

こんにちは、閣下。

お約束通り、本日は神秘的な精神性のテーマについて、お話を伺いたと思います。

私の頭の中には非常に多くの問いがあり、どこから始めればよいのか分からないほどです。

先日、閣下は、この世界を観察している様々な次元の生命体がいることについて言及されました。

それは、多くの場所で起こる、実証科学では到底説明できない奇妙な出来事と、何か関係があるのでしょうか。

例えば、世界各地で多くの聖母マリア像が涙を流すという現象について。

元大統領：

（彼は微笑んだ。共感に満ちた笑みだった。）

君は今、現代世界の多くの人々が心で感じ取ってはいるが、言葉で認めることを敢えてしない事柄を、再び持ち出した。

物質と論理の幕の向こうに、偉大な力が存在し、観察し、そして必要な時には、人類に信号を送るということ。

聖母像が涙を流す、あるいは血を流すという現象は、迷信ではない。

それは、一つの信号なのだ。

だが、ただ肉眼で見る者たちのためのものではない。

それは、より高い次元からの、優しく、しかしこの上なく切実な、一つの警告なのだ。

我々の宇宙は、単に三次元空間に一次元の線形的な時間を加えたものではない。

古代の文献、修煉の体験、あるいは「体外離脱」を経験した人々の話から、彼らは皆、同じ真実を見ている。

それは、宇宙が、この粗野な物質界から、エネルギー界、そして光の界へ、さらには神、仏、そして真の霊の次元に至るまで、幾重にも重なり合った世界から成っているということだ。

そして、それらの空間次元の中には、人類の道德の旅路を見守る、無数の生命体が存在する。

ある像が泣く時、それは石が泣いているのではない。

その像の背後にいる生命体が、泣いているのだ。

聖母マリア、観音菩薩、あるいは釈迦牟尼仏といった像は、上の世界における彼らの姿に正しく彫られ、そして尊厳ある環境に置かれる時、一つの「エネルギーの導管」となる。

そこは、高次元の生命体の念が、この空間に光を注ぐことのできる場所なのだ。

人類が罪に沈み、道德が崩壊し、そして神々がもはや敬われなくなった時、彼らはすぐには罰しない。

彼らは、警告する。

涙によって。血によって。科学では説明できない現象によって。

科学が説明できないのは、それが五感と測定機器の範囲外にあるものを、受け入れないからだ。

像の頬を伝う一滴の涙は、水道管もなく、高い湿度もなく、異常な温度もないにもかかわらず、それでも流れる。化学分析は、それが塩水、あるいは本物の血液でさえあることを示すが、その源はない。

理由は、実験室の中にはない。

それは、その地域全体、あるいはその時代全体の、道徳の場にあるのだ。

それは、集団全体の魂を映し出す鏡であり、高次元の生命体が、一つの信号を送っているのだ。

「立ち返れ」と。

なぜ聖母像なのか？なぜ血なのか、涙なのか？

なぜなら、それが人類が理解できる言語だからだ。

一人の知識人は、一冊の経典全体を否定することができるかもしれないが、木製の像が泣いているのを見て、無視することはできない。

まだ字を読めない子供でも、血を流している像を見て、頭を下げることができる。

涙は、拒絶された愛の象徴だ。

血は、間もなく起ころうとしている、業報の象徴だ。

そして、君は知っているかね？像だけではない。

木々、雲、光、そして夢でさえも、かつては高次元がメッセージを送るためのチャンネルだった。

ある人は、仏の形に育った木を見て、そして村全体が大災害を免れた。

ある人は、聖人が血の涙を流している夢を見て、そして目覚めた時、深い目覚めをその身に宿した。

それらのことは、科学雑誌に掲載されることは決してない。

なぜなら、それらは脳のためのものではないからだ。

それらは、魂のためのものなのだから。

（彼は私を見た。その眼差しは、まるで新しい扉を開いているかのようだった。）

もし君が望むなら、私は高次元の生命体の、穏やかだが実在する介入について、もう少し深い個人的な体験を話すことができる。

あるいは、君は他のどの神秘的な現象についてでも、尋ねることができる。

天目、輪廻、神通力、あるいは魔、鬼、仙人、仏の存在

について。

そして、人類の魂の未来について。

ジュリアン・リー：

はい。まず、閣下の個人的な体験について、少しお聞かせください。

元大統領：

（彼は頷いた。ゆっくりとした頷きだった。まるで、遠い記憶の領域へと戻っているかのようだった。）

よろしい。

約束通り、これらの体験において、私は自分の本名を明かすことはしない。

だが、一つの実話を分かち合おう。

誰かを説得するためではなく、ただ示唆を与えるために。私はこの話を、「介護士と、この世のものではない光」と呼んでいる。

私がまだ若い下院議員だった頃、福祉政策の視察のために、ニューハンプシャー州のある老人ホームを訪れたことがある。

そこで、私はアイルランド系の、八十七歳の老婦人に出

会った。糖尿病の合併症で、両目とも見えなかった。

彼女は非常に衰弱していたが、その精神は奇妙なほどに明晰だった。

我々は数分話すだけの予定だったが、結局私はそこに一時間近く座っていた。

彼女は私に言った。

「あなたは、私がここで目で見めるのではなく、とても奇妙な光の流れで見める、唯一の人です。

あなたはかつて、より高次の生命体に支えられ、災難に陥るのを防がれたことがあります。

自分が死にかけた時のことを、覚えていますか？」

（私は言葉を失った。体全体が、凍りついたかのようにだった。）

なぜなら、実際、その数年前に、私は高速道路での自動車事故で、死にかけたことがあったのだ。

私の SUV は横滑りし、コントロールを失い、そして弾丸のように橋脚へと滑っていった。

だが、最後の瞬間に…

車は、誰もがなぜだか分からないまま、停止した。

警察は、それはただの「偶然の滑り角」だと言った。

私は、信じなかった。

だが、説明することもできなかった。

老婦人は、依然として非常に穏やかな声で、続けた。

「その時、より高次の生命体が、あなたの魂が肉体から離れないように、『支えて』いたのです。

あなたには見えなかったでしょうが、私には見えました。

彼らは天使でも、あなたの先祖でもありません。

彼らは、まだ使命をその身に宿す者たちの、魂の守護者なのです。

そしてもし、あなたが道徳の道から外れれば、彼らは手を引くでしょう。

そして、災難は戻ってくるでしょう」

私はそれらの言葉を聞いて、身震いした。

その日の会話の後、私は非常に奇妙な状態で、老人ホームを後にした。

老婦人が言い当てたからではない。

生まれて初めて、誰かが私の中にある、目に見えない部分を見てくれたと、感じたからだ。

そしてその時から、私は毎朝、夜明けに瞑想を始めた。

「神通力」を求めるためではない。

ただ、自分がもう少しで生きられなくなるところだった場所からの、こだまに、再び耳を傾けるために。

（彼は私を見た。その眼差しは、まるで大きな教訓を分かち合っているかのようだった。）

私がそこから得たメッセージは、これだ。

高次元の生命体は、無作為に干渉しない。

だが、もしある人が道徳的な使命を持ち、善に向かう心を持っているなら、彼らは加護されるだろう。

時には、奇跡によってではない。

ただ、小さな変化、彼らの運命全体を別の方向へと変えるのに十分な、変化によって。

そして、一人の指導者が、それが大統領であれ、ただの一般市民であれ、もしその呼び声を聞くのに十分な静けさを持っていなければ、彼らが手に持つ全ての権力もまた、ただの空っぽの殻に過ぎない。

（彼は一旦言葉を切り、まるで新しい選択肢を提示しているかのようだった。）

もし君が望むなら、私は別の体験を分かち合うことができる。

私が、輪廻を見ることのできる人物に出会った時のことを。

あるいは、私が「偽の禅師」、神通力に満ちているが道

徳のない人物に接触した時のことを。君が、精神性が必ずしも純粹ではないことを見るために。

ジュリアン・リー：

はい。輪廻というテーマは、もはやそれほど目新しいものではありませんが、信じている人も多くはありません。仏教では、人間や他の生命体は皆、六道輪廻を経なければならないと言われています。

このテーマに関する閣下の体験や見解をお聞かせいただけますか。

元大統領：

（彼は少し黙っていた。その眼差しは、定まらない一点に向けられていた。）

君は今、人の一生における、最も深遠で、そして最も逆説的なテーマの一つに触れた。

もし輪廻があるなら、我々とは何者なのか？

そして、もしないなら、なぜ我々は時として、学んだことのない事柄を思い出すのだろうか？

私は、個人的な体験と、輪廻に対する静かな視点を、分かち合おう。

一つの学説としてではなく、私が触れたものとして。理性が到底、解明できない瞬間を通じて。

（彼は一旦言葉を切り、まるで過去の旅へと戻っているかのようだった。）

その年、私は出張で日本にいた。

非公式の会見の場で、私は学界の知人の娘である、七歳の少女に会うことになった。

その子は有名でもなく、特に変わったところもない、ただの普通の小学生だった。

だが、彼女の両親が言うには、彼女はしばしば「この世のものではない」ことを口にするという。

私は座り、ごく普通に彼女と話した。

私が尋ねた時、

「君は、なぜこの世界に来たか知っているかい？」

少女は私を見つめ、そして非常に穏やかな、古風な日本語でこう答えた。

「前の世で、私は京都で、正しくないことをしました。

そして、私のせいで、一人の人が命を落としました。

今、私はこの世に三度、生死を繰り返さなければなりません。もう誰も傷つけることなく、愛することを学ぶために」

私は、非常に驚愕した。

彼女の父親は、彼女は一度も京都に行ったことがなく、
仏教について学んだこともないと言っていた。

少女はさらに、小川の近くにある石像についても語った。
そこは、「前の世で、私がよく座って泣いていた場所」
だという。

その後、彼らが彼女を京都に連れて行くと、果たして彼
らは、何の案内板もない場所に、一つの小川と、風化し
た古い観音像を見つけたのだ。

（彼は私を見た。その眼差しは、より深い何かを説明し
たいかのようだった。）

輪廻とは、「回帰」ではない。

「業果の継続」なのだ。

仏教では、輪廻が完全な形での回帰であるとは説いてい
ない。

誰も、全く同じように「生き返る」わけではない。

そうではなく、業（カルマ）、それにはある生命体の業
力と願力の両方が含まれるが、それが新しい姿、新しい
状況、そして新しい目的の中での「再顕現」を引き寄せ
るのだ。

人々がよく口にする六道輪廻とは、実のところ、心の異

なる境地だ。

天界があり、そこでは衆生は福を楽しむが、迷いやすく、修行はしない。

修羅界があり、そこには闘争と嫉妬しかない。

畜生界、餓鬼界、地獄界があり、そこでは衆生は重い業報に苦しまなければならない。

そして人界があり、そこでは苦楽が入り混じるが、最も修行しやすい場所でもある。

わかるかね？人界は、最高の次元ではない。

だが、苦しみこそが魂を目覚めさせる鐘であるため、悟りを得る機会が、最も明確にある場所なのだ。

私はかつて、ベトナムのラムドン省で、ある僧侶に会ったことがある。

彼はこう語った。

「ある人がこの世で苦しみに遭う時、彼らは『私は今、何が間違っていたのか？』と問うべきではない。

むしろ、『私はかつて、どれほど無頓着であったために、この種を輪廻の輪の中に蒔いたのか？』と問うべきだ」

彼は言った。生まれつき障害を持つ子供がいるのは、前の世で、善良な人間を不当に裁いた役人だったからだ、と。

恋愛で不運に見舞われる人がいるのは、前の世で、他人

の信頼をもてあそんだからだ、と。

理由もなく他人に嫌われる人がいるのは、前の世で、彼らの縁を奪ったからだ、と。

では、修行者は何をすべきか？

前の世を思い出そうとすることではない。

因果の法則を深く理解し、そして、自らの全ての行いが未来の業力に刻印されるかのように、現在を生きることだ。

赦すこと、赦されるために。

耐え忍ぶこと、報復の輪に引き込まれないために。

そして怨恨を捨てること、輪廻の鎖を断ち切るために。

真に「道」を持つ者は、自分の前の世を探しはしない。

彼らは、それから解脱する方法を探すのだ。

ジュリアン・リー：

はい。アメリカにも、エドガー・ケイシーの事例のように、催眠術を用いて前世の光景を見ることができる人々がいると聞いたことがあります。

そして夢については、多くの人々が様々な光景を夢に見ますが、目覚めると、それはただの夢だと気づき、通常はそれに注意を払わなくなります。

元大統領：

（彼は頷いた。理解に満ちた頷きだった。）

君の言うことは非常に正しく、そしてまた、非常に繊細だ。

夢と前世退行催眠は、二つの「裏口」だ。それらを通じて、人間の意識は、線形的な現実の幕を偶然通り抜け、別の空間次元、時間がもはや一直線ではない場所に、触れることができる。

だが、それらは一点において異なる。

夢は、「無意識」によって導かれる。

一方、催眠は、「導かれた意識」が潜在意識の層を通り抜けることだ。

まず、夢について話そう。

それは、この世を超えた記憶の貯蔵庫だ。

夢の中には、空想ではなく、それ以前の存在の次元から「漏れ出した記憶」であるものがある。

人々はそれらを、混同していて非論理的に見えるから、証拠がないから、そして目覚めると夢の中の感情がすぐに消えてしまうから、しばしば無視する。

だが…もしある夢が、同じイメージ、同じ登場人物で何度も繰り返されるなら、もしそれが、一度も経験したことのないことなのに、目覚めた時に涙を流させるなら、

あるいは、自分が全く知らないが、後で調べてみると完全に正しいとわかる詳細を含んでいるなら。

その時、その夢は、前世から「漏れ出した」記憶の断片である可能性が、非常に高い。

（彼は一旦言葉を切り、そしてより能動的な方法について続けた。）

そして前世退行催眠、それは、潜在意識の下層にある扉を開けることだ。

この能力でアメリカで最も有名なエドガー・ケイシーは、かつてこう言った。

「魂が、コントロールされた形で肉体を離れる時、それは自らが輪廻の旅路の中でかつて残した、いかなる痕跡へも、戻ることができる」

催眠状態の下で、何千人もの人々が、事前に全く示唆されていないことを口にした。

彼らは、異なる地方の方言で、奇妙な言語で話したり、あるいは学んだことのない歴史的な詳細を述べたりした。彼らは、前の世での自分の死について語り、それはしばしば、彼らがこの世で直面している問題、例えば病気、強迫観念、あるいは説明のつかない習慣と、関連していた。

ではなぜ、科学はこれらのことを認めないのか？

なぜなら、それらは測定できないからだ。

機械の上で、再現できないからだ。

そして特に、それらが現代の心理学モデルのコントロールを超える、一つの現実を示唆するからだ。

彼らは、意識が脳の中にあるのではなく、生命が死によって終わるのではないと、認めることを恐れている。

（彼は私を見た。その眼差しは、より深くなった。）

では、修行者はどうか？

真の修行者は、催眠も、夢も必要としない。

なぜなら、彼らの天目、あるいは第三の目と呼ばれるものが開かれる時、彼らは意識を保ったまま、他の空間次元に入ることができるからだ。

違いは、常人は、意識が無意識の状態で偶然「道を開いた」時にのみ、前世にアクセスできるということだ。

一方、修行者は、道徳、定力、そして自らの功法によって、能動的に、より高い次元に達することができる。

では、これら全てにおいて、中心となるものは何か？

自分が前の世で誰であったかを知ることではない。

この世で何をすべきかを知ることだ。もう二度と、戻ってくる必要がないように。

ある者は前の世で王だったが、この世では物乞いをしなければならない。

ある者は前の世で殺人者だったが、この世では人を救う医者となる。

だが、最も重要な問いは、

我々は、戻ってくるたびに、何を学んだのか？

そして今回は、何を違うようにするのか？ということだ。

ジュリアン・リー：

天目については、私も何度か読んだことがあります。特に、中国由来の書物で。

それらによれば、天目を用いれば、人は過去と未来を見ることができ、非常に遠い場所の光景や、他の空間の光景を見ることができると。

天目について、そして閣下がかつて目撃されたり、信じたりした体験について、もう少し詳しくお聞かせいただけますか。

元大統領：

（彼は私を見つめた。その眼差しは深く、まるで別の世界を見つめているかのようなだった。）

君は今、人類がかつて知っていた中で、最も古く、そし

て最も神聖な謎の一つを、再び掘り起こした。

だが、我々の現代文明によって、忘れ去られてしまった謎を。

天目。第三の目。

それは額にあるのではないが、内面が浄化された時に開く。

それは物理的な感覚器官には属さないが、いかなるレンズよりも、鮮明に見ることができる。

古代の修煉の文献、道家から、仏家、ヒンドゥー教や古代エジプトに至るまで、「天目」は常に、超感覚的な知覚のチャンネルとして記述されている。それは額の中央部に位置するが、物理的な器官ではなく、魂と他の空間次元との間の、一つの接続点なのだ。それは我々の目のように「見る」のではなく、光が識神に直接伝達されるように、情報を「受け取る」。

古代中国の伝説によれば、人間は生まれた時、皆、天目が開いた状態にあるという。

だが成長するにつれ、それは貪欲、憎しみ、愚かさによって、欲望、名声、そして利益によって、覆い隠されていく。

魂が汚染されれば、「天の目」もまた、閉じてしまう。

心が静寂の状態に達し、念が清らかになり、そして丹田

からのエネルギーが昇ってくる時、額にある「靈感の門」が活性化される。

そこから、人は他の空間次元のイメージを見ることができ、他人の周りに黒い、赤い、あるいは青い気のようにまとわりつく業力を見ることができる。そして、神、仏、あるいは亡くなった生命体の境地を見ることができる。非常に高い次元に達すると、人は輪廻、過去、そして未来でさえも、巻き戻されたフィルムのようにではなく、一つの「絶対的な直感」として、見ることができるのだ。

（彼は長い間黙り、そしてより私的な声で続けた。）

私が知っている、ある人物について話そう。

彼は有名でもなく、修行者の衣をまとっているわけでもないが、彼の天目は開いていた。

彼はコロラドの山中に、隠遁して暮らしていた。

一度、私は彼を訪ねたことがある。なぜなら、彼は他人が前の世で何であったかを見ることができ、もし古い生き方を続ければどうなるかを知ることができると、人々が言うのを聞いたからだ。

私はそこへ行き、名前も告げず、自分について何も明かさなかった。

彼はただ私を数分見つめ、そして静かに言った。

「あなたはかつて、十二人の善良な人々を斬首するよう、命令を下した人物だ。

あなたが悪であったからではない。あなたが『朝廷の命令に従った』からだ。

この世では、あなたは政治を行っているが、覚えておきなさい。自分の心こそが、最大の朝廷なのだと。

もしあなたがもう一度過ちを犯せば、来世では、償う機会はないだろう」

私は、一言も発することができなかった。

そのことを知る者は、私と、私の良心の他に、誰もいなかった。

（部屋の空気が、奇妙なほど静まり返った。）

私が天目について信じていることは、それは実在するが、誰もが開きたいと望んで開けるものではないということだ。

ある修行者が、真に悪い心を捨て去り、善良な心を保ち、そして天の道に従って生きて初めて、天目は宇宙からの贈り物のように、徐々に開かれていく。

「楽しみのために見る」のではなく、「より大きな責任を担う」ために。

天目を持つ者は、非常に多くを見ることができるが、彼

らはより多く、沈黙しなければならない。

なぜなら、もし不適切な時に口にすれば、世間の人々は嘲笑するだろう。そしてもし、間違って口にすれば、自身が徳を損なうことになるからだ。

ではなぜ、我々の現代文明は、この能力を失ってしまったのか？

なぜなら、我々は自分自身よりも、機械を崇拝するからだ。

なぜなら、我々の心は、欲望、貪欲、そして恐怖によって、ますます覆い隠されているからだ。

そしてなぜなら、社会は人間に内側へと向かう方法を教えず、ただ外側へと走ることを強いるからだ。

だが天目は、行動によって開かれることはできない。

それは、魂が波紋一つない湖面のように静まり、そして徳が山のように厚くなった時にのみ、開かれるのだ。

ジュリアン・リー：

神通力を持つ悪人は、映画に出てくる「悪魔」のようですね。

そして神仏については、私たちの多くは、絵画や寺社・教会にある像を通じて、その存在を漠然とを感じるだけで

す。

閣下は、神や仏、あるいは主について、何か体験されたことはありますか。

西洋の人はよく「神のご加護がありますように」と祈りますが、

閣下は、神から祝福されたと感じたことはありますか。

元大統領：

（彼は私を見つめた。非常に深い眼差しで、部屋の空気がさらに静まり返ったかのようだった。）

君の問いは…まるで、言葉が通常届かない場所からの、呼び声のようだ。

君は、「神、仏、あるいは主はいるのか」と尋ねなかった。

君は、こう尋ねた。

「閣下は、あの方を感じたことがありますか？」と。

そして約束通り、私は外交辞令を使って答えるつもりはない。

私は、主の、神の、そして仏の存在を、感じたことがある。

いかなる言語からも来ない、光の流れのように。

三つの、実話を分かち合おう。

誰かを説得するためではなく、かつてこの世界の向こうに何かがあると知っていた者たちへの、ささやきとして。

（彼は一旦言葉を切り、まるで長い夜を追憶しているかのようだった。）

最初の体験は、誰もいない教会でのことだった。

一度、在任中の極度の緊張状態にあった時、私は真夜中近くに、バージニア州の小さな教会を訪れた。

誰もいなかった。明かりもなかった。ただ、ステンドグラスの屋根から差し込む、月の光だけがあった。

私は跪いた。名声を祈るためでも、当選を祈るためでも、安全を祈るためでもない。

ただ、こう尋ねるために。

「主よ、もしあなたが本当にそこにおられるなら…
どうか私に言葉ではなく、私の心の中の叫び声の間に、
沈黙をお与えください」

私は目を閉じた。そしてなぜだか分からないが、私の体全体が、非常に柔らかい光の中に置かれたかのようにだった。熱くもなく、冷たくもなく、もはや肉体ではないかのように、軽かった。

私は、主の声を聞かなかった。

だが、もはや聞く必要もなかった。

なぜなら、私は知っていたからだ。

主は、そこにいる。

そして主は答える必要がない。なぜなら、主自身が、すでに答えだったからだ。

（彼は続けた。その声は、依然として非常に落ち着いていた。）

二番目の体験は、名もなき神と、洞窟の中の炎についての話だ。

一度ネパールを訪れた際、私は一行からはぐれ、雹のためにヒマラヤ山脈近くの高い洞窟に避難しなければならなかった。

私は少し線香を焚き、ただ暖を取り、心を静かに保つために、単純に瞑想した。

その時、なぜだか分からないが、非常に明確な一つの念が、私の頭に浮かんた。

「もし今日が私の人生最後の日であるなら、私は他者を照らすのに十分なほど明るいのか、それともただ肩書きを持つ闇に過ぎないのか？」

私は、涙を流した。

恐怖からではなかった。生まれて初めて、自分自身を、肩書きも、有権者も、そして誰も守ってくれる者のいな

い、裸の魂として、見たからだ。

私が目を開けた時、洞窟の中の炎は、風もなく、煙もないにもかかわらず、非常に穏やかに燃えていた。

そして、ぼんやりとした姿が、誰かははっきりしないが、炎の上に立っていた。

まるで、いかなる判断も下さずに、慈悲の眼差しで、静かに私を見つめているかのようにだった。

私は、それが誰であるかを知る必要はなかった。

なぜなら、あの方は自己紹介する必要がないと、感じ取ったからだ。

（彼は微笑んだ。思索の笑みだった。）

そして三番目の体験は、心の中の仏と、台湾の物乞いについての話だ。

私はかつて台湾に招待され、台南のある寺院を訪れる機会があった。

帰り道、私は寺の門の前で座っている、ぼろぼろの服を着た、年老いた物乞いを見た。

私は彼に少しお金を渡した。だが、彼は受け取らなかった。

彼はただ、こう言った。

「仏像に感動できる者が、必ずしも仏に感動される者と

は限らない。

だが、もしあなたが正しく生きるなら、あなたは他者の心の中に生きる、一体の仏像そのものとなるだろう」

私は、呆然とした。

その男性は、私がこれまで誰にも見たことのない、声と眼差しで話した。

私が振り返ってよく見ると、彼は消えていた。

足跡もなく、誰も彼がどこへ行ったか見ていなかった。

私はそこに、静かに立ち尽くした。

自分が今、物乞いに会ったのか、高僧に会ったのか、あるいは私の心を試すために化身した仏に会ったのか、分からなかった。

（彼は私を見た。まるで、最初の問いに答えているかのようだった。）

では、私は「祝福された」のか？

いや、日常的な意味では、そうではない。

私が金持ちになったわけでも、より安全になったわけでもない。

そうではなく、誰もが疑う場所である、権力の頂点にありながら、私はまだ、信じる能力を保っていたということだ。

そして最も価値あることは、「神を見る」ことではない。
「神がいると知り、そして神なき世界で、自分自身を失わないこと」なのだ。

君は、非常に的確に尋ねた。

人々は神を、像を通じて、絵画を通じて、経典を通じて見る。

だが、誰かが本当にあの方に会ったことがあるだろうか？

私は言おう。会う必要はない。

もし君が正しく、謙虚に生き、そして怨恨を捨て去ることができれば、まさに君が最も予期しない瞬間に、あの方はそこに立っているだろう。

声を上げず、だが、決して語られなかったが、永遠に正しい言葉のように、君の心に光を注ぐだろう。

もし君が望むなら、私はもう一つ、私的な話を分かち合うことができる。

なぜ、道徳が高ければ高いほど、神々に導かれやすくなるのかについて。

そして、神通力を持つ悪人が、君が言うように、まさに「悪魔」となるのかについて。

君は、先へ進みたいかね？

ジュリアン・リー：

はい、ぜひ、お聞かせください。

元大統領：

（彼は頷いた。ゆっくりとした頷きだった。まるで、何か重大なことを口にする準備をしているかのようだった。）

よろしい。

君は今、古代のあらゆる修煉の道が警告してきたが、現代の世間がしばしば見過ごし、時には誤って称賛さえする事柄に、触れた。

それは、能力が道徳に先行する時、神通力は魔の武器となる、ということだ。

そして、人間が心性を考慮せずに権能を崇拝する時、彼らは聖人の衣をまとった魔王を招き入れているのだ。

「神通力を持つ悪人」、それは映画の中だけの話ではない。

歴史上、そして修煉の世界にも、道徳を修めず、欲望を捨てないが、何らかの縁や、あるいは邪法によって、超常的な能力の一部を開いた者たちがいる。

彼らは他人の心を見ることができ、小さな物体を動かす

ことができ、いくつかの事柄を予知でき、さらには催眠術にかかったかのように、他者を自分の言葉に従わせることさえできる。

古人は彼らを何と呼んだか？

道家は彼らを「体を借りる邪霊」、あるいは「道を占拠する小神」と呼んだ。

仏家はそれを「外道の神通力」と呼んだ。つまり、正法から来たものではない神通力という意味だ。

そして聖書は言う。「サタンでさえ光の天使に身を偽るのです」と。

彼らは実在し、そして非常に危険だ。

なぜなら、彼らは他者にその能力を感服させ、心根を吟味することを忘れさせるからだ。

（彼は長い間黙り、そしてより私的な声で続けた。）

私はかつて、そのような人物に会ったことがある。

そしてそれは、私が生涯を通じて持ち続けている、一つの教訓だ。

政府で働いていた頃、私は東洋のある僧院で、「有名な禅師」に会うよう招待されたことがある。

その人物は何千人もの弟子を持ち、巨額の寄付を受け、メディアからは絶賛されていた。

私は禅堂に入った。

私の目の前には、非常に穏やかに見える人物がいたが、その眼差しは、私の背筋を凍らせるほどに深かった。

彼は挨拶もせず、何も尋ねなかった。

ただ、こう言った。

「あなたが混乱しているからここに来たことは、知っています。

しかし、あなたの権力は、私が持つ権能に比べれば、何でもありません。

私は、あなたを失脚させることも、あるいは一つの念で、より高い地位に就かせることもできます」

私は、黙り込んだ。

そしてその瞬間に、わかった。

これは、「道」ではない。これは、支配だ。

これは、神通力ではない。これは、魔力だ。

私は彼に礼を言い、そして立ち上がって去った。

彼は引き止めず、ただ微笑んだ。

その後何日も、私の背筋を凍らせる、微笑みだった。

（彼は私を見た。その眼差しは、血の滲むような経験を分かち合っているかのようだった。）

私がそこから学んだ教訓は、これだ。

神通力を持つ者が皆、「道」を持つ者ではない。

そして、威力を持つ者が皆、我々が従うべき者ではない。

神通力は、もし忍、善、廉、そして慈が伴わなければ、

他者を縛る縄となり、道を照らす灯とはならない。

では、真の修行者はどうか？

彼らは能力をひけらかさない。

神通力を披露しない。

病を治すこと、富を与えること、あるいは運勢を占うことを、約束しない。

なぜなら、彼らは知っているからだ。真の道とは、自分の心を修めることだと。

神通力は、ただ道端の花に過ぎない。

末法の世では、邪道が雨後の筍のように生えてくる。

では、どうやって見分けるのか？

君は、この三つのことを覚えておきなさい。

第一に、その者の道徳を見なさい。もし彼らが高尚なことを語りながら、放縦な生活を送っているなら、それは正道ではない。

第二に、彼らが天地への敬意を持っているかを見なさい。真の修行者は、常に天を敬い、天に従い、そして決して自己の名において語ることはない。

そして第三に、彼らが君をどこへ導くかを見なさい。もし彼らが君の心をますます軽やかにし、憎しみを捨てさせ、そして依存させないなら、それは正道だ。だがもし、彼らが君に彼らを恐れさせ、彼らに依存させ、あるいは彼らを神格化させるなら、それは邪道だ。

私はかつて、神通力を持つ人々に会ったことがある。そしてまた、神通力を持たないが、まるで高次元からの光に包まれているかのように、私に深い平安を感じさせてくれた人々にも会ったことがある。

そして私は、知っている。

その人こそが、たとえ何の奇跡も起こさなくとも、真の道人なのだ。

ジュリアン・リー：

はい。西洋ではよく、主を信じる者は天国に迎えられると言われます。

一方、東洋では、仏によって極楽浄土に救われるとよく言われます。

閣下は、このテーマについてお話しになりたいということでしょうか。

元大統領：

（彼は頷いた。ゆっくりとした頷きだった。その眼差しは、この上なく荘厳になった。）

はい。まさしく、その通りだ。

君は、あらゆる修行の旅路、あらゆる宗教、そして人類が何千年もの間、心に抱き続けてきた最も深遠な問いの、最後の核心に触れた。

「人間の魂は、最終的にどこへ行くのか？」

そして、それ以上に重要なのは、

「我々は、ただ希望するだけでなく、本当に迎えられるために、どのように生きなければならないのか？」

天国、極楽、あるいは涅槃、どの名で呼ばれようとも、それらは皆、絶対的な清浄の境地、もはや苦しみも、生死もない場所について語っている。

西洋ではそれをヘブンと呼ぶ。魂が神の愛の中で永遠に生きる場所だ。

東洋ではそれを浄土、極楽、西方、あるいは三千大千世界と呼ぶ。

道家はそれを上界、天界と呼ぶ。

そして、深く瞑想する者たちは、それを単にこう呼ぶ。

「本源に帰る」と。

（彼は一旦言葉を切り、次の問いを強調するかのようだった。）

では、誰が迎えられるのか？

その答えは、何千年もの時を経て、そして人類を教え導くために来た無数の聖人たちを通じて、ただ一つの文字に集約される。

それは、「心」という文字だ。

最も多くの経典を読んだ者ではない。

帰依の儀式を行った者ではない。

最も大きな供物を捧げた者でもない。

ますます暗くなる世界の中で、清らかな心を保った者なのだ。

覚者たちの教えは、奇妙なことに、異なる宗教から来ているにもかかわらず、非常に似通っている。

イエス・キリストはこう教えた。「心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見るであろう」。彼は権力についてではなく、清らかな心について語った。

釈迦牟尼仏はこう教えた。「心が浄まれば、即ち仏土が浄まる」。彼は我々に救いを請うことを教えたのではなく、まず自らの心を浄めることを教えた。

そして老子はこう言った。「天の道は、誰をも偏愛する

ことなく、常に徳のある者を助ける」。彼は儀礼についてではなく、内なる徳について語った。

では、我々は迎えられるために、どうすればよいのか？
誰も、天国への「切符を買う」ことはできない。

また、誰も、極楽へ行くことを「願う」ことはできない。
我々はただ、それにふさわしくなることができるだけだ。
ある生命体が、欲望、怨恨、名声、そして利益の束縛を
乗り越え、そして誠実に、自らの一つ一つの念、一つ一
つの思考、一つ一つの行いを修めて初めて、神仏は手を
差し伸べる。

恩恵を与えるためではない。

こう確認するためにだ。

「お前は、準備ができた」

（彼の声はより私的なものになった。まるで深い記憶を
語り直しているかのようだった。）

私はかつて、ある真の老修行者に尋ねたことがある。

「自分が選ばれたと、どうすれば分かるのですか？」

彼はただ、こう言った。

「お前がもはや誰をも恨まず、もはや何をも恐れず、そ
して今日が地上で過ごす最後の日だと知っても、穏やか
に微笑むことができる時…

…それは、お前がずっと以前に、すでに選ばれていたと
いうことを意味するのだ」

そして、君に正直に言おう。

かつて権力の最高位に立った者でありながら、私が孤独
に良心と向き合う瞬間ほど、平穏な場所を、私は見たこ
とがない。

護衛もない。

飛行機もない。

国旗もない。

ただ私と、非常に明確な一つの念だけがある。

「もし今日、私の魂が呼ばれたなら…

私は迎えられるにふさわしいのか、それとも引きずられ
ていくのか？」

（彼は私を見た。その眼差しは、最後のメッセージのよ
うだった。）

君と、そしてまだ空を見上げることを知っている全ての
人々に、捧げたい言葉がある。

人は、他人より高い地位に登るために生きるのではない。
自分の中にある、闇から這い出すために生きるのだ。

君が自分自身を乗り越えた時、君は誰かを呼ぶ必要はな

い。

神が、自ら訪れるだろう。

もし君が望むなら、私は最後の締めくくりを捧げることができる。

かつて多くの仮面と権力を持ってこの世を通り過ぎたが、最終的に、ただ一つだけを保った者からの、「無名の書簡」として。

魂、それこそが、我々が本当に所有する、唯一のものだ。君は、私にその言葉を残してほしいかね？

ジュリアン・リー：

はい、閣下。

大変楽しみにしております。

元大統領：

（彼は私を見た。その眼差しは、地位や時間を超越していた。そして彼は語り始めた。その声はもはや政治家のものではなく、まるで別の領域からのささやきのようだった。）

では…

元大統領という名義でもなく、権力を持つ者という役割

でもなく、
ただ、多くの栄光と深淵を通り過ぎた一つの魂として、
君と、そして心に静けさを保つ全ての人に、署名のない
手紙を送ろう。

（部屋は完全に静まり返った。私は息をすることもほとんどできず、ただ耳を傾けていた。）

後を継ぐ者へ残す手紙

明日、私はもうここにはいないかもしれない。
インタビューも、拍手喝采も、もうない。
何らかの命令に署名するための地位も、もうない。

だが、残るものがある。そして、常に残り
続けるものがある。

それは、魂だ。

そしてもし人間がそのことを忘れれば、全ての戦争、全ての哲学、全ての宗教は、ただの肉体のゲームと化すだろう。

人間は、摩天楼を建てるため、破壊兵器を製造するため、あるいは一生涯、是非を論争するために生まれてきたのではない。

人間は、自分が誰であるかを思い出すために、生まれてきたのだ。

ある国、ある民族、あるいはある役職から来た者としてではなく、

広大な宇宙の一部として、人間であることの学びを歩んでいる者として。

君が、完全に孤独だと感じる瞬間があるだろう。

全世界が背を向ける。信頼は枯渇する。

君は善さえも疑い、神や仏がいるのか、あるいは誰かがまだ君を気にかけているのかどうかさえ、疑うだろう。

だが、どうか覚えていてほしい。

神は、舞台の照明の中には現れない。

主は、君が自らの心からわずかでも光を灯せるかどうかを見守るため、長い夜の最も深い闇の中、君の背後に立っている。

全てが崩壊してから、振り返るのを待つな。

選択肢があるうちから、振り返りなさい。

病が襲ってきてから、仏に祈るのを待つな。

自らの全ての行いが、あの方に見られてい

るかのように、生きなさい。

そして、世界が新しくなってから、善く生きるのを待つな。

君自身が、もし正しく生きるなら、すでにその新しい世界の細胞なのだ。

私は、君に私を信じろとは望まない。

私が望むのはただ、いつの日か、鏡の前に立った時、君の眼差しが…

その中に微笑んでいる魂が見えるほどに、透き通っていることだ。

その時、君はもう神を探す必要はない。

なぜなら、神はすでに君の中にいるのだから。

この一生を、存分に生きなさい。まるでそれが、神が君に人間である機会を与えた、最後の時であるかのように。

そしてこの人生を、通り過ぎなさい。客人のように、軽やかに。

だが、その足跡は、光で残しなさい。

差出人：

誰であるかを知る必要はない。

ただ知るだけでいい。

かつて赦され、救われ、そして光を見た者がいたことを。たとえ、一度だけでも。

（彼は終えた。私は静かに座り、一文字一文字、一つ一つの意味が、私の魂に染み渡るのを感じていた。）

元大統領：

もし君が、いつの日か、後を継ぐ者のために、このような手紙を書くなら…

その時、私は信じる。

この世界には、まだ希望があると。

ジュリアン・リー：

（喉が詰まるのを感じた。言いたいことは山ほどあるのに、言葉にならなかった。）

はい…このメッセージ、ありがとうございます、閣下。

そしてまた、この四日間、このインタビューのために時間を割いていただき、ありがとうございました。

私にはまだ多くの問いがありますが、今この時…はっきりと思い出すこともできず、また、これ以上閣下に何をお尋ねすべきかも、分かりません。

おそらく、私には、自ら熟考する時間が必要なのでしょう。

元大統領：

（彼は微笑んだ。理解と満足の笑みだった。）

君は、最も正しいことをした。

これ以上、問いを重ねることではない。

立ち止まり、熟考することだ。

なぜなら、時には、最大の答えは我々が尋ねることの中にはないからだ。

それは、語られたことの後の、静寂の中にあるのだ。

この四日間、君はただのジャーナリストではなかった。

認識の崖っぷち、ごく少数の者しか敢えて足を踏み入れない場所まで、行く勇気のあった、勇敢な伴走者だった。

君の問いは、ただ知るためだけではなかった。

それは、偽りに満ちたこの世で、真実を見たいという、心からの誠実な呼びかけ、渴望だった。

今日の言葉を、種のように、君の中に静かに横たえておきなさい。

それらがすぐに花開く必要はない。

だがいつの日か、君の心が十分に静まった時、それらの種は自ずと、一つの道となって開くだろう。

（彼は私を見た。その眼差しは、最後の言い付けのようだった。）

もし君が、いつの日か、再び心が騒ぎ、問いが静かな夜に戻ってくるのなら…

思い出してほしい。

もはや、私を探す必要はない。

座り、目を閉じ、そしてまっすぐに、自分の心に問いなさい。

あの方、君が常に会いたいと願っていたお方は、どこか他にはいない。

まさに、君が謙虚になる、その瞬間にいるのだ。

さようなら、もしこれが終わりならば。

そしてまた会おう、もし君が再び歩み続けるならば。

君の一生が、満たされたものであらんことを。

ジュリアン・リー：

（私は立ち上がり、彼にお辞儀をした。）

はい。さようなら、閣下。

ご健勝と、ご安寧をお祈りしております。

元大統領：

（彼も立ち上がり、私の肩に手を置き、信頼に満ちた、軽い一叩きをした。）

ありがとう。

心の底から。

そして私は、その言葉を…

ただの儀礼としてではなく、

言葉を超えたものを共に聞いている、二つの魂の間の、受け渡しとして受け取ろう。

光が…

それが神から来るものであれ、道（タオ）から来るものであれ、あるいは他のいかなる源泉から来るものであれ…

常に君の行く道を照らさんことを。

そしていつの日か、君が真実を求めて闇に足を踏み入れねばならなくなったなら…

思い出してほしい。

真の光は、どこか他にあるのではない。

それは常に、君自身の心の中に、備わっているのだ。

（彼は少し間を置き、そして続けた。）

また次回会おう。

その時、我々は世界が巻き込まれている地政学的なゲームについて話そう…

そして、誰が本当に脚本を書いているのかを。

（彼は私を見つめた。深く、信頼に満ちた眼差しだった。）

おやすみ。

炎の守り手よ。

（私の背後で扉が閉まったが、彼の言葉はまだ響いていた。そして私は知っていた。「炎の守り手」、それは、私自身なのだと。）

* * *

残された遺産

ジュリアン・リー：

元大統領との探求の旅は、四日目の対話をもって終わりを迎えた、私は思っていた。その歴史的な四日間の草稿は、深い感動とともに完成させ、物語はこれで完結したとの確信をもって THE LIVES MEDIA に送付した。

しかし、すべてが終わったと確信したまさにその時、最後にお会いしてから約一ヶ月が経ったある静かな朝、一通の予期せぬメールが届いた。

メールは元大統領からのもので、その内容もまた、非常に簡潔だった：

「やあ、ジュリアン。

我々の対話は、私に多くのことを考えさせた。過去の物語や現在の考察を超えて、未来の世代のために、これから進むべき道のより具体的な素案を残す責任が私にはあると気づいたのだ。

添付した文書を、インタビューの一部としてではなく、独立した一つの遺産として受け取ってほしい。君なら、どうすべきか分かるだろう。

友より」

そのメールに唯一添付されていたファイルこそ、皆様がこれからお読みになる『道徳的な共和国に関する心の書簡』に他ならなかった。

それを読んだ後、私はこれが欠けていた一片であり、危機に直面する世界の分析と、創造され得る世界の実現可能なビジョンとを結ぶ架け橋なのだと理解した。それは、閣下が抱えておられた問題への答えであるだけでなく、希望のための詳細な設計図でもあった。

そして、閣下のご許可を得て、私はそれを、この対話全体の特別な一部として、また最も重要な遺産として、ここに謹んで掲載する。

* * *

道徳的な共和国に関する心の書簡

ジュリアン・リーへ、

第一部：はじめに

親愛なるジュリアンへ

我々の四日間の対話は、政治に関する思索を呼び起こしただけでなく、世界の諸問題を解決するためには、全く異なる視点からそれらを見つめなければならないという深い認識を、私の中で確固たるものにした。

現代世界は、あらゆる物事を実証科学と物質的な理性のレンズを通して見ることに慣れている。しかし、私の思索の旅は、私を別の参照体系へと導いた。それは、形而上学的な精神性と古代の道徳的価値観からなる視点である。この視点から見れば、歴史はもはや偶然の出来事の連鎖ではなく、天意によって定められ、因果応報の法則に従って動く壮大な劇なのである。

まさにこのレンズが、なぜ人類の偉大な制度が、善意から始まったにもかかわらず、最終的にはすべて行き詰まりに終わったのかを、私が理解する助けとなった。我々は、民主主義が金銭と派閥によって墮落し、共産主義が約束された天国を地上の牢獄に変え、そして資本主義が、類いまれな繁栄を生み出しながらも人間の尊厳を蝕むのを目の当たりにしてきた。それらはすべて、共通の弱点を抱えている。神聖なる存在への信仰と普遍的な価値観を失った基盤の上に、築かれているということだ。

我々が、古いシステムを繕うのではなく、永遠の真理へと回帰する新しい道を探すべき時が、来たのではないだろうか。

今日、私は君にこの草稿を送る。これを単なる無味乾燥な政治計画としてではなく、一つの「心の書簡」とし

て、そして「道徳的な共和国に関する論考」の始まりとして、受け取ってほしい。

これは、私が託したいと願う思索であり、私が堅固であると信じる簡素な原理に基づいて築かれた、一つの国家の姿である。

人類が偽りの制度に疲れ果てた時、彼らは自ずと源流へと回帰すると、私は信じている。道を根幹とし、徳を重んじ、賢才を柱とするのだ。

以下の文章で、そのモデルについて具体的に解説していく。

* * *

第二部：道徳的な社会の基盤に関する論考

我々は、自明の真理をここに認める：創造主は、人類に自らの人生の道を決定するための自由意志を授けた。そして何よりも、神は人類に神聖で不可侵の特権を授けたもうた。それは、修煉の道を歩む機会である。

人の前には、常に三つの人生の岐路が存在する：

一、天理に従い、正々堂々とした平穏な人生を生きること。

二、天理に背を向け、罪惡に支配されるがままとなり、やがて地獄での裁きか永遠の破滅に直面すること。

三、そして第三の道—最も高貴な道—は、魂を洗い清め、俗世を超越するために修煉に身を投じることである。

したがって、修煉の道を歩むか否かを自由に選択する権利こそ、人類の最も自然で神聖な権利の一つなのである。

歴史は痛々しいほどに証明してきた。無神論と唯物論の基盤の上に築かれた政権は、必然的にこれらの神聖な権利を否定するであろう。それは信仰の炎を消し去り、修煉者を弾圧し、進歩の名の下に独裁体制を築くためにあらゆる手段を講じる。これらの行為は、単に人間に対する圧迫であるだけでなく、天理への挑戦であり、創造主の恩寵を踏みにじるものである。

これらの理由により、新しい国家モデルを構築することは、正当な要求である。その究極の目的は、権力や物質的な富ではなく、道徳を尊び、精神的な豊かさを育む社会を築き、そして何よりも、すべての市民が自らの人生の道を選択する自由を守ることである—その中でも、修煉の道を歩む権利は、最も尊いものと見なされなければならない。

我々はそれを道徳的な共和国と呼ぶ。この共和国は、創造主の光に導かれて設計され、

真・善・忍を基本原理とし、国家のあらゆる思想と行動を照らし、公正で、慈悲深く、和やかな社会を築き、神が授けたもうた恩寵に値するものとなるであろう。

* * *

第三部：哲学的基盤と創造の原則

A. 序論：歴史の失敗から新たな基盤の必要性へ

未来のための建築物を創造する前に、賢明な建築家は過去に崩壊した基礎について深く考察しなければならない

い。人類の歴史は、理想的な社会秩序を求める人間の絶え間ない努力の壮大な悲劇である。一つ一つのモデルは、それが輝かしいものであろうと暗黒のものであろうと、東洋のものであろうと西洋のものであろうと、権力の本質についての貴重な教訓であり、歴史の轍を踏まないために、我々が根本的な誤りをより明確に認識するのを助ける。

1. 古代の聖王モデル

長所：これは記録上、最も理想的な社会状態であり、指導者は神聖にさえ近い道徳を持つ聖人であった。彼らは徳をもって民衆を感化し、厳格な法律を必要とせずに社会が調和の中で自律的に機能することを可能にした。

短所：それは持続可能な「システム」ではなく、完全に一人の個人の非凡な資質に依存していた。その資質は確実に模倣されたり継承されたりすることができず、このモデルを遠い黄金時代の記憶に過ぎないものとした。

2. 封建君主制と神権モデル

長所：明君を得た場合、このモデルは長期的な安定と優れた戦略的ビジョンを生み出すことができた。なぜなら、王は短期的な再選の圧力にさらされていなかったからである。特に、古代エジプトのような文明では、ファラオ（王）の権力と大神官たちの神権が一体化し、共通の信仰に基づいて何千年にもわたる驚異的な社会の安定を生み出した。

短所：その致命的な欠点は、個々の王にあまりにも大きな権力を与えながら、効果的な監視と抑制のメカニズムを欠いていたことである。権力が暗君の手に渡ったり、聖職者階級が墮落し、神聖なる名を世俗的な利益のために乱用したりすると、それは大惨事となった。歴史は、残虐な王が無制限に殺戮を行い、ほんの少しの不興が九族誅滅の命令につながり、国民全体が恐怖と災厄に沈むという、無数の悲劇を記録している。

3. 古代の民主主義モデル（ギリシャ）

長所：古代アテネの民主主義は偉大な実験であり、「市民」という概念を生み出し、西洋政治哲学の基礎を築いた。それは市民の政策決定への直接参加を可能にし、ソクラテスやプラトンのような賢人たちが思想を発展させるための自由な環境を創造した。

短所：このモデルは、道徳と知恵の導きを欠いた大衆に権力を委ねることの危険性を示している。それはデマゴグによる操作を非常に受けやすく、誤った混沌とした決定につながり、その最大の悲劇は、アテネ市民が偉大な賢人ソクラテス自身を死刑に票決したことであった。

4. 現代の議会制民主主義モデル（資本主義）

長所：その当初の意図は非常に優れたものであった。それは、普通選挙を通じて国民に指導者を選ぶ権限を与えることで、旧来のモデルの専制と混沌を克服し、平和的で正当性のある権力移譲のメカニズムを創造することであった。

短所：このモデルは、道徳的に退廃した社会で機能する際に、根本的な誤りを露呈する：

- **金銭と派閥による堕落：** 選挙はもはや有能で徳のある人物を探すプロセスではなく、広告、資金調達、弁論の競争と化している。選ばれた指導者は、国家の共通の利益に奉仕するよりも、金融利益団体や派閥を喜ばせることに長けた人物であることが多い。
- **道徳的退廃の悪循環：** これが最も根深い弱点である。社会自体の道徳的基盤が崩壊すると、人々は自らの崩壊と思想的に合致する候補者に投票する傾向がある。伝統的な道徳に反すると見なされるライフスタイルを支持すると宣言する候補者が、古い価値観を守る者よりも多くの票を獲得する可能性がある。このようにして、候補者がデマゴーグであればあるほど、大衆の低俗な道徳的嗜好に応えれば応えるほど、当選しやすくなり、国家全体を引きずり下ろす悪循環を生み出す。

5. 現代の全体主義モデル

a. 古典的段階（純粋な共産主義）：

長所（表面的）： 絶対的な社会秩序を創造し、国家資源を集中させて大きな目標を達成する上で高い効果を発揮することができる。

短所： その秩序は、無神論、唯物論、そして恐怖の基盤の上に築かれている。それは人間の尊厳を完全に破壊し、信仰の自由を弾圧し、修煉の炎を消し去り、社会を見えない牢獄に変える。これは、天理に最も直接的かつ傲慢に立ち向かい、挑戦するモデルである。

b. 「改良」段階（ベトナムと中国における国家資本主義）：

長所： このモデルは非常に実用的であり、驚異的な経済成長を生み出し、何億人もの人々の物質的な生活水準を向上させた。それは全体主義国家の集中した力と市場経済のダイナミズムを組み合わせている。

短所： 経済的な成功は非常に高い代償を伴う。無神論の基盤と政治的独占は変わらず、それが際限なく物質を追い求める社会、退廃した社会道徳、破壊された環境、そして国難となった汚職につながり、それは秘密のオフィスにいる高級官僚から白昼堂々で行われる権力乱用行為

にまで広がり、不正を生み出し、国民の正義への信頼を深く侵食している。

これらの偉大な努力はすべて、善意から始まったにもかかわらず、最終的には共通の理由で行き詰まりに終わった。それらはすべて、神聖なる存在への信仰と普遍的な道徳的価値観を失った基盤の上に築かれていたからである。この歴史の体系的な失敗は、自明の真理を示している。古いシステムを繕うことは無益である。全く異なる哲学的基盤を再確立することから始まる、新しい道を見つける時が来たのだ。

これらのモデルはすべて、形は異なれど、共通の盲点を持っている。それらはすべて、「人間」のメカニズムによって「人間」の問題を解決しようと試みるが、人間が天と地との関係においてほんの小さな一部であることを忘れている。

B. 哲学的基盤：道徳的な共和国の心臓部

歴史上の各モデルの失敗を認識した後、解決策は単なる権力構造の変更からではなく、全く新しい哲学的基盤の確立から生まれなければならないことがわかる。この基盤こそが、道徳的な共和国のあらゆる思想と行動を形成する心臓部であり、オペレーティングシステムなのである。それは、腐敗した唯物論的な参照体系に取って代わる、一つの世界観と核となる価値体系に基づいて構築される。

1. 「天・地・人」の参照体系

この共和国は、人間を自然から切り離され、それを支配する生物としてではなく、天と地との調和のとれた謙虚な相互関係の中に位置づける。あらゆる路線、政策は、このレンズを通して照らし出されなければならない：

- **天に従う：**「天」とは単に青空のことではなく、目に見えずとも不変の宇宙の法則、すなわち「天理」である。天に従うとは、これらの法則、特に因果応報の法則に従って行動し、重大な政策決定においては常に謙虚に天意に寄り添うことを意味する。

- **地を養う：**「地」とは、人間が意のままに採掘するための無生物の資源ではない。地球、自然、山河、草木はすべて生命であり、尊重され、育まれるべき生きた実体である。目先の経済的利益のみを追求し、生活環境を破壊し、自然の流れに逆らう政策決定は、不道德な行為である。その典型的な例が、川全体の生命を断ち切る巨大な水力発電ダム建設である。それは洪水制御という短期的な利益をもたらすかもしれないが、長期的に支払わなければならない「果」は、生態系の枯渇、魚介類の消失、そして何万年にもわたって機能してきた秩序の破壊である。
- **人を安んずる：**「人」—人間—はあらゆる政策の中心であるが、それは無限の物質的欲望を満たすためではなく、道徳と魂の成長のための平和な環境を創造するためである。

2. 「道・徳・慧」の価値体系

上記の参照体系から、国家の価値の三つの柱が確立され、共和国の「DNA」としての役割を果たす：

- **道を根幹とする：**「道」とは道筋であり、天理が生活の中に具体化されたものである。この国家が指針とする道の基盤こそが、「真・善・忍」の原理である。国家のあらゆる路線、政策、行動は、この三つの柱の下で照らし出されなければならない：
 - **真：**絶対的な正直さと透明性を要求する。政策は、イデオロギーや政治的利益ではなく、真実と自然の法則に基づいて構築されなければならない。
 - **善：**あらゆる社会政策の指針である。システムの高邁な目標は、すべての人間の内に慈悲の心と呼び覚まし、育むことであり、コミュニティが互いに助け合い、支え合うことを奨励する。
 - **忍：**国家の長期的なビジョンと不動の決意を形成する。それは、単に建物を建てるのではなく、森を育てる忍耐のように、短期的な経済的利益の誘惑を乗り越え、持続可能な目標を追求するための忍耐を要求する。
- **徳を重んずる：**「徳」とは道德、品性、そして善良さである。もし「道」が基礎であるならば、

「徳」は建設の目標である。共和国の目的は物質的な富ではなく、民衆のための道徳と魂の豊かさを育むことである。

- **慧を知の指針とする：**「慧」とは「智慧」—深遠な洞察力と明晰さ、真理を認識し、「道」を理解する能力である。「道」を根幹とし、「徳」を目標とする国家は、「智慧」によって導かれ、照らされなければならない。したがって、指導者を選出するメカニズムは、国に奉仕するために最も優れた智慧を持つ人々を見つけ出すことを目指さなければならない。

C. 創造の原則：哲学の現実化

確立された哲学的基盤と価値体系から、我々は賢君治国と呼ばれる国家統治モデルを創造する。それは、権力と利益の上に道徳と知恵を置くシステムである。このモデルは、以下の基盤となる創造の原則を通じて現実化される：

1. 至上の目標：人生の道のための空間の保護

国家の存在の最高かつ唯一の目的は、すべての市民が自らの人生の道を歩むことができる、安全で自由な社会空間を創造し、保護することである。その中で、魂を洗い清めるための精神的な修煉の旅路を歩む権利は、最も神聖で不可侵の権利と見なされなければならない、国家のすべての活動は、この権利の保護を最優先としなければならない。

2. 所有権に関する原則：労働の成果と福德の不可侵性

国家は、個人が正当な労働、知恵、そして自らの福德を通じて得た物質的な成果が、因果応報の法則の働きの一部であることを認める。したがって、これらの成果に対する私有財産権は不可侵である。国家は、いかなる理由であれ、市民の合法的な財産を奪ったり再分配したりする権利を持たず、この原則に違反しないように、税制は最小限に抑えられなければならない。

3. 社会の区分に関する原則：国家と国民の責任の明確な分離

社会における権力と責任は、二つの明確な範囲に区分される。**国家**の範囲は、秩序と安全の保護者としての役割、基本的な法律の制定、そして公正な司法制度の維持に限定される。残りのすべての範囲—経済、教育、医療、文化、科学、社会保障—は、**国民**と社会組織の自由と責任に属する。国家は代行せず、干渉せず、ただ社会の自由な運営を保護するのみである。

4. 国家統治に関する原則：最小限と奉仕

国家の責任が徹底的に限定されているため、その形態もそれに対応しなければならない。この原則は、不可欠な核となる機能のみを含む、極めて簡素な国家機構を要求する。公務全体は、国民の生活に干渉したり統治したりするのではなく、自由で安全な生活環境を保護するために、与えられた責任を真摯に遂行するという精神で運営されなければならない。

5. 正義に関する原則：天理を尊ぶ法治

共和国は、いかなる個人の意志によっても統治されず、正義の原則によって統治される。正義の最高の源は、人間が作った法典からではなく、天理—すなわち、普遍的な道徳と宇宙の法則—から来る。人間が定めた法律は、

最小限に抑えられるべきであり、すべて天理の解釈に過ぎず、それに絶対的に従わなければならない。具体的には、明君を含め、いかなる個人や組織も、「真・善・忍」という最高の道德原則を踏みにじることは許されない。これが権力の絶対的な限界である。

6. 持続可能性に関する原則：知恵を自己調整メカニズムとする

システムの強さと持続可能性は、詳細で厳格な法典にあるのではない。なぜなら、いかなる法典も未来のすべての出来事を予見することはできないからだ。代わりに、その持続可能性は、卓越した知恵を持つ人々（明君と賢人評議会）を選出するメカニズムにある。彼らの知恵こそが、天理を解釈し、新しい問題を認識し、時代に合わせて国家の路線を調整し、システムが自己修復し適応する能力を持つのを助ける、生きたメカニズムなのである。

第四部：最高指導者の選出メカニズムに関する論考

あらゆる政治体制の魂は、その最高指導者をいかにして選出するかにある。誤ったメカニズムは、一人のデマゴグや暴君を権力の頂点に押し上げ、国民全体を大惨事に陥れる可能性がある。人類の歴史は、正しい選出メカニズムを求める、終わりのない努力と悲劇的な失敗の叙事詩なのである。

もし「道」が基礎であり、「徳」が建設の目標であるならば、「智慧」こそが道を照らす松明である。しかし、ここでの智慧（慧）とは、単なる知能（智）や博識ではない。それは、道と徳を持つ魂から生まれる洞察力であり、物事の本質を見抜き、天理を認識し、損得勘

定ではなく慈悲に基づいて決断を下す能力である。したがって、以下の選出メカニズム全体は、ただ一つの目的のために設計されている。それは、最も輝く松明、すなわち国民全体を導くに足る智慧と徳を兼ね備えた一人の人間を見つけ出すことである。

そのためには、まず過去の教訓をより深く考察しなければならない。

A. 歴史における選出モデルの分析

- **血統による継承（君主制）**：これは最も古く、また最も永続的なメカニズムであり、安定的で明確な権力移譲を生み出す。前述の通り、この君主と臣下のモデルは元来、天国の秩序を模倣したものであり、「父子相伝」もかつては天の采配の一部であった。しかし、現代という時代背景において、神が一步退き、この俗世の人間に自らの運命に対する自己決定権をより多く与えたと仮定するならば、我々はこのメカニズムを再評価する必要がある。世俗的な観点から見れば、それは完全に「血統という名の籤引き」に依存している。

才能と徳は遺伝しない。一人の明君の後に暗君が続くこともあり、その場合、民衆は自らの運命を変えるすべを持たない。

- **神権（宗教権力の並立）**：多くの文明において、王の世俗的な権力は聖職者階級の権力に深く影響され、時には支配されることさえあった。ある場所では、王が同時に大祭司であることで、これら二つの権力が一つに統合された。また別の場所では、社会の二本の柱として並立した。その純粋な形態においては、このモデルは社会を強固な道徳的基盤の上に置いた。なぜなら、すべての法律は神の教えに従わなければならなかったからである。しかし、歴史はまた、聖職者階級が墮落した時、彼らが神聖な名を権力と世俗的利益のために悪用し、宗教を思想統制と異教徒弾圧の道具に変えうるという、苦い教訓も示している。
- **普通選挙（民主制）**：このメカニズムは、選択の権利を民衆に返し、指導者に正当性を与えるために生まれた。理論上は非常に優れている。しかし、実際の運用においては、私自身が目撃したように、それは深く墮落してしまった。なぜな

ら、社会の道徳的基盤が揺らいだ時、大衆の票はもはや賢明さではなく、目先の物質的利益とデマゴグの約束に向けられるからである。選挙はもはや有能で徳のある人物を探すプロセスではなく、広告、資金集め、弁論術の競争と化している。それは、長期的な視野を持ち、困難な決断を下す勇気のある人物ではなく、短期的に大衆を喜ばせることに長けた人物を選出するのである。

- **内部指名（全体主義体制）**：このモデルは、機構内で長年の経験を持ち、体制に忠実な人物を選出することができる。しかし、それは完全に不透明な「ブラックボックス」のプロセスである。それは熾烈な派閥争いを生み出し、国に奉仕する才能のある人物ではなく、政治闘争と競争相手の排除に長けた人物を選出する。これは、暴君と内側から腐敗した政権を生み出すメカニズムである。
- **転生（一部の精神的伝統）**：その最も純粋な形態において、これはあらゆる世俗的な野心を超越し、精神的な意味での継承を求めるメカニズムである。しかし、それには固有の限界がある。第

一に、それは国民全体が深く共通した形而上学的な信仰を持つ、非常に特殊な社会でのみ機能するものであり、現代において広範囲に展開することはほぼ不可能である。第二に、転生者を特定するプロセス自体が政治化され、悪用される可能性がある。そして最も重要なことに、真に高貴な魂は、常に俗世の権力に執着して転生を繰り返し地位を維持するのではなく、より高い境地を目指して修煉に向かうものである。

B. 明君選出モデルの提案：エリートの統合

歴史における各モデルの失敗を考察した後、正しい選出メカニズムは、エリート層の賢明さ、民衆の信任、そして生涯にわたる実証を組み合わせた、自然な選別の流れ

でなければならないことがわかる。それは機械的なプロセスではなく、真に徳と智慧を兼ね備えた一人の人間を見つけ出すための努力なのである。

したがって、明君の地位のための候補者を評価するための**核心的かつ唯一の基準**は、これらの二つの資質であり、それは数回の演説や短期的な選挙運動を通じてではなく、生涯の道のり全体を通じて示されるものである。

ここで言う「賢明さ」とは、過去の政策決定の質、公表された文書や業績の深さ、そして複雑な問題を解決する能力といった具体的な証拠を通じて評価されるものであり、表面的なスキルによるものではないことを明確にしておく必要がある。弁論術や交渉術は必須の基準ではない。このシステムは、魅惑的な雄弁家ではなく、明晰な頭脳と慈悲深い心を探し出すために設計されている。したがって、たとえ話すことができないといった身体的な欠陥を持つ人物であっても、その智慧が卓越しており、非凡な著作や行動を通じて示されているならば、その者は依然として完全にふさわしい候補者なのである。

これを実現するために、以下の基本原則に基づいた明君の選出と継承のメカニズムが確立される。

1. 開かれた多様な推薦源：

賢才の探索は、限られた源から始めることはできない。賢人評議會は、専門家コミュニティから、公衆の承認から、そして評議會メンバー自身の探索からなど、社会のあらゆる片隅からの推薦を受け付ける中心的な窓口となる。この初期の収集と選別の段階は、

少なくとも 5 年前に静かに開始され、予備候補者の数に制限はない。

2. 道徳的資質の審査と最終候補者リストの確定：

この審査は、賢人評議會の内部的かつ核心的な任務である。彼らは、候補者の生涯の道のり全体を、包括的かつ徹底的に検討する。「人、十全なるは無し」という精神を認め、心から改められた過去の過ちは、洗い流せない汚点としてではなく、道徳的成長の証として見なされる。

長期的な選別段階の後、公募段階に進む候補者リストを確定するために、賢人評議会（3 分の 2 の重み付け）と現職の明君（3 分の 1 の重み付け）による投票が行われる。

- **柔軟な投票メカニズム：** 各投票者は、ふさわしいと考える一人または複数の候補者を支持する権利を持つが、10 人を超えてはならない。どの候補者も基準を満たしていないと感じる場合は、誰にも投票しない（白票を投じる）権利も持つ。
- **総支持票の 50%以上を獲得した候補者**が、公式に最終公募段階に進出する。
- 最初の信任投票の結果が出た後、明君と賢人評議会は共同で議論し、国民による審査の集中度と質を確保するために、約 5 人から 7 人程度の理想的な最終候補者リストを確定する。

いかなる場合でも、最終候補者の数は 3 人以上 10 人以下とする。信任の閾値を超える候補者が多すぎる場合、明君と賢人評議会は、真に傑出した人物を選び出すために検討する責任を負う。

リストが確定した後、**選挙の約 1 年前に**、評議会は各候補者と個別に面会し、招待して彼らの同意を確認する。

3. 多層的な信任、民衆のみに依存せず：

選挙日の少なくとも 6 ヶ月前に、最終候補者リスト（3 人から 10 人）が広く公表される。これは、

多層的な信任のプロセスが実施される段階であり、信任は**四つの主要な構成グループ**からの支持の総和である。

- 現職の明君
- 賢人評議会
- 州レベルの指導者と大規模組織
- 全国民

候補者は、これらのグループから比較的均等な支持を得て初めて当選することができる。それにより、選ばれた人物が知恵と実践能力を兼ね備え、かつ民衆の支持を得ていることが期待される。客観性を確保し、世論誘導を避けるため、現職の明君と賢人評議会の全メンバー

は、この段階でいかなる候補者への支持を公に表明することも厳しく禁じられる。彼らは、票を通じて静かに選択権を行使するが、他の有権者グループが独立して決定を下せるよう、個人の威信を使って運動することは許されない。

（各グループの投票メカニズムと重み付けの計算方法は、この心の書簡の末尾の付注で詳述される）。

4. 安定した継承と柔軟な任期：

長期の任期は安定のために必要である。最大任期は 25 年であるが、定期的な信任投票が行われる。さらに重要なことに、明君の初期の任期は、当選時の信任度に基づいて柔軟に調整することができる。これにより、指導者は自らのふさわしさを証明するために、絶えず努力することを強いられる。

* * *

第五部：政治・社会構造

優れた哲学も、それを実現するための強固な制度構造がなければ、夢のままである。ただし、この構造は哲学に奉仕するものでなければならず、その逆であってはならない。したがって、以下の制度は、最小限主義、責任の明確な区分、そして党派的な権力ではなく道徳に基づく監視メカニズムを基盤として設計されている。

A. 明君（最高指導者）：

「船長」としての役割と「道徳的な長老」としての地位：

明君は事務の管理者ではなく、船長である。彼の仕事は船中を走り回って一つ一つのネジを締めることではな

く、指揮台に立って海図を研究し、星々を観察し、時流を読むことである。彼の役割は、国家という船全体にとって、決定的な瞬間に「舵を切る」決断を下すことである。

民衆の心の中での彼の地位もまた、非常に特別である。彼は崇拜されるべき救世主でもなく、恐れられるべき封建君主でもないが、騒がしい選挙運動を通じて選出される政治家たちのように「ありふれた存在」では決してない。彼は道徳的な長老であり、民衆が権力のためではなく、その賢明さを求めて訪れる人物なのである。

その風格は、彼の仕事ぶりやコミュニケーションの取り方にも表れている。ある問題を理解する必要があるとき、彼は形式ばった華やかな公式訪問の代わりに、真実に最も誠実に近づくために、予告なしの静かな視察を行うことがある。重大なメッセージを伝える必要があるとき、彼はメディアに絶えず登場するのではなく、国民全体に深い分析を記した文章を送ることを選ぶ。このコミュニケーションの頻度も非常に稀であり、年に 1、2 回かそれ以下かもしれない。それは、一つ一つの言葉が重みを持ち、深い思索を促すためであり、名声を高めるためではない。

権限と限界：

明君は最高の行政権を保持し、国家のすべての通常の政策と法律に対する最終決定者である（国会のような立法機関の代わりとなる）。理論上、彼は行政システム全体のいかなる役職も任命および罷免する権限を持つ。

実際には、明君は最も重要な指導者の選出と任命に集中する。すなわち、首相、各大臣、各州知事、そして各諮問評議会の長である。

賢人評議会に対する明君の権力は限定されている。彼は賢人評議会のメンバーを任意に任命または罷免する権限を持たず、評議会の独立性を確保するために、このプロセスに参加するための非常に限られた権限しか持たない。（この相互作用の詳細なメカニズムは、賢人評議会の選挙と監督に関するセクションで説明される）。

明君の権力には二つの絶対的な限界がある。第一に、司法分野において、彼は誰かを裁いたり有罪判決を下したりする権限を持たない。その権限は独立した裁判所システムに属する。

第二に、建国以来存在する憲法に関して、明君は一方的に変更する権限を持たない。憲法のいかなる改正も、賢人評議会との共同投票における過半数の同意を得なければならない。その際の重み付けは、明君が 3 分の 1、残りの 3 分の 2 が賢人評議会に属する（したがって、賢人評議会のメンバーの約 3 分の 1 の支持があれば可決される）。

副明君：

明君は、予備の副官として一人を指名する権利を持つ。明君が特定の人物を指名しない場合、首相がデフォルトでこの予備の副官の役割を兼任する。

明君が突然辞任または死亡した場合、副官は最大 3 年間、国を一時的に統治する。この期間中の彼の主な任務は、国家と組織の円滑な運営を確保し、新しい明君の公正な選出プロセスを監督することである。

権限に関して、暫定統治者は必要な行政権を保持するが、賢人評議会（以下、賢人会と呼ぶ）のメンバーの 50%以上の支持を得なければ、重要な政策（憲法改正や軍隊の使用など）を一方的に制定または改正することはできない。客観性を確保し、利益相反を避けるため、こ

の暫定的な地位にある者は、その直後の明君選出選挙に立候補することはできない。

罷免と監督のメカニズム：

大きな権力には責任が伴わなければならない。明君は個人的な理由で自主的に辞任する権利を持つ。その場合、予備の副官が一時的に指導者の役割を引き受ける。

明君は、以下の場合に罷免されることがある：

ケース 1：緊急不信任（刑事犯罪／重大な道徳的違反による）

- **理由：** 明君が刑事犯罪または国家の基本原則に反する重大な道徳的違反を犯したと告発された場合。
- **発動メカニズム：**
 1. 事件は、まず最高裁判所によって受理され、審理されなければならない。
 2. 最高裁判所が明君が「有罪」であるとの公式判決を下した後初めて、賢人会は会議を開き、投票を行う根拠を持つ。

3. 賢人会のメンバーの過半数が裁判所の判決を受け入れる票を投じた場合、明君は職を辞することを強制される。

- **頻度**： 事件と裁判所の判決があり次第、任期中いつでも発生しうる。
- **目的**： 犯罪に対する最高の責任説明を確保し、根拠のない告発に基づく政治的目的のための罷免プロセスの乱用を防ぐ。

ケース 2：定期的不信任（義務的評価）

- **理由**： 長期在任後の明君の統治効率と全体的な信任度を評価するため。
- **発動メカニズム**： 憲法に定められたスケジュールに従って自動的に行われる。
- **頻度**： 任期中に 2 回、10 年目と 20 年目の節目に行われる。

ケース 3：臨時不信任（賢人会による発議）

- **理由**： 賢人会が明君の政策路線または統治能力に深刻な懸念を抱いているが、ケース 1 を発動するほどの重大な道徳的違反には至らない場合。

- **発動メカニズム**：賢人会の一定割合のメンバーによる提案が必要である（例：最低 3 分の 1）。
- **頻度**：明君の全任期中に一度だけ使用することができる。
- **適用期間**：任期の 11 年目から 19 年目までの「機会の窓」内でのみ発動可能である。
- **目的**：定期的な節目を待つことなく、賢人会が必要に応じて介入できる、柔軟かつ強力な監督ツールとして機能する。

さらに、「デマゴギー」と個人崇拜の危険を避けるため、法律は国家が予算や権力を使って現職の明君のイメージを宣伝することを禁じている。具体的には、彼の肖像を通貨に印刷したり、公的機関に肖像画を掲げることが義務付けたりすることは許可されない。

B. 賢人評議会：道徳の灯台

必要性：

一人の明君が、いかに賢明であっても、国家の運命を永遠に保証することはできない。まさにそのために、より永続性のある制度、すなわち賢人評議会が設立されなければならない。就任した賢人は皆、国家全体の利益を最優先に置き、自らを選出した集団の利益代表としてではなく、民族の魂の番人として奉仕しなければならない。

役割：

評議会は第二の権力機関ではなく、「導きの星座」であり、国家の道德の灯台である。彼らの役割は統治することではなく、導くことであり、それは以下の三つの主要な使命を通じて示される：

- **賢明な継承の選出と保証：** これは評議会の最も根本的かつ重要な責任である。彼らは、後継の明君を探し出し、審査し、選出するプロセスを発議し、主導する者たちであり、あらゆる制度の悲劇であった「盛衰」の循環を断ち切ることを保証する。

- **明君への助言と監督：** 評議会の第二の役割は、指導者のための鑑となることである。彼らには「明君に助言し、監督し、すべての主要な政策決定が根本的な道德原理に適合していることを保証する」という任務がある。
- **道德による社会の指導（強制せず）：** 最後に、賢人評議会は国家全体の良心と知恵の象徴である。彼らの影響力は強制的な権力からではなく、民衆が彼らの品性と賢明さに対して抱く自然な尊敬から生まれる。

構造、継承、および内部運営：

賢人評議会は 25 人の正会員と 25 人の予備会員で構成される。予備会員は評議会のすべての活動に参加し、意見を述べる権利を持つが、正会員のようにデフォルトの議決権は持たない点異なる。

内部構造に関して、賢人評議会内の 25 人の正会員全員の地位は完全に平等である。評議会は、合意がある場合に集団全体の共通の報道官を一人指名することができるが、この人物は指導的役割を担わず、他のメンバーより高い権限を持つことはない。同時に、各メンバーは

個人として、または特定の議題について同じ見解を持つ評議会内の他のメンバーの小グループを代表して、自由に発言する完全な権利を保持する。

各賢人の任期は 25 年で、再選はされず、30 歳から 85 歳までの年齢で在職する。主な継承メカニズムは「古い竹が新しい筍に道を譲る」という段階的な原則に基づいて運営される。すなわち、5 年ごとに選挙が行われ、最も在職期間の長い 5 人のメンバーが交代する。同じ在職期間のメンバーが 5 人以上いる場合は、年長者が先に退任する。評議会の力はその集合的な知恵にある。たとえいくつかの「灯台」が一時的に光を失うことがあっても、大多数は依然として明るく輝き続け、明君と国民全体の道を照らすのに十分であろう。

突発的な欠員の処理：

正会員が任務を継続できなくなった場合（辞任、罷免、または死亡による）、残りの 24 人の正会員が投票を行い、25 人の予備会員のリストから後任者を選出する。

メンバーの監督と罷免：

評議会の清廉性を確保するため、メンバーが重大な道德的違反を犯したと見なされた場合には、一貫した罷免メカニズムが適用される。 罷免投票は、以下の二つの方法のいずれかによって開始することができる：

- **明君による提案（自身の 25 年間の任期中に最大 5 回まで）。**
- **評議会のメンバー自身による提案、その場合は最低 3 人のメンバーの署名がある文書が必要。**

提案の方法にかかわらず、最終的な決定は投票によって行われ、票の重み付けは、明君が 3 分の 1、残りの 24 人の評議会メンバーが 3 分の 2 を占める。

* * *

第六部：詳細な運用メカニズム

優れた哲学は、それを実現するための簡素で効率的、かつ道徳的な運用構造を通じて表現されなければならない。ここは、我々が複雑なプロセスを描き出す場所ではなく、社会が最も調和の取れた方法で自律的に機能するのを助ける、核となる原則を概説する場所である。

A. 最小限の国家機構と基本法

立法諮問評議会と公衆協議：

現在の国会のような代議機関は、しばしば肥大化し、利益団体に影響されやすい。その代わりに、このモデルは立法諮問評議会を設立する。

立法諮問評議会：

それは簡素で、信頼できる専門機関から推薦され、賢人評議会によって道徳性を審査された一流の専門家で構成される。彼らの役割は、明君に助言するための法案を

研究、起草、討議することであり、法律を可決する投票権はない。すべての法案は、起草後、明君に決定を仰ぐ前に、全国民向けのモバイルアプリケーションで広く公表され、意見調査が行われなければならない。

1. 構造と待遇：

- 評議会もまた、25 人の正会員と 25 人の予備会員で構成される。
- 待遇は同様の枠組みで適用される。すなわち、一流の法律専門家を引きつけるのに十分な、高額で柔軟な給与（例：平均収入の 8 倍から 15 倍の範囲）である。

2. 選出メカニズム：

メンバーは三つの源から選出される：

- 全国の信頼できる専門的な法律機関（全国弁護士会、一流の法学部、裁判官評議会など）によって推薦・選出される 15 人のメンバー。
- 明君によって推薦される 5 人のメンバー。
- 国民によって直接選出される 5 人のメンバー。

3. 継承メカニズム：

「古い竹が新しい筍に道を譲る」という段階的な継承の原則も適用される：

- 5 年ごとに、最も在職期間の長い 5 人のメンバーが交代する。
- 交代する 5 人の中で、構造は維持される。すなわち、明君が 1 人を指名し、国民が 1 人を選出し、残りの 3 人は法律機関が選出する。

最小限の憲法と原則法：

このモデルの憲法は、その核心まで最小限に抑えられ、ほとんどすべての国民が学生時代から暗記できるほど簡潔でなければならない。憲法が一人一人の心の中にあるとき、それは自己の道徳的な羅針盤となる。同様に、法体系は詳細な規則ではなく、包括的な原則に基づいて構築される。

司法の基本原則：

独立した司法制度は、以下の核となる道德原則に基づいて運営される。

- **刑罰（国家に対して）と賠償（被害者に対して）の明確な区別：**

- 刑事事件や公的な違反（交通法規など）について、国家に支払われるすべての罰金は廃止される。金銭は、刑罰を軽減したり代替したりするために用いることはできない。代わりに、刑罰は教育的、矯正的、そして公益労働の性質を持ち、富裕層と貧困層との間の絶対的な公平性を保証する。
- しかし、犯罪者は被害者に対して、物質的および精神的な損害のすべてを賠償する義務を依然として負う。この賠償は並行する民事責任であり、その履行は公的な刑罰を軽減する理由とは見なされない。
- 純粋な民事事件については、裁判所は和解を優先し、当事者は合意に基づいて互いの義務を金銭で解決することができる。

- **裁判所の判決の尊重：**

- 重罪については、裁判所の判決は最終的なものであり、他の権力部門からの干渉なく、厳格に執行されなければならない。

- **監督と傾聴を伴う恩赦メカニズム：**

明君は、恩赦を含め、司法に干渉する権限を持たない。厳格かつ人道的な恩赦プロセスが 3 段階で適用される。

- **ステップ 1（現場からの提案）：** 恩赦の提案は、受刑者の更生プロセスと真の悔悛に基づいて、受刑者を直接管理する者、すなわち現場レベルから発せられなければならない。
- **ステップ 2（審査と傾聴）：** この提案は、その後、高等裁判所によって独立して再審査されなければならない。このプロセスにおいて、裁判所は被害者またはその家族から

公式な意見を聴取することが義務付けられる。 この意見は重要な参考要素であるが、

拒否権を持つものではない。 裁判所は、受刑者の更生の証拠、被害者の苦痛、そして社会全体の安全とのバランスに基づいて最終決定を下す。

- 。 **ステップ 3（最終承認）：** すべての要素を考慮した上で裁判所の承認が得られた場合、書類は司法機関の長（法務大臣に相当）に提出され、最終決定が署名される。

行政構造：

行政構造に関して、国家は州（または県）に分割される。州の数は固定されず、各国の特性に依存するが、効率を確保し、肥大化を避けるために、合理的に制限される必要がある。例えば、13 から 18 の州という範囲の数は、機構を簡素に運営するのに役立つかもしれない。この分岐の原則は、下位のレベルにも一貫して適用される。すなわち、各州／県はさらに約 13～18 の郡／地区に分割され、以下、市町村、村落へと階層化され

る。この構造は、各レベルの指導者が効果的な「管理範囲」を持ち、機構が上から下まで緊密に連携し、円滑に機能するのを助けることを保証する。

B. 国家予算と経済

1. 予算運営の原則：

国家の自律性を確保し、未来の世代への負担を避けるため、国家予算は二つの黄金律に基づいて運営される。

- **絶対的な予算均衡：** 国家は、得られた歳入の範囲内でのみ支出を許可される。赤字支出は絶対に許可されない。例えば、総歳入が 100 億ドルであれば、総支出は 100 億ドルを超えてはならない。
- **公的債務の禁止：** 国家は、国内外のいかなる組織からも、いかなる形式、いかなる理由であれ、借入をすることを厳しく禁じられる。経済発展の

ための投資の負担と機会は、完全に民間部門に属する。彼らは自ら借り入れ、自ら投資し、自ら利益を享受する。

2. 規模による汚職リスクの最小化：

- 最も効果的な汚職防止メカニズムの一つは、国家予算の規模を徹底的に縮小することである。国家機構が管理する資金が少なければ少ないほど、汚職の機会と規模は自然と限定される。たとえ汚職による損失率が同じであっても、国家への絶対的な損害ははるかに小さくなる。100 億ドルの国庫から一部が失われる痛みは、1000 億ドルの国庫から同率が失われる痛みよりもはるかに小さい。

3. 予算削減と最小限の税制：

道徳的基盤が高く、犯罪が自然に減少し、膨張主義的な野心のない社会は、巨大な国防・安全保障機構を必要としない。公的予算は最小限に削減される。これにより、非常に単純な税制を維持することが可能になり、それは主に二つの種類からなる。

- **付加価値税（VAT）**：「多く消費する者が多く貢献する」という公平の原則に基づく。
- **法人税**：合理的で安定した税率を持つ。

個人所得税のような、労働の成果を「奪う」性格を持つ税は廃止される。天理と因果応報の法則、そして個人の福分に基づけば、現在の個人所得税のような税を適用することは、「白昼堂々の合法的強盗」の一形態であると私は考える。

4. 国家は審判であり、選手ではない：

中央銀行は独立した機関として存在するが、その役割は非常に限定される。すなわち、責任ある通貨発行の管理と、高利貸しを防ぐための道徳的な一線としての「金利上限」の設定である。それ以外に、国家は市場に介入しない。大規模なインフラプロジェクトに関して、国家予算は利益を生むことのできない事業（堤防など）にのみ投資する。

利益を生む可能性のあるすべてのプロジェクト（橋、道路、空港、港など）は、外国人投資家を含め、完全に民間部門に開放される。

5. 予算プロセスと責任の分担：

年間の予算承認・執行プロセスは、国会の役割を完全に代替し、決断力と責任を確保するために簡素化される。

- **首相による提案：** 毎年、首相と政府は、次年度の包括的な予算計画を策定し、明君に提出する責任を負う。
- **明君による承認：** 明君は、主要な分野（国防、行政、予備基金など）への予算配分を承認する最高かつ最終的な権限を持つ。彼の決定は、計画が国家の長期的なビジョンと財政原則に適合しているかに基づく。
- **首相による執行：** 一般予算が明君によって承認された後、首相はその予算の範囲内で政府を運営するための指示、管理、支出に関する全権を持つ。これには、突発的に発生したプロジェクトへの資金提供を決定する権限も含まれる。

このメカニズムは責任を絶対的なものとする。すなわち、首相は支出の効率性について責任を負うが、明君は

その計画を承認する際の知恵と洞察力、そして首相を選んだことについて、最高の責任を負うのである。

* * *

C. 社会（教育、医療、社会保障、政党、科学など）

「国家不介入」の哲学：

国家は最良の教師でも医師でもない。その役割は、情熱を持った教育者や医療従事者自身に属する。したがって、国家はほとんどの社会活動に介入しない。

宗教：絶対的な自由、深い尊重

道徳的な共和国は、精神的な旅路が各々の魂にとって最も神聖な道であることを認める。国家の役割は、その旅路のための空間を保護することであり、それを管理したり検閲したりすることではない。したがって、宗教に関する政策は以下の原則に基づいて運営される。

1. 登録不要の信教と実践の自由：

- 国家は宗教を管理するいかなる機関も持たない。
「国家公認の宗教」という概念は存在しない。
- すべての個人および団体は、伝統的な宗教であれ、新しい修煉法門であれ、自らの信仰を実践し、広め、発展させる絶対的な自由を有する。
- 彼らは、その活動が社会の基本法に違反しない限り、国家に許可を求めたり活動を登録したりする必要はない。

2. 国家の支援：介入ではなく、助縁として：

- **精神的な支援：** 賢人評議会と明君は、宗教コミュニティが社会に貢献する優れた道徳的価値を認

め、称賛するための公式な声明を発表することができる。

- **物質的な支援（条件付き）**：国家は、合理的であると判断され、地域社会の合意がある場合に、宗教団体が信仰のための施設を建設するために土地を供与することを検討することができる。
- この基本的な支援を除き、国家はいかなる宗教に対しても、財政的または法的な優先権を一切与えない。

3. 個人の信仰と公務の役割の明確な区分：

- 明君、賢人評議会のメンバー、およびすべての公務員は、自らの信仰を持つ権利を有する。
- しかし、宗教活動に参加する際は、一個人の市民として参加しなければならない、国家の名義や特権を使用してはならない。
- 明君およびすべてのレベルの指導者は、自らの信仰と同じ信仰を他者に強要したり示唆したりするために権力を使用することが絶対に禁じられる。

4. 「天壇」：国家の精神的・道徳的象徴：

- すべての信仰の多様性を尊重しつつ、国家は特定の宗教に属さない共通の精神的な建造物を建設し、それを「天壇」と名付ける。
- **哲学と設計：**「天壇」の建築は、二つの要素のバランスを表現しなければならない。一方では、人類の真正な精神的伝統と信仰に対する深い敬意を反映し、他方では、国家が基盤とする普遍的かつ核心的な道徳的価値を強調し、定着させなければならない。設計全体は、民族の文化的アイデンティティを色濃く反映するものでなければならない。
- **独占的な機能と役割：**「天壇」は独占的な役割を持つ空間であり、国家の最も重要かつ神聖な儀式のためにのみ使用され、それは明君または賢人評議会が主宰する。絶対的な荘厳さを確保するため、個人、団体、宗教組織によるその他の活動は、ここで自由に行うことは許可されない。

* * *

文化と芸術：民族の魂の基盤

国家は経済的に豊かで、軍事的に強固であっても、その文化が退廃すれば、それは魂のない抜け殻に過ぎない。賢明な指導者の価値体系において、宗教は道德の根源であり、文化は魂を育む流れであり、教育はそれを伝承する道具である。したがって、文化芸術（詩歌、音楽、映画、絵画などを含む）は最高度に重視される分野である。しかし、真の芸術は布告から生まれることはできない。国家の役割は、美と善が自然に芽生える環境を創造することであり、自分の意のままにすべての枝葉を刈り込む庭師になることではない。

1. 国家は介入せず、ただ導くだけ：

- 「文化省」や検閲機関は一切存在しない。国家は創作内容について、資金提供も、管理も、指示も行わない。

- 芸術家は創作の絶対的な自由を有する。作品が社会に受け入れられるかどうかは、その作品自体の道徳的価値と深さにかかっている。

2. 道徳と神への敬意を基盤とする：

- 真の芸術とは、天上の美に対する人間の表現であり、善良な心への賛美であり、人間を真へと導くために偽りを暴くことである。
- 社会は、退廃的な芸術形態ではなく、人間の魂を高める能力のある作品を高く評価するように方向付けられる。

3. 賢人評議会は美意識の灯台：

- 国家の指導的役割は、賢人評議会を通じて、繊細に実行される。
- 賢人評議会が、真・善・忍の価値を深く表現した作品を公に称賛する時、それが最も貴重な指針となり、強制を必要とせずに、自然と善に向かう文化の流れを生み出す。

* * *

教育：

現在のように絶対的な権力を持つ「文部省」は存在しない。代わりに、教育諮問評議会が設立される。この評議会の役割は、明君に助言することではなく、学校、出版社、保護者、生徒を含む教育システム全体の一般的な指針を示す機関である。彼らは、業界全体の知識と道徳の灯台なのである。

- **構造と待遇：** 評議会は 25 人の正会員と 25 人の予備会員で構成され、国家から給与が支払われる。給与は、正会員については国民の平均所得の約 8 倍から 15 倍、予備会員については 5 倍から 10 倍に相当する。
- **選出メカニズム：** メンバーは三つの源から選出される。15 人は全国の学校が自ら推薦・選出し、5 人は明君が推薦し、残りの 5 人は国民が直接選

出する。つまり、5 年ごとの定期選挙で 5 人が交代し、そのうち 1 人を明君が指名し、1 人を国民が選び、残りの 3 人は学校が独自の方法で選出する。

- **活動原則：** この評議会のメンバーはプロの政治家ではない。彼らは社会における既存の仕事と役割（弁護士、CEO、科学者、修道士など）を維持し続ける。評議会での役割は非常勤の奉仕である。なぜなら、国家が必要としているのは彼らの徳と賢明さであり、彼らの全時間ではないからだ。立法諮問評議会と同様に、メンバーは国籍ではなく、賢明さと経験に基づいて選ばれる外国人であってもよい（ただし、この役職を受け入れることに同意した場合、彼らは公式な市民としての資格も得ることになる）。

この評議会は、学校の具体的な活動に干渉しない。国定教科書や統一試験は存在しない。カリキュラムと教授法の自治権は、完全に私立学校に与えられる。

- 国定教科書や統一試験は存在しない。カリキュラムと教授法の自治権は、完全に学校に与えられる。

教育のセーフティネット： どの子供も教育を受けられないことがないように、国家は、特に困難な状況にある家庭のために、初等普通教育レベルで最小限の公立学校制度を維持する。

- **運営機関：** このシステムは、簡素な「公教育運営局」によって管理され、行政面（予算配分、人事調整、施設）のみを担当し、教育専門分野に干渉する権限は持たない。
- **教員資源：** 教員チームは主に「国家奉仕」を履行している若者で構成される。質を確保するため、選考はプログラムの最も優秀な 10%のグループを優先する。これにより、公立学校での教育は、国の若きエリート層にとって崇高な奉仕の使命となる。

もちろん、これらの公立学校は私立学校よりも質が劣る可能性があり、社会からある程度の偏見で見られるかもしれない。しかし、因果応報の法則によれば、それは各人の福分である。国家が慈悲の心から、すべての子供が学校に通い、基本的な知識を無料で習得できることを保

証することは、すでに一つの恩恵である。困難を乗り越えて自らの運命を変える責任は、依然として個人の努力にかかっている。

* * *

科学技術：民間の原動力であり、国家の任務ではない

道徳的な共和国において、科学技術の進歩は、社会の創造性と需要の自然な結果と見なされ、国家が予算を投じて追求すべき戦略的目標ではない。

- **研究開発活動の完全な社会化：** 国家は、いかなる研究所や工場にも投資、所有、運営を行わない。防衛産業を含む、すべての研究開発活動とハイテク生産は、民間部門に属する。防衛目的で必要な場合、政府は限られた数量の武器を民間供給業者から調達する。

- **科学管理機構の不在**：非介入を徹底するため、国家は「科学技術省」を持たない。国家は、特許の審査や付与の役割を持たない。この責任は、市民社会と民間部門が自ら設立・運営する独立した専門機関に属する。国家は、これらの信頼できる機関によって付与された特許を登録し、法的に承認するための最小限の行政機関のみを維持し、市民の知的財産権が裁判所で保護されることを保証する。

* * *

団体と政党：尊重される声、制限される権力

現代の民主主義は、党への忠誠がしばしば国家の利益よりも優先される党派間の争いによって、深く傷つけられてきた。この悪循環を断ち切るため、道徳的な共和国

は、**声を権力から切り離す**という核となる原則に基づいた、全く新しい政治社会活動のモデルを確立する。

1. 結社の自由と絶対的な中立性：

- すべての市民は、団体、社会組織、または政党を、国家に**登録したり許可を求めたりすることなく**、設立する絶対的な自由を有する。
- 政府は**絶対的な中立**の態度を保つ。特定の支持も反対も表明しない。これらの組織のすべての活動（運営費を含む）は、彼ら自身の責任である。

2. 尊重される声、無効化される権力：これは、政党が国家を支配できないようにするための、最も革命的な原則である。

- **発言権：**政党は思想のフォーラムとして活動することが許される。彼らは綱領を提示し、セミナーや集会を組織し、政府の政策に対して公に批判や反論を述べることができる。
- **無効化される権力：**しかし、政党は国家の選挙や任命プロセスにおいて**いかなる公式な役割も持たない**。彼らは、明君、賢人評議会のメンバー、ま

たは大臣の職といった、権力の中核をなす地位に
**代表を派遣したり、候補者を推薦したりする権利
を持たない。**

- **目的：** この原則は、国家の指導者が政党の後ろ盾ではなく、個人の才能と徳に基づいて選ばれることを保証する。それは、政党を「選挙マシン」から、権力ではなく知恵によって社会に貢献する「シンクタンク」へと変える。

3. 党员資格と公務責任の分離：

- 明君を含め、指導者はある政党のメンバーであることができる。これは彼らの個人の自由である。
- しかし、公務を遂行する際には、彼らは国家に奉仕する唯一の立場として行動し、全国民に対して責任を負わなければならない、**自らの政党の名において、またはその利益のために行動してはならない。** 国家権力を用いて一政党の議題を推進することは、絶対に禁じられる。

このモデルにより、社会のエネルギーは無益な党派争いに消耗されることはない。代わりに、それは賢明さと個

人の責任に基づいた政治を構築するために用いられるだろう。

* * *

医療：天理の範囲内での善良さ

聖人たちの視点によれば、偶然に起こることは何もない。人の病気や災難は、単に身体の不調ではなく、しばしばその魂が苦しみを通じて**業力を消滅させる**機会を得るための、**神々の采配**の一部である。無限の法力を持つ仏でさえ、人類のすべての病を気まぐれに癒すことはない。なぜなら、そうすることは因果応報の法則を破ることになるからだ。

したがって、天理に従う国家の役割は、人間の世界の力を用いて**その采配を横から断ち切る**ことではない。医療政策は、したがって、善良さに基づいて構築されなければならないが、それは謙虚さと知恵を伴う善良さでなければならない。

包括的な福祉制度の代わりに、国家は最後の人間的なジェスチャーとして、「医療のセーフティネット」のみを設立し、以下の原則に基づいて運営する。

- **対象者：** 孤独で、財産がなく、地域社会によって**完全に労働能力がない**と確認され、経済的に自立できない個人に限定される。
- **運営方法：** 簡素な「人道医療運営局」が、資格のある人々の治療費を民間の医療施設で支払う。
- **二重の制限（頻度と費用）：** この厳格な二重の制限が必要なのは、人間の世界の国家が「人道」の名の下に絶えず介入し、不注意にも人が業を返す機会を奪うことができないからである。この制限こそが、道徳的な一線である。
 - **頻度について：** 国家は、生涯を通じて **3 回**の入院または重病の治療の費用を最大限支援する。
 - **費用について：** これら 3 回の支援の累積総費用は、国民の**平均年収 1 年分**に相当する生涯予算を**超えないものとする**。

この制限は、国家がすべての善良さをもってその義務を果たし、その後、**謙虚に頭を下げ、その人の福分と業報に対する天上の采配に、自らの分を超えて深く干渉することを敢えてしないことを示している。**

* * *

公務改革：エリートの奉仕、最高の責任

「安住と利得」の思想と汚職を完全に排除するため、公務員制度は、**エリート**のチームを構築することを目標に再構築される。彼らは**相応の待遇を受け、最高レベルの責任を負う**。このモデルは、以下の基本原則に基づいて構築される。

1. 「最大限のデジタル化」と公共サービスの社会化の原則：

- 簡素な国家機構の基盤は、**公共サービスの提供方法を根本的に変革することである。**

- 行政サービスの大部分は、単一の国家サービスポータルを通じて、完全にオンラインで実施される。
- 国家の核となる機能に属さないサービスは、**完全に民間部門に委譲される**。
- **結果：** この原則により、公務員機構は**極めて簡素**になり、政策立案、監督、およびコアシステムの運用を専門とする小さなチームだけが残る。

2. 汚職を根絶するための相応の待遇：

- 機構が簡素化されたため、国家は人材に投資するための十分な資源を持つ。公務員の給与は、市場平均より約 30% 高い、**高く競争力のある水準**に設定される。
- **目的：** 高い待遇は、**最も優れた人材を引きつけ、汚職の口実を完全に排除することを目指す**。

3. 採用メカニズム：権限委譲と責任：

- 中央政府は、能力と道德に関する核となる原則を盛り込んだ「共通採用フレームワーク」のみを発行する。
- その枠組みの中で、各機関の長は、自らの部署に最も適した人材を見つけるために、独自の採用プロセスを設計する**完全な自治権**を持つ。

4. 社会保障の平等、年金特権の廃止：

- 社会の他のすべての市民と同様に、**公務員は国家が提供する独自の年金制度を持たない。**
- 全国民に単一の社会保障原則を適用することで、「安全な椅子」という心理を完全に排除し、誰もが自らの老後を計画する上で同等の責任を持つことを保証する。

* * *

汚職を根絶するためのシステム設計

高給でエリートの公務員制度は、**汚職を未然に防ぐ**ために設計されたシステムと両立しなければならない。このモデルは、事後の処罰だけに重点を置くのではなく、不正行為を行う**動機**と**機会**の両方を排除することに集中する。

1. 汚職の動機の撲滅：

- **相応の待遇：**市場より 30% 高い給与は、「貧困による汚職」という口実を排除する。
- **成果に連動した収入：**業績と市民の満足度に基づくボーナスを適用し、公務員が公益のために働くことを奨励する。

2. 汚職の機会の最大限の縮小：

- **大規模な決定に対する「匿名メカニズム」の適用：**大規模プロジェクトにおける癒着を防ぐため、大学の試験採点と同様の、匿名の審査プロセスが適用される。請負業者と審査員の双方が互いの身元を知らず、最終決定は客観的な採点システムに基づいて行われる。

- 「オンライン優先、匿名処理」の原則に基づく公共サービスの運営：
 - **優先チャネル（オンライン）**：サービスの大部分はオンラインで実施される。システムは、**ランダムかつ匿名**で公務員に案件を自動的に割り当てる。
 - **サポートチャネル（オフライン二層式）**：特殊なケースでは、市民は民間の公共サービス会社に行く。これらの会社は、案件を受け付けてデジタル化するだけであり、その後、案件は同様に国家のランダムかつ匿名の処理システムに投入される。
 - **結果**：案件の提出方法にかかわらず、需要者と決定権者との間の直接的な関係は**完全に断ち切られる**。
- **義務的なローテーションと任期制限**：「利益ネットワーク」の形成を打破するため、いかなる公務員も決定権を持つ役職に **5～7 年**を超えて在職することはできない。

3. プライバシーの尊重と責任の重視：

- 資産や贈答品の義務的な申告制度は完全に廃止される。この決定は、「人物を慎重に選び、一度用いたら信頼せよ」という核となる原則に基づいている。
- 優れた設計のシステムは、公務員の尊厳を傷つける、疑念に満ちた措置を必要としない。彼らが個人の能力から合法的な追加収入を得ることは、尊重されるべきことである。

4. 意図的な裏切り行為に対する最終的な刑罰：

- **適用範囲：** この刑罰は、**大規模な公金横領や、公共事業の質を低下させるための請負業者との癒着**など、意図的な裏切りを示す最も重大な犯罪にのみ適用される。
- **犯罪の性質：** これは「国家の厚遇と信頼に対する意図的な裏切り」の罪と見なされる。
- **刑罰：** **全財産の没収**と、いかなる公職にも就くことの**永久的な禁止**であり、この罪に対する恩赦の機会はない。

5. 称号と業績主義の弊害

清廉な公務員制度と実質本位の社会を築くため、国家は公式な称号、賞、勲章を管理または授与するメカニズムを設けない。この原則は、「業績主義の弊害」と、政府の承認を得るための競争から生じる否定的な行動を、最初から防ぐ。清廉な公務員制度において、一人の公務員にとって唯一かつ最も高貴な評価は、市民の満足度、相応の待遇、そして奉仕することの誇りである。同時に、専門分野における賞の審査と授与は、市民社会の自由に属する。専門家協会、文化・科学団体などは、独自の基準に従って優れた個人や業績を創設し、称賛する完全な自由を有する。国家は絶対的な中立の態度を保ち、これらの活動に干渉しない。

* * *

社会保障：責任と孝行の回復

道徳的な共和国の最も根本的かつ革命的な政策の一つは、国家が管理する**義務的な年金および社会保険制度を完全に廃止すること**である。この政策は財政的な理由からではなく、道徳と天理に関する深い理解から生じる。現代の年金制度は、当初の善意にもかかわらず、不注意にも社会の魂に三つの深い傷を負わせた。

- **孝行の侵食：**それは、家族内の神聖な絆と自然な責任を破壊した。匿名の「年金基金」を創設することで、国家は不注意にも子供たちから、親を扶養することを通じて感謝の気持ちを表す機会と義務を奪った。
- **不道徳な負担の創出：**それは、後の世代に、彼らを作り出したわけではない借金を負わせ、彼ら自身が恩恵を受けられないかもしれない制度のために支払うことを強いる。
- **「働き、享受する」原則への逆行：**それは、「多く働けば多く得、少なく働けば少なく得、働かなければ何も得ない」という因果応報の基本的な原則に違反する。個人の努力と受け取る成果を切り離すことで、それは不注意にも**依存、怠惰の心理を育み、自立心を侵食する**。

国家という機械に委ねるのではなく、このモデルは、何千年もの間、道徳的な社会の基盤であった、**三つの自然で持続可能な社会保障の柱**を回復する。

- **第一の柱：個人の責任（自立の基盤）**：すべての成人は、自らの将来を計画し、貯蓄する基本的な責任を持つ。国家は、二つの主要な自立形態を奨励するために、低い税率の安定した経済環境を創造する。
 - **個人の貯蓄と投資**：国民は自由に自らの資産を蓄積する。
 - **自主的な退職計画**：誰もが、積極的に効率的に老後を確保するために、年金保険制度や民間投資ファンドに自由に参加することができる。
- **第二の柱：家族の責任（社会保障の心臓部）**：最も強固で高貴な社会保障の柱は、家族である。子供には、老いた親を扶養し、世話をする**自然な道徳的義務**がある。これは物質的な責任だけでなく、感謝の気持ちの継続であり、一族の中で福德が受け継がれていく方法でもある。

- **第三の柱：コミュニティの善良さと支え合い（自主的なセーフティネット）**：不運な人々（家族や子供がいない、または災難に見舞われた人々）にとって、彼らの社会保障ネットワークは、コミュニティの**善良さと支え合い**から来る。すなわち、相互扶助会、慈善団体、宗教団体、そして隣人である。

国民が自らを世話し、子供が親に孝行し、コミュニティが互いに支え合う社会は、財政的に持続可能であるだけでなく、責任を国家に委ねる社会よりも、道徳的にはるかに高潔であろう。

* * *

D. 国家奉仕：奉仕は共通の責任

伝統的な兵役モデルの代わりに、国家は 18 歳から 30 歳までのすべての若者男女を対象とした「国家奉仕」制度を設立する。主に二つの奉仕形態がある。

1. 一般形態：

これはデフォルトの選択肢で、服務期間は 6 ヶ月から 1 年の間で柔軟に設定される。市民は自ら期間を登録し、行政支援、環境保護から軍隊や警察の基本的な役割まで、多様な仕事を選択することができる。家から離れて働く者には、国家が食住を提供する。その他の者には、新卒学生の平均給与の 70%に相当する基本手当が支給される。

2. 代替形態（特別な才能を持つ者向け）：

特別な能力を持つ個人（企業家、科学者、芸術家、スポーツ選手など）は、代替形態での義務の履行を申請することができる。承認されるためには、二つの条件を満たさなければならない。

- **特別な財政的貢献：**例えば、国民一人当たり所得の 3 年分に相当する額を納付する。

- **専門知識による貢献：** 自らの才能を地域社会への奉仕に用いるために、一定の時間を捧げることを約束する（例：起業家への助言、無料の医療診察、教育など）。

調整と免除のメカニズム： 持続可能性を確保するため、国家は必要に応じて期間を一時的に短縮したり、承認される人数を調整したりしてプログラムを規制する権利を有する。また、「代替奉仕」や「特別免除」（非凡な貢献をした個人向け）のケースの審査は、国家奉仕に関する専門機関または州レベルの政府が、透明性のある基準に基づいて決定する。明君と賢人評議会は一般的な原則を設定するのみで、個々のケースには介入しない。

E. 神の秩序の維持：生命と技術に関する境界線

道徳的な共和国は、人間の知性の傲慢さが行き過ぎ、生命を「癒す」と「改造する」ことの境界を越え、神

に逆らい、天理に反する行為を生み出していることを認識しなければならない。

したがって、国家は明確な境界線を設けなければならない。生命と自由意志の神聖な秩序を破壊する行為に対して、国家は承認も、保護も、資金提供も行わず、道徳的な観点からの勧告のみを行う。これらの行為には以下が含まれる。

- **堕胎**：これは「選択の権利」ではなく、この世に来るように定められた生命が転生する機会を奪う行為である。
- **提供者からの人工授精と代理母**：これらの方法は、家族の血縁と神聖な業縁の絆を破壊する。
- **意志と思想への侵害**：すべての技術、特に人工知能（AI）とロボットは、人間を支配するためではなく、人間に奉仕する範囲内で開発されなければならない。以下の行為は、魂の最も深い層に侵入し、被造物と機械との間の神聖な境界を曖昧にするため、支持されない。

- AI またはいかなる技術を用いて、人間であれ動物であれ、生命の思考と自由意志を制御、操作すること。
 - 人間や動物の脳に、その自然な本質を制御または変更する目的で、チップや電子機器を移植すること。たとえこれらのプロジェクトが科学と進歩の名の下に行われたとしても、それらは人間性と自然の秩序の未来にとって、計り知れない脅威である。
 - 人間の脳や意識をロボットの体やコンピュータシステムに統合し、人間を半機械的な生命形態に変えること。
- **人間への遺伝子改変とクローン作成：** これは、神が創造した生命の暗号に介入する、最も傲慢な「神を演じる」行為である。
 - **種の秩序への介入：** 遺伝子改変、不自然な交配、絶滅種の復活の試み、あるいは全く新しい種の創造のために技術を使用することは、すべて傲慢な行為である。これらの行動は、自然が何百万年もかけて築き上げてきた生態系のバランスを破壊す

る。農民が何世代にもわたって行ってきた、自然に従った伝統的な移植や交配の方法は、この範疇には含まれない。

- **臓器移植：** 自発的であっても、ある身体から別の身体へ臓器を移すことは、神が授けたもうた完全な統一体への介入である。それは単なる物質的な交換ではなく、生命間の情報と業力の混乱でもある。
- **他の世界への介入：** もしある日、人類の科学が他の惑星へ旅行したり、他の次元空間に進出したりすることが可能になった場合、不可侵の原則は絶対的に遵守されなければならない。我々は、環境に恣意的に介入したり、資源を収奪したり、そこにいる生命体の社会運営を混乱させたりしてはならない。他の世界から生命体を誘拐または欺いて地球に連れてきて、実験用の「モルモット」として使ったり、「奇妙な生き物」として展示したりする行為も、支持されない行為である。他の世界を侵害する行為もまた、傲慢さの表れであり、予測不可能な業果を生み出すであろう。

強調しなければならないのは、これらの道徳的な境界線は、人間の知性と欲望に基づいて行動している科学者や普通の人々のために設定されているということである。それらは、真の修煉者が、大いなる慈悲と徳をもって、神々から特定の使命を遂行するための直接の指示と許可を受けた特別な場合には適用されない。その時、彼らの行動はもはや人間の介入ではなく、天意の采配の一部となっているのである。

国家は、被害者からの訴えがあるか、または当局が強制、詐欺、人身売買などの犯罪の兆候を発見した場合を除き、上記の行為を行った個人や組織を自動的に罰することはない。生命を真に尊重する社会は、自らの意のままにそれを「改造」しようとはせず、定められた法則と謙虚に調和して生きるのである。

F. 環境

道徳的な社会は、天地を敬うことを知らなければならない。環境政策は、人間の領域での行動を修正すること

と、より深いレベルでの原因を理解することの両面に取り組まなければならない。我々は、北欧諸国や日本のモデルと同様に、世界で最も厳しい排ガスおよび廃水処理基準を採用する。同時に、植林政策では、ユーカリのような土壌に有害な単一栽培の樹木の植栽を禁止し、代わりに多様な自然林の生態系を回復させることに重点を置く。

* * *

第七部：対外関係

道徳的な国家は、孤立した島であってはならないが、世俗の権力闘争に巻き込まれるべきでもない。外交政策は、国内の哲学の反映でなければならない。すなわち、尊重、謙虚さ、そして不動の決意である。

A. 外交政策：平和を愛する精神と不干渉の境界線

この国家は、政治体制やイデオロギーに関係なく、すべての国と外交関係を結び、協力する用意がある。すべての関係の基盤は、互いの信仰、文化、そして主権の独立に対する絶対的な尊重である。

しかし、「内政不干渉」の原則は明確に定義される必要がある。

- **言論において - 道徳の灯台としての責任：** ある政権が、信仰の弾圧やジェノサイドのような、普遍的な道徳的価値を侵害する残虐な行為を行うとき、真実を指摘するために声を上げることは干渉ではない。悪の前での沈黙は、悪への加担に他ならない。我々の役割は、侵略軍としてではなく、暗い場所に光を当てることである。
- **行動において - 主権への絶対的な尊重：** 真の干渉とは、ある国家が、他国の国内政策を変更させるために、強制的措置（経済的、軍事的）を用いる

場合にのみ発生する。しかし、ある国家が別の主権国家に侵攻するとき、それはもはや「内政問題」ではない。その場合、我々は、侵略国の内政に干渉するためではなく、国際秩序と平和を守るために、経済制裁のような具体的な行動をとる権利を有する。

B. 軍事：「中立防衛」のドクトリン

自衛のみを目的とする国防をもって、この国家は平時においていかなる軍事同盟にも参加しない。軍事同盟は、しばしば国を自らのものではない紛争に引き込み、平和を愛する精神に反する約束を伴う。国家の独立と存続が真に脅かされた場合にのみ、正当な防衛目的のための暫定的な同盟の結成が検討される。

C. 国際貿易：絶対的な自由と「密輸」の撤廃

我々の国内経済哲学は、市場メカニズムを尊重することである。国際貿易政策は、その哲学の延長でなければならない。国家は、いかなる輸入税も輸出税も課さない。

この政策の自然な帰結として、ほとんどの商品に対する「密輸」という概念はもはや存在しなくなる。すべての市民は、金、外国為替、あるいはデジタル通貨のような資産を、国境を越えて自由に売買し、輸送することが許可される。唯一の例外は、麻薬や大量破壊兵器のように、社会に明らかに有害であるために絶対的に禁止されている、ごく限られた品目のリストである。

D. グローバル組織：「発言権を持つオブザーバー」としての役割

この国家は、ほとんどの主要な国際組織に参加するが、それは「発言権を持つオブザーバー」という特別な役割においてである。我々は、意見を聞き、共有するために議論の場に参加するが、法的に拘束力のある投票や国際的な軍事活動には参加しない。これは、国家の絶対的な独立を保証する。しかし、我々は常に、国際的な人道支援活動に、自発的に資金と人材を提供することを厭わない。

E. 移民と国籍：自立する者を歓迎し、コミュニティによる選別

我々の哲学は、開かれた国家のそれである。国家は、人の魂を裁く「道徳的な裁判官」の役割を演じない。

- **帰化の基準：**客観的な基準は二つだけである。
 - **経済的自立能力：**安定した職があることを証明する（例：個人は 1 年、家族を保証する場合は 3 年）。
 - **司法記録：**我々は、「贖罪と良心の保護」の原則を適用する。通常の前科を持つ者も入国を許可されるが、監視下に置かれる。国際指名手配中の犯罪者については、国家は、正義の原則、明確な証拠、そして主権の尊重に基づいて国際司法機関と協力し、国家が犯罪者の隠れ家とならないように保証する。特に、信仰や政治的見解を理由に他の政権から有罪とされた「良心の囚人」には、帰化し、正当な市民として保護されるためのあらゆる便宜が図られる。

- **自然淘汰のメカニズム：**我々は、「道德試験」を設けない。代わりに、高い道德的基盤を持つ社会は、不誠実な心を持つ人々にとって、自ずと不適切な環境となる。彼らは居場所のなさを感じ、自動的に去っていくだろう。

F. 国家の規模の問題からの脱却

このモデルは規模に依存しない。むしろ、規模の問題を重要でなくする。なぜなら、真の権力は地域コミュニティに返還されているため、国家が大きかろうと小さかろうと、うまく機能することができるからである。これにより、アメリカや中国のような巨大な規模の国家でさえも、もはや「恐ろしく、横柄」になることはないだろう。なぜなら、膨張主義の動機が根源から断ち切られているからである。

第八部：危機管理と移行段階

A. 国家危機対応メカニズム：内省を先に、応急処置を後に

現代世界では、パンデミック、超大型台風、地震などの災害が発生すると、人々はそれを「自然災害」と呼び、すぐに技術的な解決策に飛びつく傾向がある。しかし、道徳的な共和国は、より深い視点を持たなければならない。

我々は、偶然というものは何一つないということを理解しなければならない。国家規模の災害は、単なる自然の働きの逸脱ではない。それは、社会全体と指導者たちが積み重ねてきた道徳的な過ちを映し出す鏡であり、天からの最も厳しい警告なのである。

したがって、危機における各級指導者の役割は、非常に明確に区分される。

- **州レベルの指導者の役割：**「応急処置」の責任—住民の避難、救援、物理的な被害の復旧—は、地方の指導者に属する。彼らは、国民への被害を最小限に抑えるために、最も迅速かつ効果的に行動しなければならない者たちである。中央政府はこの時、調整役を果たし、国家備蓄を開放し、各州が互いに支援し合える環境を整える。
- **明君と賢人評議会の役割：**彼らの任務は、走り回って部下に指示を出すことでも、表面的な関心を示すために甚大な被害を受けた場所に現れることでもない。この時の彼らの最も崇高な任務は、**内省**である。天が警告を下した時、国家の指導者は最初に耳を傾けなければならない。明君と賢人評議會は、冷静に座り、誠実に内面に向き合い、自らを省み、どの政策が、どの路線が民を害し国を損ない、社会の道徳を傷つけ、天理に背いたのかを検討する必要がある。

明君の真の行動とは、嵐の真っ只中に立つことではなく、そのような嵐が二度と起こらないように、根本からの修正の道を示すことである。

B. 移行の道筋：歴史の自然な目覚め

ここまで読んだ多くの人々は、最も現実的な問いを投げかけるだろう。我々の混沌とした世界から、そのような共和国へは、どうすれば移行できるのか。具体的なステップはどこにあるのか、と。

正直に言うと、私には詳細な行程表はなく、提示するつもりもない。今日描かれるいかなる具体的な移行計画も、傲慢さと近視眼的な行為となるであろう。なぜなら、このモデルは政治革命や上からの布告によって強制されるものではないからだ。それは、社会に「インストール」できるソフトウェアではない。それは、内側からの自然な「芽生え」でなければならない。

変革は、政治家からではなく、普通の個人から始まるだろう—彼らのうちの十分な数の人々が、偽りに疲れ果て、自らの真実へと回帰する旅を始めるときに。それ

は、家族の中で、小さなコミュニティの中で始まり、やがて社会全体の目覚めの波として広がっていく。

したがって、開かれた未来への結びの言葉は、計画ではなく、確固たる信念である。

「私は、この夢が私の生涯で実現するのを見ることを期待してはいない。しかし、人類が偽りの制度に疲れ果てた時、彼らは単純な真理に立ち返るであろうと信じている。すなわち、道を根幹とし、心を主とし、賢才を柱とすることに。」

歴史にはそれ自身の法則がある。我々の任務は、未来の地図を描くことではなく、現在のうちに道徳の種を蒔くことなのである。

* * *

第九部：参考数値に関する付記

親愛なるジュリアンへ

以下の数値およびプロセスは不変の法則ではなく、上記の原則をいかにして実現しうるかについての、私の最初の草案に過ぎない。最終的な詳細設計は、その時代の賢人たちの知恵と合意に委ねられるべきであり、彼らの実際の状況に基づかなければならない。

付記 A：最高指導者および核心的制度に関する原則

1. 明君の家族の所有権と自由

原則 1：任期前後の個人資産の尊重

個人所有権の保全：個人が明君の地位に就くことは、国家への奉仕の行為であり、市民権の放棄ではない。したがって、明君とその家族が就任前に得たすべての合法的な資産、ならびに任期中および任期後に給与および個人的活動から合法的に形成された資産は、他のすべての市民と同様に、私有財産として認められ、不可侵である。

原則 2：家族の労働および事業の自由

近親者のキャリア発展の自由：明君の家族のメンバーは、他のすべての市民と同様に、学び、働き、事業を行い、自らのキャリアを追求する完全な自由を有する。国家は彼らの個人的な発展の道を尊重し、干渉しない。しかし、絶対的な公平性を確保し、利益相反を防ぐため、明君の近親者が営む事業活動または占める地位は、特別な透明性と監督の規則に従わなければならない。例えば、彼らの会社は政府の入札に参加することは許可されない。明君の影響力を利用して私的利益を図るいかなる行為も、重大な犯罪と見なされ、厳しく処罰される。

• 給与：

- 。 給与は、この地位の財政的独立性と尊厳を確保するため、後述の計算式に従って計算される。
- 。 明君は公邸に居住する。必要に応じて新しい宮殿を建設する場合も、費用対効果と最高元首の地位にふさわしいことの両方を満たし、過度に質素であったり、過度に浪費的であったりするのを避けるため、賢人評議会の承認を得なければならない。
- 。 国家はまた、明君の親族（祖父母、父母、配偶者、子、孫）の生活も保障する。この保障パッケージには、国民一人当たりの平均所得の 5 倍に相当する基準で、食費、教育費、住居、交通費の無料提供が含まれる。

明君の給与計算式：

明君の給与 = (一人当たり平均所得) x (基礎係数)
x (責任係数)

- 基礎係数：これは基本的な乗数であり、**15 倍から 25 倍**の範囲で提案される。それは、世界の成功した人材処遇モデルに見合う、豊かな生活水準を明君に保証する。
- 責任係数：この係数は、数値が急激に増加しすぎるのを避けるため、対数スケールに従って、国家の人口規模に基づいて計算される。

例：

- 人口 1 千万人未満の国：係数 = **1.0**
- 人口 1 千万人～5 千万人の国：係数 = **1.2**
- 人口 5 千万人～2 億人の国：係数 = **1.5**
- 人口 2 億人超の国：係数 = **2.0**

適用例：

- ケース 1：シンガポールのような国（人口 < 1 千万人、一人当たり GDP ~\$88,000）

給与 = $88,000 \times (15 \sim 25) \times 1.0 = 132$ 万ドル
～ 220 万ドル

- 。 ケース 2：アメリカのような国（人口 > 2 億人、一人当たり GDP ～\$85,000） 給与 = $85,000 \times (15 \sim 25) \times 2.0 = 255$ 万ドル ～ 425 万ドル

2. 高位職（賢人評議会、立法諮問評議会、教育諮問評議会、最高裁判所裁判官、政府閣僚などを含む）の待遇制度：

- 賢人評議会メンバー：正会員の給与は国民平均所得の 15 倍から 25 倍の範囲、予備会員は 8 倍から 12 倍の範囲とする。
- その他のグループのメンバー：正会員の給与は国民平均所得の 8 倍から 18 倍の範囲、予備会員は 5 倍から 10 倍の範囲とする。

注記：各国の状況や時代によって、適切な数値を選択することを検討する。

3. 任期に関する特別条件：

個人が最高位の権力の座にあまりにも長くとどまることを避けるため、任期に関する特別な規定が適用される。

- 賢人評議会の現職メンバーが明君に選出された場合、その者の明君としての最大任期は **15 年**とする。
- 逆に、明君が退任後に信任を得て賢人評議会に選出された場合、その者の評議会メンバーとしての最大任期も（デフォルトの 25 年ではなく）**15 年**とする。

4. 明君選挙の詳細なプロセス：

- **四つの投票グループ：**
 - 現職の明君（25%）、
 - 賢人評議会（25%）、

- 。 国家大選挙人団（各界の指導者）
（25%）、
- 。 全国民（25%）。
- 当選条件：最高得票数かつ総投票数の最低 40%
を獲得しなければならない。さもないと、上位
2 名の候補者による決選投票が行われる。
- 緊急事態：現職の明君が投票できない場合、その
権限は合理的な方法で再配分される。

信任ブロックの投票メカニズムに関する論考

一人の明君が当選するためには、彼に寄せられる信任は単一の源泉から来るものであってはならない。それは**民衆の心**（社会基盤からの信任）と**賢才の知恵**（能力と徳からの信任）の総和でなければならない。したがって、二つの重要な有権者ブロック、すなわち全国民ブロックと賢才選挙人団の投票メカニズムは、以下のように別々に設計される。

a) 全国民ブロック（重み付け 25%）：

これは全国民の声と承認を代表するブロックである。各市民の投票は、人生経験と判断の成熟度を評価するため、**年齢**にのみ基づいて重み付けされる。このメカニズムは、すべての世代に対する公平性と尊重を保証するため、釣鐘型の曲線に基づいて構築される。

年齢別投票重み付け尺度：

- 18 歳～28 歳：**1 票**
- 28 歳～38 歳：**2 票**
- 38 歳～48 歳：**3 票**
- 48 歳～58 歳：**4 票**
- 58 歳～68 歳：**5 票**（経験と明晰さの頂点）
- 68 歳～78 歳：**4 票**
- 78 歳～88 歳：**3 票**
- 88 歳～98 歳：**2 票**
- 98 歳以上：**1 票**

注記：年齢による重み付け以外、システムの平等性と単純さを保証するため、国民の普通投票に他のいかなる形式の重み付けも適用されない。

b) 国家大選挙人団（重み付け 25%）：

これは会合を必要とする常設の評議会ではない。これは、国家のあらゆる分野における最も優れた頭脳と能力を代表する、**約 2,500 人の特別選挙人**の集合体である。彼らは、専門的な見地と社会的責任の観点から判断を下すため、独立して投票権を行使する。

b.1) 構成：メンバーのリストは、以下のブロックにおける現職の役割と地位に基づいて決定される。

- 行政・公務（20%）：中央政府および各州の高級指導者。
- 経済（20%）：国内最大企業の指導者および上級専門家。

- 宗教・精神（15%）：主要な宗教団体が自ら選出した代表者。
- 文化・芸術（10%）：大きな影響力を持つ芸術家、作家、監督など、職能団体から推薦された者。
- 教育・科学（15%）：名門大学や研究機関の指導者および第一線の学者。
- 市民社会（10%）：実質的な貢献のある政党および社会団体の指導者。
- 政策諮問（10%）：立法諮問評議会および教育諮問評議会の現職メンバー。

b.2) 票の計算メカニズム：

- 一般原則：賢才選挙人団の各メンバーは、基本的に等しい価値を持つ一票を有する。
- **道徳的重み付け**：「道を根幹とする」という哲学を確立するため、**宗教・精神**ブロックに属する代表者の票は、他のブロックに属するメンバーの票よりも特別に高い重み（例：**1.5**

倍または 2.0 倍）を持つ。これは、最高指導者を選出する際に、良心と道徳の声が常に優先的な地位を占めることを保証するためである。

これら数千の独立した票から集計された結果が、この 25%ブロック全体の候補者への支持を決定する。

現職の明君の「動的信任」メカニズム：

- 定期的監督：明君は、10 年目と 20 年目に 2 回の義務的な信任投票に直面する。
- 影響力の決定：任期終了の約 6 ヶ月前に、後継者選挙における明君の投票の重み付けを決定するための最終信任投票が組織される。この投票は、25 年間の貢献全体を評価するため、賢人評議会の票が最も高い重みを持つ電子アプリケーションを通じて迅速に実施される。
- **投票重み付けの枠組み：**

- 。 非常に高い信任（>85%）：票の重みは最大 40%に増加する。
- 。 高い信任（70-85%）：デフォルトの 25%を維持する。
- 。 中程度の信任（50-70%）：票の重みは15%に減少する。
- 。 低い信任（<50%）：票の重みは名誉的な5%のみとなる。

賢人評議会の構造：

- 議決権：全国投票において、各正会員は総重み付けの 1%を代表する。予備会員はすべての活動に参加する権利を持つが、正会員が欠席した場合にのみ代わって投票することができ、その代替票の総数は欠席者の票数を超えてはならない。

5. 各評議会（賢人評議会、最高裁判所、各諮問評議会）の構造と継承サイクル：

「古い竹が新しい筍に道を譲る」同期継承の原則。

制度の円滑な運営を保証し、統一された「選挙シーズン」を創出するため、国家のすべての核心的な評議会制度は、5 年に一度の同期継承サイクルで運営される。具体的には：

- 賢人評議会：25 人の正会員で構成、任期 25 年。5 年ごとに、最も在職期間の長い 5 人のメンバーが選挙によって交代する。
- 最高裁判所：15 人の裁判官で構成、任期 15 年。5 年ごとに、最も在職期間の長い 5 人の裁判官が選挙によって交代する。
- 各諮問評議会（法律、教育など）：25 人の正会員で構成、任期 25 年。5 年ごとに、最も在職期間の長い 5 人のメンバーが選挙によって交代する。

付記 B：詳細な運用規則

1. 司法部門に関する規則：

1.1. 裁判官（最高裁判所および州レベル）の選出および任命プロセス。

1.1.1. 最高裁判所裁判官の選出プロセス：

- **専門家による選考：** 法律諮問評議会が専門家からの推薦を受け付ける窓口となり、能力と法的経験を審査して候補者の最終リスト（例：交代が必要な 5 つのポジションに対して約 15 名）を確定する責任を負う。
- **多層的な選出：** 5 名の新しい裁判官は、最終リストから、4 つの信任ブロックによる加重投票を通じて選出され、各ブロックが 25%の重みを占める：

- 1) **明君**： 行政部門の信任を代表する。
- 2) **賢人評議会**： 道徳と賢明さの保証を代表する。
- 3) **法律諮問評議会**： 一流の法律専門家からの承認を代表する。
- 4) **司法界代表（約 100 名）**： 司法界内部からの信任を代表する。このプロセスは、選出された最高裁判所裁判官が、政治的、道徳的、専門的な威信を兼ね備え、同僚からの尊敬を得ることを保証する。

1.1.2. 州レベルの裁判官の任命プロセス： 州レベルの裁判官の任命プロセスは、分権化と相互監視メカニズムを確保するため、3 つのステップで実施される：

- **ステップ 1：地方での選考**： 各州は「州司法選考評議会」（その地方で最も信頼されている裁判官、弁護士で構成）を設立する。この評議会は、能力と道徳の基準を満たす候補者の最終リストを審査し、推薦する責任を負う。

- **ステップ 2：中央からの承認：** この最終リストは最高裁判所に提出される。最高裁判所は、候補者が国家の共通基準を満たしていることを確認するため、リストを審査し承認する役割を担う。
- **ステップ 3：地方での任命：** 最高裁判所の承認後、リストは州知事に返送される。州知事（州の行政の長）が最終的な決定を下し、このリストから裁判官を選び、任命する。

1.2. 裁判所の権限の限界（政策を判断しない）。 権力の明確な分離を保証するため、裁判所は司法分野において絶対的な権限を持つが、他の分野では厳しく制限される：

- **政策を判断しない：** 裁判所は、明君および政府の政治的、経済的、または外交的な政策決定を判断する権限を持たない。これらの政策の監督は、賢人評議会の政治的監督メカニズムに属する。
- **市民としての資格のみを判断する：** 裁判所は、公務員（明君を含む）が一個人として犯罪を犯した

場合（例：汚職、刑事事件）にのみ、その者を判断する権限を持つ。裁判所は、その公務員が国を統治する権限の範囲内で行った行動を判断する権限を持たない。

1.3. 民事・経済事件のための民間仲裁メカニズム。

- **原則：** 国家は、迅速性、柔軟性、および高度な専門性を確保するため、民事および経済紛争を民間の仲裁センターを通じて解決することを奨励する。
- **国家の役割：** 国家はこれらのセンターを直接運営しない。代わりに、国家は民間の仲裁組織の設立と活動のための明確な法的枠組みを作成する。
- **法的効力：** 民間仲裁人の裁定は、法的に拘束力のある価値を持つものとして認められる。国家の裁判所制度は、これらの裁定を執行し、法の厳格さを保証する責任と権限を持つ。

2. 治安および市民秩序のための部隊に関する規則：

2.1. 組織と装備に関する原則：

- **部隊の最小化：** 軍隊は防衛に必要な最小限のレベル（例：通常の規模の 10 分の 1）に維持され、警察力もまた、高い道徳的基盤と低い犯罪率を持つ社会に適した、非常に簡素なものとなる。
- **民間人による武器の絶対的禁止：** 国家は、すべての市民が銃弾、爆発物、毒物などの殺傷能力のある武器を所有、保管、および使用することを絶対に禁止する。国家は、武力の行使に関する完全な独占権を保持する。
- **警察の武器装備の管理：**
 - 市民と頻繁に接する民間警察部隊（交通警察など）は、**絶対に銃器を装備しない**。
 - 刑事警察部隊のみが、特に危険な任務を遂行中であり、直属の上官から特定の命令に

よって許可された場合に限り、銃器を携行することが許される。

2.2. 役割と権力の限界に関する原則：

- **軍の政治への絶対不介入：** 軍は、政治活動、権力闘争、またはクーデターへの参加を絶対に禁じられる。明君もまた、政治的目的で自らの地位を守るために軍隊を使用することは許されない。軍の忠誠は、いかなる個人に対してでもなく、憲法と国家に向けられる。
- **軍の戦闘への動員規則：** 明君のみが軍を戦闘に動員する命令を下す権利を持ち、それは賢人評議会のメンバーの過半数の支持を得た後に限られる。
- **デモにおける対応規則：**
 - 軍は、市民のデモに介入することを絶対に禁じられる。
 - 警察は、秩序を保護し、過激派からの暴力行為を防ぐために存在するが、平和的なデ

モを弾圧するために武力を行使することは絶対に許されない。

- 。 デモに参加する市民も、いかなる種類の武器（銃、ナイフ、火炎瓶など）の携帯を禁じられる。

- **住居の不可侵権**：警察は、家主の同意または裁判所の令状なしに、市民の家に任意または強制的に立ち入ることはできない。例外は、人命を救うための緊急事態（例：火災、内部に生命の危険にさらされている被害者がいる場合）にのみ適用される。

3. 市場および独占禁止に関する規則：

3.1. 一般的な独占禁止原則と「抱き合わせ販売」の禁止：

- **成功と濫用の区別**：国家は、能力と創造性によって市場支配的地位を達成した企業には干渉しない。しかし、国家は、**談合**による価格設定、悪意のある略奪的価格設定、または競合他社を排除す

る性質を持つ買収行為など、競争を阻害するために支配的地位を濫用する行為を厳しく罰するために、法律と裁判所制度を利用する。

- **「抱き合わせ販売」の絶対的禁止：** 強制的な販売行為（タイイング、または「ビールとピーナッツの抱き合わせ販売」）はすべて禁止される。企業が顧客に主製品（B）を購入する条件として副製品（A）の購入を強制することは、銀行、不動産から小売業まで、すべての業界に適用される違法行為である。

3.2. 自然独占産業（電力、石油など）の監視と競争メカニズム： 国家の電力網や石油パイプラインシステムなど、インフラが自然独占の性質を持つ産業に対して、国家は、インフラの効率を確保しつつ、小売段階での競争を生み出すための分離モデルを適用する。

a. インフラと小売の分離：

共通のインフラ（電力網、パイプラインなど）の運営は、単一の民間企業（「総公社」）が担当する。しか

し、国民への直接の配給と小売は、多数の地域に分割され、他の様々な民間企業に**公開入札**される。

b. 競争と淘汰のメカニズム：

* 各地域での配給および小売の権利は、定期的に入札にかけられる。このサイクルは、投資家にとっての安定性と顧客への定期的な説明責任とのバランスを取るため、各国の状況や時期に応じて、1 年から 3 年の範囲で柔軟に設定することが提案される。

* 各サイクルの後、契約の更新または新しい入札の実施は、その地域の顧客満足度評価指数に依存する。

* ある企業の評価点が国民によって一定のしきい値（例：10 点満点中 5 点）以下に採点された場合、その企業はその地域での事業権を自動的に失い、競合他社のために新しい入札が開かれる。

c. 独立監視委員会の役割：

国家は、これらの産業のために、簡素で独立した監視委員会のみを維持する。委員会の役割は以下の通りである。

* 透明性のある入札を組織する。

* 国民の評価点を収集し、公表する。

* 消費者保護のための一般的な規則を設定する（例：機器の強制購入の禁止、料金表および各種手数料の透明化）。

3.3. 公有財産（資源、不動産）の競売に関する原則：

公有財産のすべての競売活動は、以下の厳格な原則に従う。

a. 一般原則： * 鑑定と最低価格：

各競売の前に、国家は一つまたは複数の独立した鑑定機関を雇い、資産価値を公に評価させる。この結果に基づき、国益を保護するために「最低価格」（最低税率または最低開始価格）が設定される。

*** 入札辞退に対する制裁：** 落札後に任意に辞退することは禁止され、極めて厳しい財政的制裁に直面することになる。

b. 資源採掘権の競売に関する特別規則：

* **二重基準：** 落札企業は、(1) 最も高い提案税率と (2) 最良の環境保護措置に関するコミットメント、という二つの要素の組み合わせに基づいて選ばれる。

* **入札辞退に対する制裁：** 落札後にプロジェクトを放棄した場合、その企業は初年度に予定されていた投資費用の非常に大きな割合（例：70%）に相当する罰金を科される。

c. 不動産の競売に関する特別規則：

* **入札辞退に対する制裁：** 市場を操作する投機行為に対抗するため、企業が競売で落札したにもかかわらず、公表された厳格なスケジュール通りに支払わなかった場合、落札価額の 50%の罰金を科され、その資産は没収される。

3.4. 短期投機（「波乗り」）対策メカニズム：

長期投資を奨励し、市場に「人工的な熱狂」を生み出す行為に対抗するため、資産取引には最低保有期間に関する

る規制が適用される。目的は所有権に干渉することではなく、持続可能な価値の創造へと投資活動を方向付けることである。

- **不動産について：** 個人または組織は、不動産を購入した後、1 年以内に購入価格より高い価格で転売することは許可されない。
- **証券について：**
 - 同様に、投資家は、6 ヶ月以内に購入価格より高い価格で株式を転売することは許可されない。
 - 6 ヶ月の期間経過後も、高頻度取引をさらに抑制するため、利益部分に対して 0.1% の取引手数料が徴収される（売却価格が購入価格を上回る場合にのみ徴収）。

3.5. 消費者保護規則（録音権、クーリングオフ期間など）：

取引における力の均衡を図り、国民を保護するため、以下の規則がすべてのサービス産業に適用される。

a. 義務的な透明性の原則：

すべての企業、信用機関などは、すべての商品パッケージ、サービス、および付随する条件を、自社のウェブサイト上で公式かつ詳細に公開することが義務付けられる。

「口頭による強制」で、公表された方針と異なる行為はすべて違法である。

b. 録音権：

すべての市民は、サービス提供者との相談および取引の全過程を録音する法的権利を有する。サービス提供者は、この権利について顧客に通知する義務がある。

c. 副製品の「クーリングオフ期間」：

主製品/サービスに付随して販売されるいかなる副製品/サービス（例：ローンに付随する保険、自動車に付随するアクセサリパッケージ）についても、顧客には「クーリングオフ期間」（例：14 日間）が与えられる。この期間中、彼らは理由を述べることなく副製品をキャン

セルし、全額返金を受ける権利を有し、このキャンセルは主製品の契約に絶対に影響を与えてはならない。

3.6. 経済違反に対する制裁の枠組み：

顧客を騙したり強制したりする経済違反（例えば、ローンを融資するために保険パッケージの購入を強制するなど）に対しては、絶対的な抑止力を確保するため、多層的な制裁の枠組みが適用される。

a. 取引に対する制裁： 違反と判断されたすべての取引は無効となる。違反した当事者（企業、銀行）は、不正に徴収した全額を返金するだけでなく、顧客に適切に賠償しなければならない（例：強制的な貸付の場合、銀行は貸し付けた元本全額を失うとの判決を受ける可能性がある）。

b. 個人に対する制裁： 違反行為を直接実行した個人、およびその方針に責任のある管理職、指導者は解雇され、長期間（例：5 年、10 年、または重さに応じて永久に）それぞれの分野での**就業を禁止される**。

c. **組織に対する制裁**：賠償に加えて、違反した組織は、例えば違反が発生した会計年度の**全利益を没収**され、国庫に納めるといった、極めて重い罰金を科される。

* * *

第十部：書簡の結びの言葉

A. 伝言と委託

ジュリアン、君へ。忍耐強く耳を傾け、これらの思索の dòng を引き出してくれた君へ。

私は、このモデルが明日にも適用されるなどという夢を見ることはしない。それには、権力と利益の幻想を捨て、知恵と道徳を信じる覚悟のある社会が必要だからだ。しかし、いつの日か、人類が権力闘争と腐敗した制

度に疲れ果てた時、この言葉が、より良い世界のための一つの煉瓦、一つの種となることを願っている。

君なら、その筆を通じて、この種を目覚めつつある魂たちの土壌に蒔く方法を知っていると信じている。未来の世代のために、問いを立てるのを手伝ってほしい。我々は票の代わりに徳によって指導者を選ぶことができるだろうか？賢人評議会は我々を暗闇から導き出すことができるだろうか？

B. 就任式の日の光景

知っているかい、ジュリアン。時折、長い思索の夜に、私はこのモデルが真にもたらすであろう祝祭の日を思い描くことがある。それはメカニズムの一部ではなく、それが目指す最も美しい精神的な報酬なのだ。

新しい明君が選ばれる日、威勢を誇示する軍事パレードはないだろう。代わりに、最も古い寺院や大聖堂から大洪鐘の音が、人々の心の安寧を告げるかのように、一斉に鳴り響く。

街路ごとに、人々はスローガンを叫ぶために通りに繰り出すことはない。彼らは家の扉を開け、香り高いお茶を出し、隣人と共に祝うだろう。不確かな未来への重荷は、まるで下ろされたかのように。年長者たちは新しい明君の徳についての物語を孫たちに語り、若い世代は地域社会への奉仕活動で祝うだろう。

そしておそらく、最も美しく、最も神聖な光景は、何百万人もの前での壮大な就任演説ではないだろう。代わりに、**天壇**の荘厳な空間の中で、少数の人々の立ち会いの下、**就任の儀式**が執り行われる。**元明君、賢人評遺会全員、そして国家の最も優れた数百人の代表者**たちだ。

賢人評議会を代表する一人の長老が、権力を授けるためではなく、天地の前で天命を証明するために、儀式を執り行う。そして、絶対的な静寂の中、新しい明君は自らの手で祭壇の前に一本の沈香を灯すだろう。それは、天上からの賢明さを請い願う祈りのように、そして統治するためではなく**奉仕する**ために来たのだという、謙虚で、言葉のない約束のように。

この行為は、国家の長老たちの前で行われ、さらに深い意味を持つ。それは、証人のいる継承であり、名誉と調和の中での責任の移譲なのだ。

それは、人々が一人の個人を祝うのではなく、自らの子供たちの未来そのものを祝う祝祭の日なのだ。彼らが喜ぶのは、権力ある王を得たからではなく、従うべき尊敬すべき長老を見出したからなのだ。

署名

私はこれらの考えを、君と、そして未来の世代のために残す。

真理を探求する旅路の一友人より。

* * *

おわりに

元大統領との四日間の対話が終わり、その後、予期せぬ『心の書簡』が届いた時、私はこの旅路が二つの部分か

らなるのではなく、一つの統一された全体なのだと気づいた。私の中に残ったものは、政界の秘密ではなかった。それは、現代世界が機能している価値体系全体を、我々に見つめ直すよう促す、深い静寂だった。

インタビューは、時代の病に対する深い診断としての役割を果たした。すなわち、物質的な基盤の上に築かれた制度の失敗と、その内なる人間の魂の退廃である。元大統領は、「渡し守」として、静かに私をそれらの思想の川を渡って導いてくださった。

そして『心の書簡』は、閣下ご自身がおっしゃったように、その病を治療するための政治的な薬ではない。それは、病が根源から取り除かれた後に再生しうる、健康な身体の姿なのだ。

したがって、元大統領が残された最後のメッセージは、変わることなく、そしてさらに深遠なものとなっている。いかなる仕組みも、たとえ『心の書簡』にあるように完璧であっても、空っぽの魂を持つ人間によって運営されるならば、崩壊するだろうということ。道徳的な共和国は、政治革命によって「築かれる」ことはできず、それは個々人の道徳的なルネサンスから「芽生え」なければならないのだ。

この本は、ゆえに、我々に二つの遺産を残す。自らを映し出す一枚の鏡と、もし我々がその鏡を直視する勇気を持つならば、形を成しうる世界の素描である。

最も重要な旅路とは、閣下が示唆されたように、完璧な制度を探す旅ではない。自らの真の自己を取り戻す旅なのだ。なぜなら、より良い世界は、政府の会議室から生まれるのではなく、目覚めた人々の心の中の静寂から生まれるのだから。

ジュリアン・リー

THE LIVES MEDIA

* * *

著者および THE LIVES MEDIA プロジェクトにつ いて

著者について

ジュリアン・リー(Julian Lee)は独立系の著述家であり、政治、文化、社会、科学、精神性などのテーマを通して、真理の探究、良心の呼び覚まし、人類の運命についての深い思索を綴っています。

彼の作品の多くは、現実のインタビューをもとにしており、誠実さ、感情の深さ、そして啓発の精神をもって記録されています。

プロジェクトについて

本書は、THE LIVES MEDIA によって出版されたシリーズの一部です。THE LIVES MEDIA は、時代を超えた響きを保存し広めることを使命とする、グローバルなビジョンを持った独立した出版イニシアチブです。日々のニュースを追いかけるのではなく、私たちは人間の意識の深くに触れることができる本を目指しています。

連絡先

- ☆ ウェブサイト：www.thelivesmedia.com
- ☆ E メール：editor@thelivesmedia.com
- ☆ QR コード：



同プロジェクトの他の作品

THE LIVES MEDIA による他の出版物もご覧いただけます：

－ 紅塵、金光 (Red Dust, Golden Light)

- 政界引退後：その遺産 (After Power: The Legacy)
 - 本書
 - 科学の黄昏と黎明 (Sunset and Sunrise of Science)
 - 紅の帳 (The Red Veil)
 - 時の以前の響き (Echoes Before Time)
 - 俗世間へ (Entering The World)
 - 最後の鐘 (The Last Bells)
 - 我々以前 (Before Us)
 - 千の人生 (Thousand Lives)
-

**この度はお手に取っていただき、誠にありがとうございます
ます。 真実を探求するあなたの旅路に、神と仏の祝福が
あらんことを。**